

研究紀要

令和2年度
第44号



静岡県博物館協会 研究紀要

第44号／令和2年度

表紙／シンポジウム「これからのミュージアムを考えよう」
実施の様子

目 次

04	美術品の来し方行く末 -ささやかな寄贈行脚記-	掛川市二の丸美術館・掛川市ステンドグラス美術館 日比野 秀男
14	静岡県博物館協会2020年度事業 シンポジウム「これからのミュージアムを考えよう」	浜松市美術館(静岡県博物館協会事業推進グループ) 島口 直弥
18	これからのミュージアムとこれからの静岡県博物館協会	静岡県立美術館(静岡県博物館協会会長) 木下 直之
22	ミュージアムと学芸員-コロナ禍のあとさき	元立教大学文学部 川口 幸也
26	絵画修理参考文献案内	京都国立博物館 森 道彦 文化庁 中野 慎之
32	静岡近代美術年表稿 昭和戦後編 7	立花 義彰
56	博物館における小学生を対象とした STEM/STEAM教育プログラムの開発と実践 -博物館ならではの科学教室の在り方の模索-	ふじのくに地球環境史ミュージアム 坂田 尚子・池谷 渉 菅原 大助・山田 和芳 静岡大学創造科学技術大学院 熊野 善介
62	2020(令和2)年度 協会役員会、総会報告	
64	静岡県博物館協会 研究紀要投稿規程	

編集・発行

静岡県博物館協会(事務局)

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2

静岡県立美術館内

電 話・054-263-5857 FAX・054-263-5742

デザイン 有限会社サイズ

発行日 2021年(令和3年)3月31日

印刷 有限会社 橋本印刷所



広島見市筆鳩図 1幅

徳島県立近代美術館所蔵

昭和5年(1930) 絹本着色 縦58.5×横71.0cm

昭和5年(1930)、大倉喜七郎が主宰して開催した「日本美術展覧会」(通称、「ローマ展」)に出品された作品。

美術品の来し方行く末 - ささやかな寄贈行脚記 -

掛川市二の丸美術館・掛川市ステンドグラス美術館 日比野 秀男

はじめに-近代日本画の華展-

サブタイトルに「1930ローマ展開催90年」のついた『近代日本画の華展』が先ごろ(2020年8月1日~9月27日)、大倉集古館(東京・虎ノ門)で開催された。展覧会のチラシには以下のような解説があった。

大観のパトロンでもあった大倉喜七郎の全面支援を受けて、昭和5年にローマで開催された「日本美術展覧会」は、団長を務めた大観を筆頭とする院展(再興日本美術院)系の画家のみならず、川合玉堂、竹内栖鳳ら官展系の画家たちも含む総勢80名が参加した、当時の日本画壇における一大プロジェクトでした。



挿図1 「近代日本画の華展」チラシ表

このように「ローマ展」の通称で知られる昭和5年(1930)の「日本美術展覧会」は当時の日本画家の全貌を知り得る展覧会でもあった。画家の数は80名、出品作品数は168点である。

個人的なことで恐縮であるが私の家にこの展覧会に出品された2点の作品が伝存していたことから、それとその他数点の作品の行く末について行脚した顛末をご紹介したい。これらの作品は何らかの機会がなければほとんど行方定まらぬこととなっていたに違いない。市場価値を失った美術品が行方定まらぬこととなるのも仕方のないことかもしれない。しかしながら美術館活動の着実な進展が後述する通りこれらの美術品を救うことになったとも言えよう。

美術品安住の地探しの行脚はわたしにとって美術館の在り方というものを改めて教えてくれた。ここでは紙面を借りて行脚の顛末をご紹介するとともに日頃の着実な調査研究、展示という美術館活動の重要さというものについて改めて知っていただければ幸いである。

まずは「ローマ展」に出品された作品が、なぜ、私の家に伝わったか、そのことから解説してゆくこととしたい。自分の家のことでお恥ずかしいが、父親が健在の時には作品について何も話を聞いていなかった。父親は理系の人間で美術など全く縁もゆかりもない。旧制浜松高等工業学校応用化学科(現在の静岡大学工学部)を昭和6年に卒業し、その後、東北帝国大学金属材料研究所に研究者として勤務し、昭和11年に大倉組に就職した。旧制浜松高等工業学校応用化学科の卒業アルバムが手元に残っていたが、厚さ3cm、B4くらいのサイズでビロード貼りのものであった。余談であるが、そのアルバムには昭和天皇が昭和5年(1930)5月に高柳健次郎助教授(当時)が発明したテレビを見るために行幸された写真がかなりのページを占めて掲載されている。校舎の航空写真も掲載されており、いかにテレビの発明が大変なことであったかが知られよう。100名に満たない1学科の卒業アルバムでなぜこれほど豪華な卒業アルバムにしたか不明であったが、丁度、テレビの実験成功が昭和元年(1926年12月25日)で、昭和天皇が行幸されたのは、その3年半後という時期であった。

これほど豪華な卒業アルバムを持て余していたが、現在の静岡大学の工学部の図書館に収蔵していただくことが良い

と考え同大情報学部の人知人に仲介をお願いしたところ同大浜松工業会（同大工学部の同窓会）で受け入れてくれることになった。これも浜松は戦災で旧制浜松高等工業学校時代のほとんどの資料を失っており、卒業アルバムしかも昭和天皇行幸写真が掲載されている卒業アルバムは大変貴重な資料であるということ喜んでいただいた。天皇が学校を行幸されるなどということは普通ではありえないことであり、旧制浜松高等工業学校にとっては特別な時期であったに違いない。

亡父が旧財閥大倉組に就職したのは化学系の会社を開設するためであったようで、大倉組がさまざまな事業を推進してゆくために雇われたのではなかろうか。ネット上のウィキペディアなどで財閥大倉組についての解説には以下のようなことが紹介されている。

大倉組は実業家大倉喜八郎（1837-1928）が一代で創設した財閥。幕末・維新の動乱に乗じて銃砲販売で台頭した彼は、明治期に軍需物資用達などの政商活動や貿易活動を中心に事業を拡大したが、そこで蓄積した資本を基礎に、合名会社大倉組（1893設立）を持株会社とし、大倉商事、大倉鉱業、大倉土木の直系3社を事業の中核とするコンツェルン機構が第1次世界大戦期に形成された。また彼は財界の有力者として多数の会社の設立に関与し、出資していたため、昭和初期には投資先会社数が100社以上にのぼり、巨大総合財閥（三井、三菱）には及ばないものの、第二級の資本規模を有する財閥に発展した。

掛け軸・古本・仏壇

お持ちになっていたほうが良いですよ

これは、数年前、東京の老舗の美術商を訪ね、わたくし個人所有の数点の掛け軸をお見せしたときの店主の答えであった。この言葉にめげず、ここ数年のうちにわたくしが所蔵していた美術品を徳島県立近代美術館、高知県立美術館、千葉市美術館、松浦史料博物館に寄贈させていただいた。先方にとっては若干押しかけ寄贈という面もあるかもしれないが、それなりに意味のある作品ということで受け入れていただいたものと思われる。

この行脚の顛末を語ることはある一面美術館というものを知っていたわたくしであったために実現できたという気がする。

もし、寄贈を受け入れられなければ、これらの美術品は死蔵してしまう、そして最終的には二束三文で処分してしまうということになってしまったのではないと思われる。

わたくしは相続で数点の美術品を引き継いだわけであるが、両親が美術品に興味を持っていたというわけではない。父親の会社が旧大倉財閥系で数点の美術品は戦後間もないころ大倉家から引き継いだということである。そうした作品の中で取り合えずは正月に床の間にかける掛け軸であるから大事であるということを承知していたくらいである。申し訳ないことにわたくしも作品を別段調べてみようなどという気もなくそのままにしてきたが、いざ相続し、色々片付けなくてはということで嵩張るものの処分など困ったものだというくらいの気持ちであった。

それでも作品を調べなおし、何とか作品の行く末をを考えていたことから所蔵先が見つかったことは「美術品の行く末」に結末をつけたということで一つの仕事をしたような感じがしないわけでもない。

前述した「お持ちになっていたほうが良いですよ」という言葉を聞いて、以前、同じような言葉を聞いたことをすぐに思い出した。それは、古本屋さんに自宅に来てもらい、あらかじめ処分する古本を車に積んだ後、私が岩波書店の『奈良六大寺大観 全14巻』と『大和古寺大観 全7巻』を出してきて、こんなのはどうですかと聞いたとき、やはり同じように「お持ちになっていたほうが良いですよ」という言葉であった。

うかつな私でも何となく売れないから引き取れないという返事であることを感じた。それでも私から再度…

将来なんとかかりますかねー

と聞いてみたが何とも返事がなかった。つまり、将来何ともならないということであろう。ネットで確認したところ、いずれも全巻揃いで2万円前後で購入できる。

ずいぶん以前、百科事典や文学全集など自宅の書棚にあるのが調度品であった時代があった。応接間に少しは文化的な香りをということであろうか？ いったい、あれはなんだったのだろう。読まれない見られないだけでなく邪魔になってしまったということである。

静岡新聞社が昭和53年、『静岡大百科事典』という本を出版した。静岡県のあらゆることを網羅した内容でA4判で969頁である。私も数多くの項目を担当し執筆した。文化財に関するものならば何でも私のところに来た。丁度そのころ全国

的に各県ごとの百科事典が出版され、静岡県でもそれに乗ったということであろう。定価2万円であったが、ずいぶん売れたはずである。特装版3万円のものまで販売している。これも並版ならば古本で2千円から買うことができる。1家に1冊というような触れ込みであった。今ならばネットで瞬時に豊富な情報を手に入れられるが、40年前は紙媒体が貴重な情報源であったということであったのであろう。

いつ頃まで大型の美術全集が出版されたかわからないが、それらの行く末を考えるとタイヘンなことは確かである。

「所さん！大変ですよ」をもじって言えば、

「今、古本が大変ですよ」

「今、掛け軸が大変ですよ」

といったところであろうか？同じ番組で

「仏壇が大変ですよ」

という放送をたまたま見た。私の自宅にも大型の仏壇があるので、これまた、何とも大変なことである。番組の中では「仏壇」は模様替えをして活用されているという内容であった。

番組で紹介していたのは仏壇が東南アジアに輸出され、大いに活用されているという内容であった。その番組を見ると仏壇の中をきれいにし、小物などの調度品入れとなっているようである。しゃれた家具の一つとして仏壇の荘厳さが土地の人々に受けているということであった。

私のところは浄土真宗なので間口1間の仏壇がある。おそらくは明治から大正年間頃に造られたものであろう。間口が1間ほどあるが解体できるようになっており、移動も薄板ベラのようなものを仏壇の下にかませれば簡単に動くようになっている。細部を見ると組み立て式にもなっているようである。

私の母親が亡くなった時の通夜では仏壇を移動して、扉を広げ丁度孔雀が羽を広げたような状態にした。横幅3～4メートルの仏壇となる。部屋の西側に置いて扉を開き、その前に故人に寝ていただき北枕で通夜を行った。故人の背後は西方浄土である。仏壇など普段触ることはないが、いろいろ便利にできている事がわかった。

掛け軸、古本、仏壇と話が進んできたが確かに古本屋さんの前を通ると全集もの特に美術全集のような大型本は山積みになり悲惨な状態になっているのを見える。

掛け軸も同じようなことであった。仏壇などはさらに大型であるから何とも言いようがない。前述した番組の中では大型

倉庫の中で大変な数の仏壇が納められていた。

1930年ローマ展(日本美術展覧会)

前述した東京の美術商に持参した日本画の一部について、ある美術館の学芸員に手紙を書いた。それは

わたくしがそちらの美術館が所在する地域の画家の作品を所蔵しているが、ご興味はありませんか、もし、関心があるようでしたら、寄贈することとしたい。

というものであった。その前後に一度電話で話をし、資料を送った。

残念ながら、その美術館からはその後何ら連絡がなかった。

古本や美術品は市場に出回ればだれか必要とする人もあるかもしれない。美術館に入れば二度と市場に出なくなり、美術商にとって美術館に作品を納めるということは自分で自分の首を絞めるようなものである。作品さえしっかりしていれば、同じ作品で何度か商売になるであろう。しかしながら一般的に知られる画家の作品であれば少しは興味を持つ人もいるのであろうが、市場価値の無い作品はほとんどは忘れられてゆくものである。昨今の美術館の展覧会を見てもポピュリズムにあふれていると言えよう。

さて、わたくしが相続した掛け軸のうちの2点は昭和5年(1930)大倉財閥の大倉喜七郎が資金提供し、当時のイタリア首相ムッソリーニのてこ入れもあってローマで開催された通称「ローマ展」で知られる「日本美術展覧会」に出品されたものである。

昭和5年(1930)4月26日から6月1日の間、パラッツォ・ナツツイオナーレ・デッラ・エスポジツツイオーネ(Palazzo nazionale della Esposizione)で開催された「ローマ展」は、大倉喜七郎(1882-1963)が企画、全費用を負担した大規模な展覧会である。今日、大倉集古館に収蔵されている横山大観の《夜桜》《山四趣》《瀟湘八景》、前田青邨《洞窟の頼朝》、竹内栖鳳《蹴合》、小林古径《木菟》さらに徳島県立近代美術館所蔵の廣島晃甫《踏青》をはじめ近代日本美術を代表する作家80人、作品数168点が展示された。国の重要文化財に指定されている作品も多く、いかにこの展覧会がこの時代にとって重要であるかが良くわかる。



挿図2 「ローマ展」開催会場パラッツォ・ナツィオナーレ・デッラ・エスポジツィオーネ (Palazzo nazionale della Esposizione)

今日の評価からみても大変な作品が展示されたものである。しかしながらこの展覧会が開催されてから90年を経て「ローマ展」に出品された作品のすべてが近代日本美術を代表するものになっているかといえは必ずしもそうは言えない

私が相続した美術品は昭和5年の時点では評価されていたが、今日、美術品市場には見放されつつある作品ということは確かである。この「ローマ展」の出品作品については草薙奈津子氏の「羅馬開催日本美術展について」(『「帝国」と美術：一九三〇年代日本の対外美術戦略』2010年)に詳しいが、わたしのところには次の2点があった。

廣島晃甫筆 鳩図 1幅 絹本着色 縦58.5×横71.0cm

広瀬東畝筆 双雄図 1幅 絹本着色 縦158.7×横57.0cm

前述したとおり、老舗の美術商からは見放され、ゆかりの美術館の学芸員からは無視された作品である。

廣島晃甫筆鳩図(「ローマ展」出品)



挿図3 廣島晃甫筆鳩図(カラー図版参照)

ちょうどそんな状態であった平成29年暮、廣島晃甫という画家が徳島県出身者であるということを承知していたことから、たまたまネットで徳島県立近代美術館のホームページを見ていた時、廣島晃甫回顧展が開催されていることを見つけた。早速、図録を取り寄せてみたところ担当した森芳功(もり・よしのり、企画交流室長(当時))氏の論考で廣島晃甫の全貌を知ることができた。《廣島晃甫筆 鳩図》については年表の中でローマ展に出品されたと記されているのを見つけた。

早速、わたしは徳島県立近代美術館に《廣島晃甫筆 鳩図》の画像のプリントを同封し、わたくしが、現在、相続し所蔵しており、そちらでご希望があれば寄贈する気持ちがあることを手紙に記した。亡父が旧大倉財閥系の会社に勤めていたことから、戦後間もないころ、大倉家から譲り受けたものであることを伝えた。同館からは早速、拝見したいという連絡をいただき、拙宅でお見せしたところ大変喜んでいただき、「ローマ展出品の作品が現存しているなど全く想像もつかなかった」ということを話された。そして、「作品の受贈については館で相談するので後日連絡します」と、いうことであつた。

廣島晃甫(ひろしまこうほ、1889-1951)は徳島県出身の画家で東京美術学校日本画科を卒業し日本画だけでなく版画にも手を染めたが大正から昭和の初めにかけては帝国美術院に出品した。東京美術学校日本画科では寺崎広業、結城素明に師事、かなり多くの画家と交流を結んでいたことが前述した図録の年表を見ると理解できる。大正8年(1919)第1回帝国美術院美術展覧会(帝展)に出品し特選となった《青衣の女》は大正10年(1921)の再制作品が東京国立近代美術館の収蔵となっている。大正8年制作の原画は帝展京都会場場で暴漢により墨塗の被害を受けたことから再制作したものである(『廣島晃甫回顧展図録』の作品解説)。



廣島晃甫筆鳩図(部分)



挿図4 『廣島晃甫回顧展図録』

「ローマ展」には廣島晃甫の作品は《踏青》(徳島県立近代美術館蔵)と《鳩》の2点が出品されている。当時の晃甫が画壇で活躍していたのであるが、必ずしも大観を取り巻く画家としての様子はうかがえず、わたくしの個人的な推測では各画壇から画家を選抜するだけではなく、地域的なバランスも考慮し、徳島県出身者ということで廣島晃甫が選抜されたような気がする。それは前述した「ローマ展」に出品されたわたくしが所蔵していた2点が徳島県、高知県の画家であるというだけでなく、そのほか三重県の画家、神奈川県画家など今日ほとんど忘れられた画家の作品も拙宅に伝わっており、「ローマ展」開催ということで大変な数の作品が大倉財閥あるいは横山大観の下に全国から集められ、その中から168点が選ばれたのではないかとわたしは考えている。

《廣島晃甫筆鳩図》の落款は「晃甫作」とあり、白文方印「晃甫」が捺されている。伝統的な花鳥画ではなく、鳩(にお)という鳥だけを大きく描き、近代的な日本画であることが良く感じられる作品である。制作年は記されていないが、「ローマ展」が開催された昭和5年(1930)前後としてよいであろう。

「ローマ展」が開催される経緯については前述した草薙奈津子氏の論考をはじめ既に多数紹介されているが、大倉財閥の総帥・大倉喜七郎がイタリア首相ムッソリーニに、大観が描いた《立葵》を寄贈したのを機に、ローマでの日本美術展開催が決定した。イタリアに日本美術を紹介するだけでなく、

ローマを訪れている欧米人に日本美術を紹介し、最終的には美術を通じて海外から日本へひとびとを誘致しようという壮大な理想が秘められていたともいわれている(「佐藤美貴(横山大観《夜桜》について」2001年、『横山大観展図録』三重県立美術館))。

廣島晃甫の作品は伝統的な日本画の人物画があるかと思えば大正年間には版画取り分け創作版画の設立に関わり作品を残している。さらに、その後は再び日本画に取り組んでいる。

《鳩図》は多様に変化する廣島晃甫の作品の中で本格的な日本画家として仕事を残したある一面を示しているものであると言える。

いずれにしても平成31年3月、徳島県立近代美術館に寄贈が受け入れられ平成31年春の新収蔵品展において公開された。この展示ではローマ展の大型図録の《鳩》のページと併せて展示された。



挿図5 徳島県立近代美術館展示風景

展示台に「ローマ展」の大型図録が鳩図の掲載ページを開いて置かれ、壁面最初に鳩図が展示されている。

前述した平成29年の廣島晃甫回顧展は「初の回顧展」とチラシにあるが、この展覧会がなければ徳島県立近代美術館と連絡を取ることもなかったであろう。

次にローマ展の出品作である《広瀬東畝筆双雉図》について徳島県立近代美術館の担当者から紹介を受けて高知県立美術館と連絡を取る事となった。

広瀬東畝筆双雉図(「ローマ展」出品)

広瀬東畝(ひろせとうは、1875-1930)は高知県の画家。

24歳の時上京し、荒木寛畝(あらきかんぼ)に師事し文展、帝展に出品。優雅で温雅な花鳥画を得意とした。広瀬東畝の作品で「ローマ展」に出品された作品は《双雉》と《飛鴨》の2点である。



挿図6 広瀬東畝筆双雉図

《双雉図》は縦長の大幅で桜と番いの雉を描いた作品で装飾性に富んだ作品であり伝統的な日本画である。

高知県立美術館と連絡を取り、《双雉》も無事に寄贈を受け入れられ、令和2年4月の高知県立美術館の企画展『収集→保存 あつめてのこす』展で紹介された。美術館における「収集」「保存」という機能に「着目してコレクションを展観することで、当館のこれまでの作品収集にまつわる歩みを可視化すると共に、作品をいかにして次世代へと残し伝えていくかという課題にも向き合おうとするものだ。」(同展パンフレット、

2020年、塚本麻莉)とある通り収集された作品の紹介展である。この展覧会のきっかけは

2019年4月から12月末の、吊り天井の耐震化工事に伴う展示棟休館のタイミングで収蔵庫の作品悉皆調査および整理作業が行われた。全国の美術館・博物館に共通する問題のひとつだが、当館の収蔵庫には収蔵スペースの余裕はほぼないと言って良い。厳格な24時間空調も、モノが溢れる通気の悪い空間においては意味をなさない。さらに、いつ来てもおかしくないと囁かれる南海トラフ地震に備え、作品の位置や固定方法を見直すといった耐震対策を取るにしても、津波の到来が確実視される立地であることは変えようがない。作品を守る場所であるはずの美術館が抱える課題に対し、限られた予算と人手の中で、現実的に何がどこまで対応可能かを線引きする作業は、つまるところ今あるコレクションと向き合うことに他ならなかった。(前述『収集→保存 あつめてのこす』展覧会パンフレットより)



挿図7 「収集と保存展」チラシ表

多くの美術館で同様の悩みを抱えているが、収蔵という課題から精選したコレクション形成が必要となる。高知県立美術館では1991年の作品収集から始まり、2020年度時点で約41000点の収蔵数を数えるという。また、その中には約35000点の写真家石本泰博の写真プリントがあるという。

こうしてみると寄贈をかなり厳格に行ってゆかなくては収蔵庫が機能マヒに陥り、将来の作品収集に大きな支障となることは必至であろう。

そうした中で、《広瀬東畝筆双雉図》の寄贈を受け入れるということはそれなりの明確な理由がなくては叶わないものである。寄贈の申し込み側は相手先の実情を知らず強引に押し付けがちである。

塚本麻莉氏は前述に続き、高知県立美術館の収集方針を根底において作品収集の根本問題から考察している。収集方針は開館当初から以下によっている。

- (1) マルク・シャガールの作品
- (2) 表現主義的傾向のある国内外の作品
- (3) 高知県にゆかりのある作家の作品

(1)(2)は特色を持たせようとするものであり、(3)はある意味でいえば各地域の作家の顕彰さらには風土的な特色を考察するのにも役立つものであり、何れの公立美術館でも共通するものである。

高知ゆかりの《広瀬東畝筆双雉図》は収集方針に合致するものであるが、その作品の価値、収集の意義ということが大きな課題となる。幸いにして広瀬東畝の生涯の作品を見渡して重要であるということと、「ローマ展」に出品された作品であるということから寄贈を受け入れていただいたことと思われる。

この展覧会について、5月の連休にでも見に行こうと考えたがコロナ禍騒ぎで断念したが幸いなことに動画が同美術館のホームページで公開されており、わたしが寄贈した作品も一番最初のガラスケースに収められて展示されているのを拝見して、この作品が安住の地を得たということに不思議な感慨を感じた。

田岡春径筆温泉場図

前述したとおり父親が旧大倉財閥系の会社に勤めていたことから、戦後、大倉家の少しの作品を引き受けたのであろう。どの程度の作品を引き受けたかは不明であるが、その後、売買したこともなく前述の2点の「ローマ展」出品作品とともに数点の掛け軸も伝来している。

その他の伝来作品の中に田岡春径(1887-1969)の掛け

軸もあった。この田岡春径は千葉県の画家で、その他、わたしが相続した美術品は三重県や小田原の画家の作品もあり、前述したとおり横山大観が「ローマ展」出品作の選定にあたっては自薦か他薦かはわからないが全国から作品を集め、それらから「ローマ展」に出品する作品を決定したことから「ローマ展」に出品されず、大倉家に残った作品もかなりの数であったのではなかろうか。しかしながら前述した美術商が「お持ちになっていたほうが良いでしょう」と言った言葉通りで「ローマ展」に出品されなかった作品は今日あまり知られていない作家であり、市場価値はほとんどないものである。

市場価値がないものは手間暇かけて何らかの意味と価値を見つけなくてはならない。

田岡春径については平成30年1月ころ、ネット上で城西国際大学水田美術館で「生誕120年田岡春径展—房総に生きた南画家」展が平成19年5月に開催されたことを知ることができた。水田美術館は2度ほど伺ったことがあり、早速、図録を取り寄せるとともに田岡春径の作品を受け入れている美術館などの情報を得た。

田岡春径筆温泉場 絹本着色 125.4×42.1cm

これはやや小ぶりの淡彩の作品でローマに行っているわけでもない。千葉県出身の画家であるという他に、この作品にどのような作品としての価値があるのであろうか。

美術館の収蔵庫がいっぱいであるという現実からすればいわゆるミュージアムピース、個人所蔵でなく美術館の展示にふさわしい作品であるというには眞面目に見てもやや劣るという気がしないでもない。山間の川べりの露天風呂で女性が二人湯あみをしている図で長閑で気持ちの良い作品であるとしてもである。長閑で気持ちが良いだけでは寄贈をお願いするにはあまりに力不足である。



田岡春径筆温泉場図(部分)



挿図8 田岡春径筆温泉場図

千葉県の画家であるとしても今少し力が弱い。

こうした場合、お願いする方は良いとしても受け入れる側からすればはた迷惑であるかもしれない。その辺が難しいところである。

しかしながら、付加価値、これもこじ付けかもしれないが田岡春径はこれまた千葉ゆかりの画家・石井林響の弟子であるということも一つの要素かもしれない。

田岡春径については前述したとおり『生誕120年 田岡春径展 房総に生きた南画家』展(城西国際大学水田美術館、前期2007年5月15日～6月9日、後期同年6月19日～7月14日)が開催され、その画業の全容がほぼ網羅され同展図録には同館学芸員堀内瑞子「松露洞・田岡春径-その後半生と画業-」が収録されている。また、丁寧な落款・箱書もあり落款から制作年を推定するのに便利である。

「落款・箱書」所収の「no.12 秋山帰樵」(昭和16年作)の落款さらに縦の長さ125.3cmなど共通するところがあり、「温泉場」の制作年はほぼ昭和16年としてよいであろう。そうするとこの作品は昭和5年開催の「ローマ展」とはかわかりが無くなる。田岡春径の比較的若いころの南画風山水図の一例としてみる事が出来よう。

田岡春径の師匠石井林響との関りもあり、結果的には、千葉市美術館では何とか寄贈を受け入れていただいた。その一つの理由は師匠の石井林響との関わりもあったのかもしれない。

ちょうど、千葉市美術館に寄贈を受けていただいた後に開催された『生誕135年 石井林響展-千葉に出づる風雲児-』展において石井林響の弟子ということで《湯治場》が展示された。早速展示を見に行ったところ、《湯治場》は石井林響が一時期所蔵(大正14～15年)した石濤《黄山八勝画冊》(重要文化財、泉屋博古館蔵)が展示されたケースの末席にあった。石濤《黄山八勝画冊》に収録されている川べりで湯あみする図を田岡春径が考慮に入れたかどうかは不明であるが石濤《黄山八勝画冊》を石井林響が所蔵していた時、まさにその時、田岡春径は石井林響が住んでいた屋敷の隣接地に住んでいたのである(『石井林響展』図録年表)。



挿図9 「田岡春径展」「石井林響展」図録

『生誕120年 田岡春径展-房総に生きた南画家』

『生誕135年 石井林響展-千葉に出づる風雲児-』

師弟関係にある二人の交流の様子を見るために、二つの図録を見比べてゆくと石井林響は大正15年4月、千葉県山武郡大網町(現・大網白里市)宮谷に画房「白閑亭」を新築、夏に完成し、居を移し、弟子の田岡春径も同所に同年夏に居を移している。

さらに石井林響が必死の思いで手に入れた石濤《黄山八

勝画冊》をその大正15年10月に手放さならなくなった。石井林響は様々な人々に石濤《黄山八勝画冊》を供覧していた(『石井林響展』図録)ようであるが、石井林響が石濤《黄山八勝画冊》を所蔵していた最後の数か月、二人はごく近くにいたことになる。

林響と春径とがごく近くに住んでいたということ、さらに名作を手放すというとてもないアクシデントの時期であることを知ると大変興味深いことである。おそらくは《田岡春径筆湯治場》の制作には石濤《黄山八勝画冊》が影響していると考えられることもできそうである。

松浦静山「甲子夜話」

昭和52年頃、わたくしは松浦静山の『甲子夜話』の端本を購入した。既に40年以上前であり、必ずしも定かではないが、おそらく神田神保町の一誠堂の古書目録で図版が掲載されているのを見ていろいろ逡巡したが1ヶ月分の給与をつぎ込んで購入したのであろう。目録に掲載されていた図版がわたしには興味深いものであったからである。

それは伊豆大島の火山の噴火口と八丈島の島女の風俗を描いたものであった。

『甲子夜話』は平戸藩主松浦静山(1760～1841)が大学頭・林述斎(1768～1841)の勧めにより文政4年(1821)11月17日甲子の日に起稿し、天保12年(1841)6月まで書き綴った随筆であり美しく彩色された挿絵が添えられている。この『甲子夜話』は正篇百巻、続篇百巻、三篇七十八巻の合計二百七十八巻から成る。正・続篇については大槻如電編集により明治43～44年に国書刊行会から出版されている。また、第三篇については『未刊甲子夜話』として坂田勝校訂で有光書房から昭和39～46年に刊行され、近年、平凡社から正篇6冊、続巻8冊、三篇6冊として全巻翻刻(中村幸彦・中野三敏校訂、平凡社)されている。

さて、私が購入した写本『甲子夜話』(挿図10、右端)は

第三篇 第二 巻之四十九

第三篇 第二 巻之五十一

この2冊分が1冊に合本されているものである。体裁は袋綴じ冊子本で渋刷毛目表紙を有し、外題は「甲子夜話」とあり、下部に「四」の墨書があるが小欠している。本紙は匡郭四周単辺、縦界、半葉十行、一行二十五字他、注記双行、版心は魚尾、白口中央に「平戸藩 楽歳堂藏書」を刻記した版罫紙を用いており、いずれも磨きがかけれ鈍い光沢を有している。この版罫紙は後述する平戸の松浦家の正本と称す

るものに使用されているものと同じである。なお、挿図には無罫紙を使用している。

松浦家には正本と称するもの1セットと青本と称するものの1セットが収蔵されている。



挿図10 『甲子夜話』表紙

左の2冊が松浦家伝来本で中央のものが原本と考えられており、右が著者所蔵したもの。これが原本の下書きと考えられ、早稲田大学図書館などにも同系統のものが収蔵されている。

わたくしはこの『甲子夜話』について「地方史静岡 第9号」(昭和54年11月、静岡県立中央図書館編)に以下のテーマで執筆した。

『甲子夜話』所収の伊豆七島関連図-永村茜山原図をめぐって-

この中では『甲子夜話』所収の図の紹介だけでなく、原画を作成した永村茜山の資料を網羅的に紹介しようとするものであった。渡辺崋山の弟子の永村茜山が代官・羽倉簡堂の伊豆七島巡視に随行して図を制作し、それを代官羽倉簡堂が松浦静山の下に持参したものを写したものである。これらの原画の一つである永村茜山筆《伊豆七島図巻》(個人所蔵)はすでに何度も拝見していた。この『甲子夜話』に収録されている図は永村茜山の原画を写したものであった。

前述した原稿を書くにあたっては当時の松浦家のご当主・松浦素氏、平凡社版の『甲子夜話』を翻刻されていた九州大学の中野三敏先生に写真を送ったりしてご教授を受けた。

松浦史料博物館になかなか行けなかったが1年半ほど前に同館に資料を持参し関係者にご覧いただき正本と青本と比較して見る事ができた(挿図10)。その後、フェルケール博物館で『平戸藩と松浦党-平戸松浦家の至宝-』展(令和2年2月20日～3月29日)が開催されて展示された。フェルケール博物館の展示の後、関係者のご協力を得て松浦史料博物館に寄贈することができた。



挿図11 「大島焼穴図」(『甲子夜話』所収)

おわりに―美術品の行く末―

「美術品の来し方行く末」は当然「美術館の来し方行く末」ともかわりを持っている。

一般的には私立の美術館は収集家が収集品の保存施設として設置することから始まり、美術品の公開施設へと進んだものである。収集家が公開を望むか収集のみに執着するかは個人差がある。全国各地に散在する公立美術館も個人の収集品の保存施設として受け入れて始まったところも多い。これらの場合は収集品が先にあることから美術館の性格もそのコレクションによる。

これまで紹介してきた寄贈を受け入れていただいた美術館は公立あるいは公益財団法人の美術館ということでいずれもが地域の美術あるいは歴史資料ということで評価して受け入れてくれたものである。地域の美術資料歴史資料として評価を受けない作品は当然ながら収蔵されなくなる。市場価値とは別の観点からの評価によって価値が認められることとなるのではないか。しかしながら高知県立美術館の「収集・保存」というテーマで論じられていた通り収蔵庫も満杯になり収蔵の可否、寄贈を受け入れるかどうかの判定が難しい課題である。

以前、重要文化財の民家の所蔵者に話を聞いたことがある。数百年を経た農家であることから生活の便利さから現在は住んでいないで別のところに居住している。わたしは次のようなことを話した。

「重要文化財に指定されている立派な民家でよいですねー」とすると所有者の老人からはしゃがれた声が聞こえた。少し吐き捨てるように。

「わたしは指定されるのは反対だったんですよ。将来、子供たちに借金を背負わせるようなものですから。」

古い農家は居住するのには不便であるし、一定期間ごとに屋根の葺き替えなど修理費用が必要となり経費がかかる。居住していないのにである。確かにそうすると借金を子孫に残すようなものである。

美術品においても時代の変化によって生活様式が変わり人々の好みと関心が変わり、古い美術品など見向きもされなくなっている。良い例が文人画というのか南画というのか、勉強が必要な美術品の展覧会はあまりない。人が来ないからである。

いったい、コロナ禍がどのようになるかはわからないが、現時点でも美術館の展覧会経費は来年度以降ほとんど予算はつかないのではないかとという声も聞く。

「美術品の行く末」「美術館の行く末」の答えは「来し方」をよく見つめ、「行く末」を考えることであろう。そこに現在置かれている美術館の行く末の解決の道筋はあるのではなかろうか？

また、将来の美術館運営の負担をどのくらいまで受け入れられるのかを見定め、将来も継続して負担する覚悟がなければ無理ではなかろうか？ずいぶん前、入館者数の多い博物館や美術館はあるのかという話が出たとき、静岡の登呂博物館と倉敷の大原美術館くらいという話を聞いた記憶がある。登呂は小学生の歴史勉強のメッカとして固定化し大原は観光地の一角として確固たる地位を得ているからであろう。両館とも単なる保存施設としてではなく、「行く末」をよく考えて活動してきたことが今日の存在意義につながっているのではなかろうか。

個人的な寄贈行脚の顛末を振り返り、改めて「美術館の存在意義」ということを考えさせられた。ここに紹介した寄贈作品は分厚いコンクリート造りの蔵に保管されてきた。中の広さは2畳間くらい、掛軸保管くらいの広さである。夏には蒸れるかと思われるであろうが、木箱の中の掛け軸は制作から90年経ってもシミなどは全く見られない。普段は出さないで、正月のようなハレの機会のみに使われるだけであった。このことが個人が美術品を伝えることを可能にしてくれたに違いない。

わたくしが寄贈をお願いした美術館、博物館が資料収集あるいは資料調査という基本が着実にされてこなかったならば、わたくしの寄贈問題も解決されなかったのではなかろうか。

改めて寄贈行脚を通じて「伝える」ということの大切さを教えてくれた。わたくしの寄贈の願いを受け入れてくれた各館の皆さんに敬意を表するとともに感謝と御礼を申し上げたい。

静岡県博物館協会2020年度事業 シンポジウム「これからのミュージアムを考えよう」

浜松市美術館（静岡県博物館協会事業推進グループ） 島口 直弥

日 時： 令和2年11月3日（火・祝「文化の日」）

13:00～16:00

会 場： ペガサート静岡 貸会議室A

〒420-0857 静岡市葵区御幸町3番地の21

ペガサート3階）

対 象： 静岡県博物館協会加盟館園の関係者及び一般

形 式： 新型コロナウイルス感染症対策のため無観客・

YouTubeで生配信

※生配信終了後、11月17日（火）まで公開

登壇者： 森道彦氏（京都国立博物館研究員）

中野慎之氏（文化庁文化財第一課絵画部門 文部
科学技官）

木下直之氏（当協会会長・静岡県立美術館館長）

進 行： 川口幸也氏（前立教大学文学部学芸員課程教授）

司 会： 椿原靖弘氏（当協会事業推進グループ・フェル
ケル博物館学芸部長）

協 力： 株式会社NOKIOO（動画配信）

次 第： 開会 13:00

基調講演

◎講演1 13:10～13:40

森道彦氏「文化財保護と博物館

－近現代の京都を事例として」

◎講演2 13:40～14:10

中野慎之氏「学芸員と所有者・制度・専門家

－京都府下の事例から」

◎講演3 14:10～14:40

木下直之氏「博物館と美術館、それぞれの
文化財保護」

休憩 14:40～15:00

パネルディスカッション 15:00～16:00

「これからのミュージアムを考えよう」

司会・座長 川口幸也氏

パネリスト 森道彦氏・中野慎之氏・木下直之氏

閉会 16:00

内 容：

静岡県博物館協会は、資料の収集・保存、調査・研究、展示等、ミュージアムで働くうえで必要な多種多様な資質・能力の向上を目指し、例年数回の講習会、実技研修、実地研修等の事業を展開してきた。しかし本年度は、新型コロナウイルス感染症対策が求められる中で、当協会としても、例年通りの形式による研修の実施を断念せざるを得ない状況となった。そこで、本年度は、当協会事業推進グループによる運営のもと、ミュージアムや文化財保護行政の第一線で活躍する講師陣をお招きしてのシンポジウムを無観客で開催し、その様子をオンラインで配信することとした。当協会の公式サイト「しずはく.net」をサポートしている株式会社NOKIOOの協力のもと、ZOOMとYouTubeを活用した動画の生配信が実現し、当協会加盟館園の職員のみならず、ミュージアム、文化財保護行政に興味をもつすべての人々がシンポジウムを視聴することが可能となった。また、YouTubeのチャット機能やTwitterでリアルタイムに質問や意見を受け付け、世界中どこからでもシンポジウムに参加することができる体制が整った。（図1・2）



図1 株式会社NOKIOO協力による生配信の様子



図2 生配信された動画

基調講演では、森氏、中野氏、木下氏の3名にご登壇いただき、ミュージアムや文化財保護行政について、それぞれの立場や経験に基づいたご講演をいただいた。

初めに森氏は、これまでの日本の文化財保護の法制度の変遷を踏まうえて、今後は「活用し得ないものは残せない。」「何を残すのか。」という視点を持ち、文化財を現在の社会モデルの循環に乗せて活用すること、そのための価値の判定、施設整備、法整備、研究、社会の反応が重要であることを指摘した。また、過去の文化財の活用事例を振り返る中で、どのように文化財の活用がなされてきたかが今後問われていくとも述べた。

続いて中野氏は、文化財保護行政における学芸員は、専門家として文化財の価値の正当な評価をし、「どんなにお金をかけても無くなってしまったものは戻らない。」という意識のもと、残すべき文化財の価値を行政・社会に説得力をもって説明できる専門性が必要であると述べた。加えて、文化財所有者の思いを尊重したり、研究成果を還元したりする等、親身な対応をとることによって、地域や所有者からの信頼を得ることの必要性を指摘した。

最後に木下氏は、日本の寺社やミュージアムにおける文化財活用の歴史を振り返ったうえで、ミュージアムの「地域の文化財の受け皿」としての役割と収蔵庫のキャパシティによるコレクション収集の困難とのジレンマ、「観光立国宣言」を発端とし「稼ぐこと」が迫られるミュージアムの現状、本来一般公衆に開かれるべきミュージアムのコロナ禍における新たな役割等、多くのミュージアムが直面する今日的な問題を提起した。

基調講演を踏まえたパネルディスカッションでは、座長の川口氏の進行で、様々な視点・角度から「これからのミュージアム」について、活発な議論が展開された。(図3)



図3 パネルディスカッションの様子

最初の話題は、森氏、中野氏、木下氏の基調講演でもキーワードとなった文化財の活用と学芸員の役割についてである。「すべてのものは残せない。」「活用すればものは摩耗する。」ということを前提に優先順位をつける対話が必要であり、その最前線に立つのが学芸員であることが語られた。また、学芸員は収蔵品に関する専門家としての側面と文化財全般の多様な知識を有し、特定分野の専門家とつながるジェネラリストとしての側面も持ち併せる。専門家と一般社会をつなぐ役割をもった存在として、文化財の保存・活用の優先順位付けにおいても、ミュージアム、行政、所有者、地域等、様々な立場・視点からの価値判断を迫られる存在であるとされた。加えて、こうしたコーディネーターとしての学芸員の役割は、さらに評価されるべきでものであると価値づけた。

続いて、展覧会等で文化財を活用する学芸員が抱える様々なジレンマに話題が及んだ。文化財の「目減り」と展示機会の確保、他国の異文化とつながるグローバルな展覧会と地域に根差した研究をもとにしたローカルな展覧会、現場で実物を見る従来の鑑賞と「withコロナ時代」のAI・デジタルを活用した鑑賞等、ミュージアムは様々な事柄を天秤にかけていると言える。こうした状況の中で学芸員は、限られた環境でできることを日々判断しなければならない、常に緊張感をもたなければならない立場であるとの指摘がなされた。

最後に、様々な判断を迫られる学芸員の価値判断をどう育み継承していくかに議論が及んだ。現役の学芸員が社会と

の結び目となり、次世代を担う学生・大学等、文化財に関わる個人・組織とのネットワークを構築すること、ジャンルの異なる館園が「横のつながり」をもつことが重要であり、当協会が本シンポジウムを開催するなど活動が盛んな静岡県は、その潜在的な可能性を秘めているとの意見があがった。(図4)

コロナ禍における本シンポジウムは、これからのミュージアムを考える絶好の機会になったと同時に、静岡県内のミュージアム同士の「横のつながり」を実感する事業となった。



図4 シンポジウム終了後の講師陣と当協会事業推進グループのメンバー

これからのミュージアムとこれからの静岡県博物館協会

静岡県立美術館（静岡県博物館協会会長） 木下 直之

1

今から四年前、静岡県立美術館の館長を拝命した時に、静岡県博物館協会（以下県博協）の会長にもなってもらいますと聞かされ驚いた。会長とは、会員による公選によって決まるものだったからだ。聞き間違いだと思うが、「充て職」という言葉を耳にしたような気がする。見間違いだと思うが、前館長からの「引継ぎ業務」にそんな項目があったような気がする。

しかし、協会規約を読めば、第10条で「前条の役員（会長、副会長、理事、監事）は会員の投票または推薦により選出する。」と定めており、県立美術館館長＝県博協会長と決まっているわけではない。当たり前の話だ。それにもかかわらず、2000年に当時の吉岡健二郎館長が就任して以来、20年にわたって（吉岡館長の逝去を受けて2005年度に西源二郎東海大学海洋科学博物館館長が会長に就いたのを除き）、これが慣例となっている。

ちなみに、規約第2条は「この協会の事務所は、静岡県立美術館内におく」と明記する。この条文は、1985年6月14日に駿府博物館を会場に開催された1985年度総会で改正された。それまでの第2条「この協会の事務所は協会会長の所属する館園内におく」が現行の第4条に変わった（『昭和60年度静岡県博物館協会総会議事録（抄録）』『静岡の博物館』15号所収）。

この改正が翌1986年4月1日に予定された県立美術館の開館を見越したものであることは明らかだが、改正前・改正後の整合性を考えると些か疑念なしとしない。①会長の所属館園に事務局を置く、②事務局は県立美術館に置く、③ゆえに会長は事務局のある県立美術館に所属する、という三段論法を連想し、それが先に述べた「慣例」を支えているのではないか。もちろん、規約がそうは書いていない以上、改正は文字どおり正しく改まったのであり、私の三段論法は屁理屈にとどまる。なお、事務局が県立美術館に定まった後も、2000年までの14年間は久能山東照宮博物館の松浦国男館長が会長職を務められた。

それでも、いくつかの疑問は浮かぶ。端的に言えば、規約第2条なぜそうなのか。静岡県立美術館が県立機関だからか。美術館だからか。東西に長い静岡県の中央に位置しているからか。比較的規模の大きな館だからか。いずれも十分な根拠にはなり得ない。

私が会長職を逃れたくて、こんなことを書き始めたのではない。日本の博物館の歴史を振り返った時に、美術館が手厚く扱われてきたという事実を認識し、検証し、再考すべきだと主張してきた私にとっては見過ごせない問題なのである。県博協のような多様な性格を有する博物館がフラットにつながる組織にとって、美術館を不動の中心に置いてはいけなく、このあり方を当然 視し、常態化させてはいけなくと思うのだ。

個人的な話になって恐縮だが、私は美術館（兵庫県立近代美術館）、博物館（東京大学総合研究博物館）、大学（東京大学）、そして再び美術館（静岡県立美術館）と渡り歩いてきた。1980年に始まったキャリアの最初の10年が過ぎたころに、美術館と博物館の間に横たわる溝が気になり始めた。兵庫県には、1970年開館の県立近代美術館（神戸）と1983年開館の県立歴史博物館（姫路）があった。ともにほぼ同数の学芸員を擁していたが、両者間の交流は無きに等しく、お互いを別世界の住人と見なしていたように思う。

やがて、県立歴史博物館学芸員との間に個人的な関係を築きながら、美術館学芸員と歴史博物館学芸員の間に会話が成り立たない最大の障害は、前者が金科玉条のごとく使う「作品」という言葉ではないかと考えるに至った。これが歴史系博物館、民俗系博物館の学芸員には通じない。なぜそれを「美術作品」、あるいは「芸術作品」と呼ぶのかという素朴な疑問さえ門前払いするからだ。自然史系博物館学芸員ともなれば、「神の作品」という表現でも受け入れられない限りは、無縁の世界である。

まずは美術館学芸員が「作品」という名の「資料」、あるいは「人造物」と考える地点まで譲るべきではないか。「美術館」という名の「博物館＝ミュージアム」に所属していることを自覚すべきだ、と考えた。幸いにも、19世紀日本の造形表現を追

いかけていた私には、「作物(つくりもの、さくぶつ、さくもつ)」という適切な言葉が見つかり、「作品」から距離を置くことができた。美術の世界では万能に見える「作品」という日本語は、せいぜい100年の歴史しかない。20世紀に入ってから普及した言葉に過ぎず、夏目漱石も森鷗外も、自分の小説を「作物」と呼んでいた。ちなみに、昨今では「美術作品」や「芸術作品」に代わって「アート」が広く使われるようになり、「アート作品」という私にいわせれば珍妙な表現がまかり通っている。

とはいえ、県博協に加盟する73館園(加えて3賛助会員)の学芸員が常日頃の活動で用いる言語を捨てる必要はないし、そんなことは出来るはずがない。お互いの言葉が何を意味しているのかを理解すること、耳を傾けることが肝心である。私は「作品」に距離を置くように、たとえば「民具」という言葉にも、「出土品」という言葉にも距離を置く。距離を置きつつも、そのような概念を用いて研究が重ねられ、学問領域が築かれてきたことを否定しない。

その上で、多様な博物館学芸員間に会話を成立させたい。県博協に引きつけられ、会話を成り立たせる場合は、まずは事業推進グループが企画する講習会ということになるだろう。ゆえに、いかに共有の問題、課題を見つけるかが大切だ。当節流行の言葉を用いれば、そこがプラットフォームということになる。

2

いわば一連の講習会の延長線上に、シンポジウム「これからのミュージアムを考えよう」が企画され、昨2020年11月3日にオンラインで開催された。会場に会員を集めないオンラインという形式は、いうまでもなく、突如として人類に襲いかかった新型コロナウイルスの感染対策として採られた窮余の策であったが、これからの県博協の活動にとって思わぬ可能性を開いてくれたのではないかと疑いなく、それは新たなプラットフォームになりうる。静岡県がいくら東西に長くても、いとも簡単に、それこそ瞬時に集まる事が出来るからだ。

シンポジウム当日に、三番目の講演者として、私が語ったことをここに書き留めておきたい。中堅学芸員から成る事業推進グループが「これからのミュージアムを考えよう」と考えたのは、文化財保護法の改正(2018年公布、19年施行)を受けてのことだった。森道彦氏(京都国立博物館)、中野慎之氏(文化庁)のおふたりをゲストスピーカーに招いたのも、まさに文化財保護法改正と博物館との新たな関係を切実な問題としたからだ。

おふたりの講演を受けて、私は演題をつぎのようにした。「博物館と美術館、それぞれの文化財保護」。そして、「これ

からのミュージアムを考えよう」とする手立てとして、三つの論点を提示した。第一に「特別保護建造物と国宝」、キーワードは「宝庫」と「国宝」であり、過去を問題にした。第二に「文化財と資料と作品」、キーワードは「博物館」と「美術館」であり、現在を問題にした。第三に「収蔵庫と展示室」、キーワードは「保存」と「活用」、さらに「リアル」と「バーチャル」であり、未来を問題にした。

そもそもの大前提として、「これからのミュージアムを考えよう」とするのであれば、「これまでのミュージアム」を振り返り、「ミュージアムの現在」を検証しなければいけない。

3

第一の論点は、文化財概念の拡張である。文化財保護法(1950年)の前史は、古器物保存方の太政官布告(1871年)、古社寺保存法(1897年)、国宝保存法(1929年)と展開した。また、これとは異なる発想から生まれた史蹟名勝天然記念物保存法(1919年)が戦後の文化財保護法に合流した。文化財保護法で「文化財」という言葉が定義されるまで、保存されるべきものとは、何よりも「宝物」であった。

それはあくまでも動産と考えられ、建造物という不動産はその埒外にあった。法隆寺の舍利容器と五重塔、あるいは釈迦三尊像と金堂を思い浮かべると良い。建造物は宝物を保護する宝庫だったのだ。しかし、古社寺保存法制定の段階で、建造物もまた保存すべきという声が上がったため、第4条において「特ニ歴史ノ証徴、由緒ノ特殊又ハ製作ノ優秀」な宝物を「国宝」とすることに倣い、建造物には「特別保護建造物」という別のカテゴリーが用意された。現代の私たちは法隆寺五重塔や金堂を国宝と呼ぶことに何の違和感も抱かないが、当時の関係者には受け入れ難かった。建造物も国宝と見なすには、およそ30年後の国宝保存法制定を待たねばならない。

国宝保存法のもうひとつの意義は、「古社寺」という縛りを外したことにある。これを機に、城郭が保存対象となった。これまた、姫路城や松本城を国宝と呼んで当然と考える私たちが知っておかなければならないことである。つまり、このように段階を踏みながら価値判断を下し、保存すべきものを広げてきた歴史を知ることは、私たちの前にもまた、新たな評価対象が現れる可能性を示唆する。慎重であるとともに大胆になることを恐れてはいけない。

こうした宝物保存制度に応じて、博物館が登場した。国が主導し、最初の博物館が1872年に文部省主催の博覧会が終わった後の湯島聖堂に創設された。その10年後に、上野

公園に専用の建物を建設して博物館が開館した時、それは歴史部門や自然史部門をも擁した総合博物館であったが（現在の上野動物園も開館時より併設）、1886年に宮内省の所管となり、さらに宮内省に臨時全国宝物取調局が設置されると、急速に宝物館＝美術館の性格を強めてゆく。宝物調査が関西を中心に行われたことから、1889年には東京の帝国博物館に加えて、帝国奈良博物館（1895年開館）と帝国京都博物館（1897年開館）が同時に設置された。先述の「美術館が手厚く扱われてきたという事実」は、すでにこの時から認められる。そして、東京帝室博物館（1900年に帝国から帝室に改称）は、1925年に自然史部門（天産部）を完全に切り離した。

4

第二の論点は、戦後の帝室博物館の再出発と、地方自治体による博物館の建設である。前者を象徴する出来事は、1952年5月3日、すなわち日本国憲法の施行日に、東京帝室博物館が国立博物館に切り替わったことだ。もちろん、これは新憲法に応じた変更で、その第88条「すべての皇室財産は、国に属する」に基づき、同館のコレクションは皇室財産から国有財産となった。この年の夏に創刊された『国立博物館ニュース』のタイトルに添えられた「NATIONAL MUSEUM」という英文表記は、従前の「IMPERIAL MUSEUM」に取って代わったものだが、「NATIONAL」には「国立の」というよりも「国民の」というニュアンスが強かったはずだ。ちなみに創刊号の巻頭記事は「国民と博物館－古美術品は見直されねばならない」である。

博物館がその性格を大きく変えた。決定的な変更は、名称と対象とする観客（子どもに向けた企画が始まる）以上に、コレクションの公共性（公有財産という認識）にあったといえるだろう。そして、博物館の収集展示に新たなカテゴリーが加わった。先にふれた「出土品」＝埋蔵文化財と「民具」＝民俗資料、さらに無形文化財である。これらは、その2年前に制定された文化財保護法における文化財概念の拡張に応じたものだ。注意しておきたい点は、民俗資料だけではまだ文化財という呼称が与えられなかったことである。戦前からの根強い「宝物保存」という考え方に立てば、庶民が暮らしの中で使ってきた道具は宝物の対極にあり、収集にも展示にも値しないものだと言われた。民俗資料が民俗文化財に変わるには、1975年の文化財保護法改正を待たねばならない。

地方自治体による博物館建設も戦後の著しい現象である。

戦前から、いわゆる郷土博物館はわずかながらも存在したが、全国各地に新たに建設される博物館は社会教育施設としての役割を明確に担った。教育基本法（1947年）、社会教育法（1949年）、博物館法（1951年）と繋がる法体系の中に博物館が位置づけられたからだ。

これが県博協の母胎である。博物館法第1条「この法律は、社会教育方の精神に基き、博物館の設置及び運営に関して必要な事項を定め、その健全な発達を図り、もつて国民の教育、学術及び文化の発展に寄与することを目的とする」と県博協規約第4条「この協会は、静岡県内の各博物館が相互の連絡協調を図り、社会教育活動の発展を促し、以って文化国家の形勢推進に寄与することを目的とする」のそれぞれの後段を比べれば明らかだろう。教育基本法に先立つ1945年9月15日に（敗戦直後に）、国は早くも「文化国家、道義国家建設」をうたっている（「新日本建設ノ教育方針」文部省）。県博協のいう「文化国家」はここに繋がる。

ところで、「新日本建設ノ教育方針」の「七社会教育」には、次のような興味深い一節がある。「博物館等社会教育ノ全般ニ亘リ之ガ振作ヲ図ルト共ニ美術、音楽、映画、演劇、出版等国民文化ノ興隆ニ付具体案ヲ計画ニテアルガ差当リ最近ノ機会ニ於テ美術展覧会等ヲ盛ニ開催シタキ意嚮デアル」（文部科学省ウェブサイト参照）。その結果、翌1946年春、最初に開催された美術展覧会が日本美術展覧会（いわゆる日展）であった。この事実は、国の文化行政の中心には、音楽でも演劇でもなく、相も変わらず美術があったことを教えてくれる。

戦後の地方自治体による建設は比較的規模の小さな博物館、資料館に始まるが、1960-70年代の経済成長を迎えて、一気に美術館を優先した。私の最初の職場である兵庫県立近代美術館が1970年に開館したあと、兵庫県立歴史博物館が開館するまでには13年が必要だったし、静岡県は1986年に県立美術館を開館させたあと、県立歴史博物館を持たずに今日に至っている。このアンバランスはただされるべきではないか。冒頭で「美術館を不動の中心に置いてはいけない」と述べた真意はここにある。

5

第三の論点は、端的に言えば収蔵庫問題である。博物館法第2条「資料を収集し、保管（育成を含む。）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し」に基づき、全国津々浦々の博物館が営々とコレクションを築いてきた。そして、同法制定から70年が経過した現在、どの館も収蔵スペース

の不足に直面している。

普通に考えれば、打開策はふたつしかない。収蔵スペースを増やすか、収蔵物を増やさない。前者は財政や立地問題と絡んで、そう簡単に採用できない。逆に、後者はいとも簡単である。収集活動を止めればよいだけだし、場合によっては収蔵済みのコレクションを処分(売却、譲渡、廃棄など)すればよい。実際に、2018年夏、鳥取県北栄町が収集した民具2200点のうちおよそ470点を「お別れ展示」したあと、希望者に譲渡し、話題を呼んだ。新たな活用法とする評価もあった(樫村賢二「鳥取県北栄町教育委員会主催「明治一五〇年 民具資料のお別れ展示」と民具の「除籍(廃棄)」について」『民具マンスリー』第52巻6号、9号、第53巻9号参照)。

最も安易な打開策は収集の中止である。置き場所がなければもう収集する必要はない、むしろ収蔵庫で眠ったままのコレクションの活用を心がけよ、という声は上がるだろうし、ある意味でそれは正論である。しかし、博物館に収集を求める博物館法違反だととらえることもできる。さらに、日本博物館協会が2012年7月1日に定めた「博物館の原則」の第5「博物館は、体系的にコレクションを形成し、良好な状態で次世代に引き継ぐ」、および「博物館関係者の行動規範」の第5「収集・保存」に抵触しかねない。単純に考えても、これは博物館の活動停止、あるいは自殺を意味する。日本社会が150年前に手に入れ、育ててきた博物館を、今後いつまで存続させるのか、50年先か、それとも100年先か、設置者にも博物館の運営に携わる人間にも、活動を維持する覚悟と見通しが求められる。すなわち、博物館の未来像が問われている。

最近の文化財保護法の改正によって前景化した言葉が「活用」である。もともと「文化財を保存し、且つ、その活用を図り」と第1条にうたわれてはいたものの、「地域の文化財の総合的な保存活用」が改正の眼目だ。これに応じて、都道府県は「文化財保存活用大綱」(第183条の2)を定め、市町村は「文化財保存活用地域計画」(第183条の3)を作成することになった。

この背景には、観光立国宣言(2003)や観光立国推進基本法(2007)によって推進されてきた観光政策があることを忘れてはならない。2017年6月9日に閣議決定された「未来投資戦略2017」は、「文化芸術資源を活用した経済活性化」にうたう「文化芸術・観光・産業が一体となり新たな価値を創出する「稼ぐ文化」への展開を推進する」とし、同年12月27日策定の「文化経済戦略2017」(内閣官房・文化庁)には「美術館・博物館を中核とした文化クラスター創出」という表現がある。この動向に博物館がどう関与するのか、活用をどう考え

るのが問われる。

ところが、このたびのコロナ禍は真逆の事態を招いた。「クラスター」は誰もが知っている言葉となり、観光客は姿を消し、博物館が休館を余儀なくされる日々が生じた。博物館を訪れることは「不要不急の外出」なのか、なぜ開館し続ける必要があるのか、バーチャルなミュージアムで代替可能か等々、博物館関係者がこれまで考えもしなかった問題を突きつけられている。

6

県博協のこれからの考えるために、これまでを考えよう。ところが、そのための材料があまりに足りない。まずは1969年当時の創立会員を知りたいと思ったが、その名簿を手に入れることさえ叶わなかった。そこで、会報『静岡の博物館』創刊号(1973年7月31日)から加盟館園を書き出してみる。

熱海美術館、熱川熱帯果樹研究所・熱川バナナワニ園、田口国史博物館、下田開港記念館、お吉記念館、下田開国記念館、下田海中水族館、下田城、戸田村立造船郷土資料博物館、韭山町立郷土資料館、三島大社宝物館、佐野美術館、三島市郷土館、加藤学園沼津考古学研究所、富士美術館、井出コレクション、東海大学海洋科学博物館、静岡市立登呂博物館、静岡浅間神社宝物館、久能山東照宮博物館、駿府博物館、磐田市郷土館、浜松市郷土博物館、浜松市美術館

以上24館園である。一目瞭然、県東部に偏っている。これを現在の73館園(及び3賛助会員)と比べると、県博協のみならず、静岡県の博物館の半世紀の歴史が見えてくるだろう。熱海美術館(現在のMOA美術館)以下少なくとも13館園は継続している。いいかえれば、その後におよそ60館園が加わったことになる。こうした歩みを知るためには、県博協は自らの記録を集積したアーカイブを必要としている。

以下は後日談かつ半分冗談だが、オンラインによるシンポジウム終了後に、「事業推進グループ」という無粋な名称を「横の会」にしたらどうか、三島由紀夫率いた「楯の会」よりは平和で良いのではと話した。ところが、1984年に生まれ、93年に解散した日本画家集団「横の会」の存在を知り、この名は使えないと思った。それなら静岡県らしく「横に長い会」はどうか。講習会、勉強会、意見交換会を重ねることが、不断に「これからのミュージアムを考えよう」とすることであり、それなくして県博協の存在意義はない。

ミュージアムと学芸員-コロナ禍のあとさき

元 立教大学文学部 川口 幸也

2020年の11月3日、静岡市で、静岡県博物館協議会の主催により「これからのミュージアムを考えよう」というシンポジウムが開催され、私もその末席に加わった。

折しもコロナウイルスが勢力を増し、感染第三波の襲来が懸念されていたこともあり、シンポジウムはオンラインによる中継で行われた。話題はいきおい、コロナ後のミュージアムをめぐってということにも及ばざるをえない。たしかに、この年の初めのパンデミック発生以来、国内はもとより海外でも、美術館、博物館、図書館、学校などが一斉に閉まるという、想像を超える事態に私たちは際会した。ミュージアムは今後どうなってしまうのだろうか―少なからぬ人がそんな不安を抱いたに違いない。だが浮足立ってはならない。未曾有の風景に遭遇したこんな時こそ、冷静に自らの身辺を見据え、歴史を振り返って先人の知恵に学ぶべきである。よくよく考えてみれば、コロナ禍を潜り抜けたあとも、人間のやることは基本的にはそれほど変わらないはずだ。ヴァーチャル・リアリティやAIが賑やかに喧伝されたところで、学校やミュージアムの営みが全く変わってしまうわけでもないだろう。

＊

博物館、美術館から記念館、資料館、動物園、水族館、植物園と、モノや生き物を一カ所に集めて見せる施設は今日、多種多様である。これらをミュージアムと総称すると、近代のミュージアムの起源は、15世紀末のヨーロッパに登場した珍品陳列室に行き着くと言われている。大航海時代の到来とともに、ヨーロッパにはアジア、アフリカをはじめとする世界各地から動物や植物、魚類、鉱石、生活民具と、さまざまな奇異なるモノがもたらされ、それらを基に各地に珍品陳列室が造られた。珍品陳列室では、さほど広い空間ではなかったが、舶来の珍品、稀品が、壁や棚、床はもとより、天井にまで隙間なく並べられていた。こうした珍品陳列室の狙いのひとつは、所有者が来訪者にコレクションを見せつけて、自分の富と権力を誇示することであった。当時、遠方から持ちこまれた海山の珍品を手に入れることができたのは、富と権力を併せ持つごくひと握りの人間だけだったのである。

やがて、王侯貴族の中に、自分たちの富と権力をさりげなく優雅に見せつけるには、自然の品々や生活民具よりも、絵や彫刻を収集展示した方が効果的ではないかと考え始める連中が現れた。17世紀の中ごろに現在のフランドル地方を治めたレオポルト・ヴィルヘルム大公は、そうした王侯貴族の最初のひとりであった。彼が集めた千点を超える絵画、彫刻の名品の一部は、画家ダフィット・テニールス(子)が描いた一連のギャラリー画に見ることができる。

富と権力の誇示という珍品陳列室の遺伝子は、その後18世紀後半から19世紀を通して、国民国家の時代の西洋に誕生したミュージアムにも受け継がれていく。大英博物館やルーヴル美術館がその好例だし、先ほどのヴィルヘルム大公のコレクションの大半が後に、ウィーンの美術史美術館に収められたことにもそうした事情が窺える。

言うまでもなく、珍品陳列室の時代を含めて、ミュージアムが現代に至るまで果たしてきた役割はこれに留まらない。何よりもまず、生活民具や文書、美術品、動植物、鉱物といった多様な資料を保存し、それを通して歴史と文化をかたり、後世へと伝えるという使命があった。むしろ、この務めこそ、すべてのミュージアムにとって最も基本的で重要だというべきであろう。今日、国境を超えた大規模な人の移動が常態化し、住民も国民も民族も流動化しているが、それだけに、彼らの歴史と文化をかたり継ぐというミュージアムの任務はいっそう重みを増している。

また、20世紀のとくに後半以降、観光が一般化するにつれて、ミュージアムがもつ観光資源としての価値に光が当たりだした。たしかに、欧米やアジア、中近東の大都市の名だたるミュージアムはいつも観光客で賑わっている。しかも、これらの都市では現在なお、既存のミュージアムのほかに、新しいミュージアムが競い合うように造られている。このような現象は、都市間競争という文脈で見ると、新たな観光拠点の開発、整備という意味合いを帯びているのだろう。いや、国際的な大都市だけではない。スペイン、ビルバオのグッゲンハイム美術館や北海道、旭川の旭山動物園、そして福井の県立恐

竜博物館が示すように、さほど大きくはない地方都市でも、ミュージアムが観光による街おこしの起爆剤になっている例がある。こうした動きは、コロナ禍収束後に観光ブームが本格的に復活したときには、さらに広がっていくだろう。

最後に、ミュージアムに望まれる機能をもうひとつ挙げておきたい。近年しばしば、社会的包摂ということがいわれる。これは、わかりやすく言い換えれば、老人や子ども、あるいは移民や難民、少数民族といった、ともすれば社会の周辺に追いやられがちな人びとに居場所を提供するということである。上述したように、大規模な人の移動が日常化し、人と人のつながりを保つことが困難な時代には、孤立しがちな人びとをコミュニティにどう包み込んでいくかというのが大きな課題になる。ミュージアムは、そういった社会の要請に応えるための条件を備えており、今後、この点でもこれまで以上の関与が求められるに違いない。

ここでは、歴史を振り返りながら、とりあえず大まかに以上の四つをミュージアムの基本的な役割として挙げてみた。あらためて整理してみると、

- ・富と権力の誇示
- ・歴史と文化をかたり継ぐ
- ・観光資源
- ・居場所の提供(社会的包摂)

ということになる。もちろん、個別に明記はしなかったが、資料や作品の収集、保存、修復、また教育普及活動など、他にも重要な役割はある。だが、これらは、歴史や文化をかたり、居場所を提供するという営みの一環とみなすことができる。

上記の四つはミュージアムにとってどれも大切な機能であるが、あえて優先順位をつけるとすれば、どのようになるだろうか。

おそらく、先に触れたように、収集された資料に基づいて歴史と文化をかたる、というのが最初に来るだろう。次に優先されるのは、寄る辺なき人びとに居場所を提供し、社会のつながりを回復していくという役割ではないか。富と権力の誇示、観光資源化というのは、残念ながらその後だろう。いや、不用意にこんなことを書くと、「(観光に理解のない)学芸員はガンだ。一掃しないと」国会議員の怒りを買いそうだ。誤解しないでいただきたい。これら二つの役割がどうでもいいとか、無意味だとか言っているのではない。富と権力の誇示というのは、歴史的には、ミュージアムの機能としては最も古いもののひとつで、今も内外の主だったミュージアムに脈々と受け継がれている。また、観光資源としてのミュージアムというのも、観光による街おこしという観点からは捨てがたい。しかしながら、

世界を広く見渡すと、質と量の両面で、富と権力を誇示できるほどのコレクションを所蔵しているミュージアムはそんなにあるわけではない。また、観光拠点といっても、すべてのミュージアムが、うまい具合に観光ブームの恩恵に浴しているわけではない。現にどこの国でも、観光の賑わいとは無縁に、日々の営みを粛々と積み重ねている小規模なミュージアムが少なからず存在する。イギリスやフランスでも、大英博物館やルーヴル美術館は例外なのである。

これに対して、何らかの歴史や文化をかたっていないミュージアムというのはない。かりにミュージアムがその責務を果たしていないのなら、それはミュージアムの名に値しない。さらに、社会の分断が進み、経済的な格差が広がる時代にあつては、孤立した人びとに手を差し延べ、居場所を提供するというのは、どの国でも都市でも喫緊の課題である。もしミュージアムにこの種の問題に対して何らかの対応能力があるのなら、何もせずに座視するのはミュージアムの自己否定につながる。

ミュージアムに待望される役割を、このように受け止めるならば、そこで働く学芸員が全うすべき任務というのもそれに応じたものにならざるをえない。つまり、学芸員の仕事の基本というのは、まずは館蔵品を中心とする資料について調査研究し、自己と他者の歴史と文化、あるいは宇宙を含めた自然の歴史をかたることであり、次に、世の中と疎遠になりがちな人びとに居場所、そしてふれあいの場を提供することだろう。

ただ、歴史と文化をかたるといっても、ミュージアムの学芸員の場合は少々事情が違っている。というのは、研究論文により言葉を通してかたるだけではなく、それを展示という様式に翻案してわかり易くかたることが求められるからだ。また、一般の人びとにすれば、ミュージアムは大学などより親しみやすい存在であり、その意味でミュージアムは社会との接触領域に佇んでいるといえることができる。そのことが、ミュージアムにとって一番の強みなのである。学芸員の仕事の特質は、たぶんこの点に深く関わっている。

さて、社会の要請は多岐にわたり、しかも往々にして気まぐれだ。時には理不尽な要請もある。けれども、学芸員は立場上、そうした要請に極力応えなければならない。そのために彼らは、自分の専門分野だけに留まることは許されない。たとえば、展覧会や講演会などを実施する際には、コレクターやアーティスト、研究者、輸送業者、新聞やテレビをはじめとするメディア関係者など、多彩な分野の人びとと直にやりとりをすることになる。しかも、コレクターひとつを例にとっても、人に

よって肌合いは全く違う。こうした、多方面の人や組織と関わるというのは、専門家が幅を利かせる時代にあっては、聖なる専門性を冒すものとして否定的に捉えられがちだ。だが、私は必ずしもそうは思わない。ジェネラル、総合的であることの利点というのがあり、多方面との交わりが却ってプラスの意味をもつこともあるからだ。

ミュージアムと学芸員というのは、専門的な世界と一般社会の接触面に身を置きながら、双方の間の橋渡しの役を担っている。学芸員の研究成果に裏打ちされた展覧会や教育プログラムは、多くの利用者が気兼ねなく出入りする居場所になり、人と人、人と社会をつなげる場になっていく。同時に、高度に専門化するあまり孤絶しがちな専門家同士を結び付ける仲介役も演じる。ミュージアムはさまざまな人と情報が出会う文化のプラットフォームであり、学芸員はそれを支え、先導する旗振り役でもあるのだ。

ミュージアムと学芸員の姿をこんな風に描いてみると、コロナ禍の前も後も、両者が請け負うべき役割というのは本質的にはそれほど変わらないのではないだろうか。

今般、私たちはコロナウイルスによる地球的規模の厄災に見舞われた。その結果、移動や会合が制限され、経済活動は大幅に後退し、社会の亀裂が一段と深まるという危機的状況に陥った。しかしその半面、一途にグローバル化を志向してきた従来の社会への反省が生まれ、身近な生活の場とそこでの人と人の助け合いがいかに大切なものであるかを、あらためて思い知らされることにもなった。コロナ禍という暗闇を抜けた後に、ミュージアムと学芸員への見方も変わっていくものと思われる。

だとすると、問題はミュージアムを取り囲む社会の方に投げ返される。足下の歴史と文化をかたり、人と人、人と社会を結びつけていく地道な作業が、社会にとっていかに重要であるかということを、私たちミュージアムの利用者、ミュージアムの外部の人間がもう一度確認し、正当に評価していく必要がある。それは社会の構成員である私たち全員が取り組むべき課題であって、ミュージアムの現場にだけ押し付けておくべきではない。

このたびの静岡博物館協議会によるシンポジウムは、県内の多彩なミュージアムの学芸員の方々が相互の持ち場の違いを超えて横につながり、日ごろ現場で感じている種々の問題を基に、これからのミュージアムの在り方を考え直すとする試みであった。しかも、それが、日本語ではあったが、インターネットを介して世界中に発信された。同じ県の中にあって

も、博物館や美術館、資料館、記念館などが互いに交流し、経験と課題を分かちあう機会は、実は意外に多くはない。加えて、地方のミュージアムが直接、世界に向けて自分たちの考えを表明するというのも、これまでさほど見られなかったことだ。これらの点で、今回のシンポジウムは日本のミュージアム史上、画期的な意義をもっていたのではないか。戦後、日本のミュージアムはすでに半世紀以上の歴史を刻み、非西洋におけるミュージアムとして独自の経験を積み上げてきた。だが、欧米に学ぼうとするあまり、自分たちの経験を積極的にかたるとすることについてはともすれば無頓着であった。それだけに、このシンポジウムが発した問いかけは重い。今後、国内各地のミュージアムに同じような動きが波及していくことを強く願っている。

絵画修理参考文献案内

京都国立博物館 森 道彦
文化庁 中野 慎之

はじめに

人の手によって長い年月を伝えられてきた伝世品は、つくられた時代や地域を問わず日本の各地に膨大に存在します。そのなかでも絵画は現存する数も多く、社会がたどってきた歴史や文化の有り様を考える上でかけがえのない存在です。しかし旧家や歴史ある寺社に出向くと、貴重な絵画の痛ましい姿を見る機会が少なくありません。たくさんの掛軸がカビや埃にまみれたままで乱雑に箱に入れられている、立派な絵が描かれた襖が破れている、屏風が開くことが難しいほど裂けている、絵馬や壁画に懐中電灯の光をあてると驚くほど絵具が浮き上がっている——文化財調査を担う専門家であれば、いくらかこうした状況を目の当たりにした経験があるのではないのでしょうか。時には寺社の宝物館などで、痛ましい姿のまま長年にわたって展示されている作品を見ることもあります。

こうした絵画をどのように保全し、活用していくかは、地域の博物館、美術館や文化財保護行政において常に切実な課題となっています。貴重な品を朽ちさせることなく、現代社会において適切に意義付け、守り伝えていく上では、その価値を正確に理解し、社会に周知するとともに、把握と管理に心を砕き、状態に応じた修理を実現することが不可欠です。修理に頻繁に関わるのは文化財担当の行政職員や修理技術者、保存科学の専門家がほとんどですが、学芸員や研究者もまた、日常的に多くの作品の調査や管理を行い、寄託者や調査先から修理の相談をうけ、助言や監督を求められる立場である以上、文化財修理の重要な担い手であるように思われます。

しかし、文化財修理の実施には数多くの課題が存在します。修理にはしばしば多額の費用が必要で、その資金工面や事業計画には組織内外での意思決定や専門的な判断が求められます。修理を依頼する専門家や修理方針を誤れば、かえって価値を損ないかねません。修理が実現しても、ものの学術的評価に関わる美術史、日本史、考古学、民俗学などの人文学ばかりでなく、文化財の物理的な特性、修理の技術や工程、施工に必要な用具や材料、修理に求められる倫理、そして修理を取り巻く環境や制度設計に関する問題等、様々な課題

や専門的な事項を把握する必要があり、それぞれ時代や社会、学術の進展に即した試行錯誤が求められます。指定文化財ともなれば、法や条例による規定、携わる関係者も多くなり、必要とされる知識もそれだけ多くなります。その一つずつが重要な意味を持つため、多くの先達はその知見を書き留めてきました。

さらに人口減少や産業構造、環境や価値観の変化などを経て、文化財保護のあらゆる課題解決がますます難しくなっているように思われます。それだけに専門家が連携し、専門性を補い合いながら、多様な保護の方策を探っていくことが求められています（文化財保存修復学会 編『文化財の保存と修復 12 文化財のまもり手を育てる』クパプロ、2010年など）。その意味で、文化財に携わるあらゆる立場の人間が、それぞれに修理を深く知ることは大きな意義を持つように思われます。しかしあまりに広範な知識が必要とされるために、修理について深く学ぶことが容易でないのも確かです。

わたしたちは美術史の研究者として絵画史を学び、博物館と文化財保護行政の現場で、それぞれに文化財修理に関わってきましたが、その実務において専門的な手続きや技術を理解することに苦心し、参考となる文献を探し続けた経験を持っています。また修理とその歴史に関心を深め、ともに複数の展覧会を企画し、それぞれ文化財修理に関する文献も発表してきました。そこで本稿では、日本の絵画修理に関わる参考文献をできる限り系統立ててご紹介したいと思います。この案内を通じて、博物館、美術館、行政などの現場で文化財の保護や修理に関わる方々、ひいてはこれからこれらの世界に触れ、学ぼうとする方々にとって、いささかなりともお役に立てば幸いです。そしてまた、今後ますます議論や研究が進展し、さらなる知見、より充実した参考文献案内が皆様の手により公表されることを祈念しております。

なお、本稿刊行段階において文化財修理をとりまく諸問題については、2020年に刊行された『歴史学研究』の特集「文化財の危機と歴史学」が詳しく論じています。特に11月号（No.1002）の地主智彦「文化財（美術工芸品）修理に用いる

用具・原材料と今日の課題—装^{そうこう}潢修理、とくに紙を中心に—、岡岩太郎「文化財修理の今と解決すべき課題」、12月号(No.1003)の横内裕人「文化財の所有と公共性—文化財はだれのものか?—」は、文化財修理をめぐる切迫した状況を指摘するものです。

1 文化財修理

書画の修理に限っても、無数の書籍や論考が発表されています。修理の方法論や成果事例を概説的に紹介するものから、個々の素材や技術を扱う専論や報告書に至るまで、様々な性格の刊行物がありますが、ここでは文化財修理について知るうえで基礎情報が充実しているもの、広く参考となるものを挙げたいと思います。

最初に掲げる次の2冊は本稿のテーマを補完する内容を含んでおり、紙幅の関係上ここでは残念ながら触れできなかった書籍や図録、論考等も数多く掲げています。

●展示図録『文化財修理の最先端』京都国立博物館、2020年

日本最大かつ最も歴史のある公営の文化財修理専門施設である、京都国立博物館文化財保存修理所設立40周年を記念する展覧会の図録です。書画や古文書、染織品、漆工品、仏像の各分野について過去に修理された作品のいくつかと、修理時の知見を列挙するほか、書画および仏像修理に関する写真入りの基本工程説明、用語集を日英中韓の四ヶ国語で収録しています。また表装および装^{そうこう}潢(書画典籍など)・染織・漆工・仏像の修理に関する参考文献一覧が付属しています(書籍のみ、個別の論考は収録せず)。他、装潢修理の用具・原材料に関する説明コラムも収められています。総論の大原嘉豊「文化財の保存と修復—日本の文化財を守る—」は、地域の文化財保護と修理を取り巻く諸問題を包括的に示すものです。

●東京文化財研究所編『文化財修復の現状と諸問題に関する研究会 報告書』東京文化財研究所、2020年

※東京文化財研究所ホームページにて公開

https://www.tobunken.go.jp/japanese/publication/pdf/SCSRCPII_2020.pdf

本書が収録する中野慎之「平成三十年における絵画修

理」は、平成30年(2018)段階での絵画修理に関する様々な事項を記録しようとした論考です。「はじめに」(絵画修理史における平成の30年間の動向の位置付け)、「1 絵画修理の規制と補助」(文化財保護法に規定された修理届、国庫補助事業、民間の助成金などについての解説)、「2 絵画修理の計画と実施」(修理の計画策定と実施における論点・議題などについての解説)、「3 絵画修理の技術者」(国宝修理装潢師連盟の修理技術者に関する基礎データと技術者へのアンケート結果の解説)、「おわりに」(現状変更に関する論点の解説)、資料「文化財修理と表装裂—岡興造氏回想録」、「国宝修理装潢師連盟修理技術者アンケート調査報告(平成30年)」によって構成されます。脚注を中心に、参考となる過去の文献を数多く掲げています。

さらに同書の巻末には、東京文化財研究所保存科学研究センター修復材料研究室による用語解説が収録されています。内容は有機溶媒(溶剤)、酵素、接着剤、補修方法・材料、機能紙、分析機器・手法、作業に用いる機材・道具という7領域にわたる全36項目で、それぞれ参考文献も紹介され、文化財保護の初学者から専門家まで参照できる内容となっています。

絵画修理と関連する論考として、地主智彦「近年の歴史資料修理の成果と課題」も参考となるものです。ここでは装潢修理の基礎的な要件に触れつつ、近年指定が急速に拡充されている多種類・大量の文化財で構成される歴史資料分野に対する保護上の知見と、修理上の特徴的な性質や課題が総合的に説かれており、書画を含めた紙文化財の性格を広く理解することができます。そのほか、佐々木利和「美術工芸品修理への思い」、北村仁美「文化財修復の現状と諸問題：鈴木長吉作《十二の鷹》を中心に」を収録しています。

【その他の文献】

・平山郁夫 編『在外日本美術の修復 Restoration of Japanese art in European and American collection』中央公論社、1995年

・展示図録『よみがえる日本画—伝統と継承・1000年の知恵』、東京芸術大学大学美術館、2001年

・東京芸術大学大学院文化財保存学日本画研究室 編『図解 日本画の伝統と継承—素材・模写・修復』、東京美術、2002年

・東京芸術大学大学院文化財保存学日本画研究室 編

『図解 日本画用語事典』東京美術、2007年

・文化財保存修復学会 編『文化財の保存と修復 11 文化財をまもる人たち』クバプロ、2009年

・展示図録『よみがえる国宝 護り伝える日本の美』九州国立博物館、2011年

・京都国立博物館 編『美を伝える 京都国立博物館文化財保存修理所の現場から』京都新聞出版センター、2011年

・展示図録『住友財団修復助成30年記念 文化財よ、永遠に』泉屋博古館・泉屋博古館分館・東京国立博物館・九州国立博物館、2019年

2 修理技術と倫理

修理に携わるにあたって、まず求められるのが個別の処置や工程全体の理解です。そもそも修理は何を目指して行われるのか、そのためにはいかなる処置をどのような手順で行うのか、そうした点を理解しなければ、関係者間で適切な意見交換を行うことができません。また修理においては、何らかの物理的処置を進めてしまうと、元に戻そうと思ってもそれを完全に復旧することはできないため、判断や施工を誤れば文化財の価値を損なう深刻な事態にもなりかねません。したがって、文化財の扱いには数多くの倫理的な論点も存在します。ここでは修理技術の基礎事項や、修理に求められる倫理的問題を知るうえで参考となる書籍をご紹介します。

●東京文化財研究所・国宝修理装飾師連盟 編『日本画・書跡の損傷』東京文化財研究所、2013年

●大林賢太郎『装飾文化財の保存修理 東洋絵画・書跡修理の現在』国宝修理装飾師連盟、2015年

書画典籍といった装飾文化財の修理を専門に行う技術者団体、一般社団法人国宝修理装飾師連盟が、装飾修理の基本的な理念や技術についてまとめたものです。

前者は、書画について起こりやすい損傷を具体的に挙げながら、その状況の説明と必要な処置を図版入りでわかりやすく、簡潔に解説します。傷んだ書画に実際に接する現場で役立つ実務的な内容であり、これから修理を学ぼうという方々にとっての入門書としても役立つ一冊です。

後者は、装飾修理の技術や理念についてより詳しくまとめた専門書です。書画の本紙、および表装部分を含めた装丁の基本的な素材と構造上の特徴、具体的な劣化や損傷の

要因や見分け方、その上での調査・記録の要点と、修理の処置および装丁の基本手順、各工程における技術的目的、必要な各種の材料や用具の特徴と選択、それに伴う留意点などを詳細に説いた上で、実際の修理事例をもとに改めて解説していきます。初学者から専門家まで広く参照し得る総合的な内容で、巻末の参考文献や用語索引も充実しており、絵画修理に関する最も基礎的な文献の一つと言えます。

●文化財の保存にたずさわる人のための行動規範

※東京文化財研究所ホームページにて公開

https://jsccp.or.jp/abstract/regulate_08.html

文化財保存修復学会が2008年7月8日に制定した行動規範で、「広く文化財の保存にたずさわる人が守るべき規範となりうると信ずる」とされるものです。

●展示図録『日本の表装』京都大学総合博物館・京都文化博物館、2016年

日本の装飾修理と表装文化をテーマに、京都大学総合博物館と京都文化博物館で共同開催した展示図録を合冊したもので、二部構成となっています。このうち、京都大学総合博物館会場の展示をまとめた「紙と絹の文化を支える」は、絵画と書跡について「なぜ残るのか」、「なにを残すのか」、「なにを変えるのか」という問いをたて、損傷の甚だしい作品の姿や過去の修理の痕跡をみなおすことで、修理という行為の内実を考えようとする試みとなっています（京都文化博物館会場に対応する内容は、6 表装と修理の文化史、の項で後述）。

●『定期研修会報告集 第24回(平成30年度) 建造物修理における装飾修理技術』国宝修理装飾師連盟、2018年

一般社団法人国宝修理装飾師連盟が毎年実施し、発行している研修会報告書のうちの一冊で、特に絵画修理の中で特殊な位置づけにある建造物関係の絵画修理を論じるものです。襖絵や壁画などの修理には、絵画としての価値の保全と、建造物の一部としての価値の保全との両立が求められ、時に困難な調整が必要となります。この報告書では、絵画・建造物それぞれの専門家が論点を提示するとともに、豊富な事例紹介、絵画・建造物・修理の専門家の座談会も掲載されており、実務に携わる方に有益な内容となっています。なお他の報告書も例年、様々なテーマが設定され、いずれも近年の装飾文化財の修理に

おける問題意識を知る上で非常に役立ちます。

【その他の文献】

- ・国宝修理装演師連盟 編『定期研修会報告集』一般社団法人国宝修理装演師連盟、1995年創刊(年刊)
- ・国宝修理装演師連盟 編『日本美術品の保存修復と装演技術 国際シンポジウム講演収録集』クバプロ、1996年
- ・文化財保存修復学会 編『文化財の保存と修復 3 伝統に生かすハイテク技術』クバプロ、2000年
- ・国宝修理装演師連盟 編『日本美術品の保存修復と装演技術 その式』クバプロ、2002年
- ・文化財保存修復学会 編『文化財の保存と修復 7 伝統ってなに?』クバプロ、2005年
- ・国宝修理装演師連盟 編『日本美術品の保存修復と装演技術 その四 本紙のもつ情報』クバプロ、2009年

3 修理報告書

文化財修理は、ものの保管や作業上の安全性の確保などの制約があるため、限られた関係者のみが携わる場合も少なくありません。しかし修理の過程ではじめて把握できる情報も多く、学術的に大きな意義をもつ事実が明らかになることもあります。また、その後の保存や管理、次回以降の修理のためには、施された処置の詳細な記録は重要な意味を持ちます。したがって、修理に携わる者は、適正な記録や報告書を作成し、その保管や公表に努めることが求められます。ここではその模範となるような充実した報告書について、いくつかの事例をご紹介します。このほか、博物館、美術館や文化財修理工房が刊行している修理報告書が基礎資料として有益です。

【文献】

- ・高山寺監修・京都国立博物館 編『鳥獣戯画 修理から見えてきた世界—国宝 鳥獣人物戯画修理報告書』勉誠出版、2016年
- ・高野山文化財保存会 編『国宝応徳仏涅槃図の研究と保存』東京美術、1983年
- ・『国宝伝源頼朝像・国宝伝平重盛像・国宝伝藤原光能像修理報告』岡墨光堂、1983年
- ・修理者協議会 編『京都国立博物館文化財保存修理所創設10周年記念報告書 美の修復』修理者協議会、1990年
- ・教王護国寺 編『教王護国寺所蔵重要文化財絹本著色両界曼荼羅図残闕(甲本)二幅修理報告書』教王護国寺、2004年
- ・『Museum No.654 特集:国宝檜図屏風 平成の大修理』

東京国立博物館、2015年

・高山寺監修・京都国立博物館 編『鳥獣戯画 修理から見えてきた世界—国宝 鳥獣人物戯画修理報告書』勉誠出版、2016年

4 用具・材料

修理にあたっては、まず対象となる文化財の構造や物性を正確に理解する必要があります。また、その物理的な安定をはかるために、どのような用具や材料を用い、どのような処置を行うのかを判断しなければなりません。絵画をめぐる現代の文化財修理においては絵具や墨、基底材となる紙や絹といった各種の伝統的な材料、さらには科学研究の成果というべき新素材などの多様な材料類の特性と、それを用いる技術の特質をよく理解して選択しなければ、修理を適切なものへと導くことは困難です。

これについては修理の要点を説いた前記の諸書、特に『装演文化財の保存修理 東洋絵画・書跡修理の現在』や『文化財修復の現状と諸問題に関する研究会 報告書』巻末の用語解説などが参考となりますが、その他にも東京文化財研究所発行の雑誌『保存科学』や各種の報告書、『文化財保存修復学会誌』(文化財保存修復学会発行)をはじめとする各種の研究雑誌等に掲載される様々な論考があり、また修理に深く関わる研究機関や研究者の立場から一般向けに分かりやすく説いた文献もあります。

特に今日の社会において、文化財修理の材料や道具として欠かせない伝統的な製品の数々は、次第に生産が難しいものとなりつつあり、このことも絵画修理をめぐる深刻な課題となっています。

●森道彦・長村祥知 編『令和の職人譜 文化財修理の道具と材料』京都歴史文化施設クラスター実行委員会(京都文化博物館)、2019年

書画の修理に不可欠な伝統材料や用具の概略を解説した上で、各地の生産現場に取材し、製造の基本工程や生産の現状を写真入りで記した小冊子です。文化財修理の用具原材料の希少な生産者団体として選定保存技術の保存団体に認定されている一般社団法人伝統技術伝承者協会に属する、刷毛・和紙・木工(障壁画下地・保存箱など)・漆工・金工・唐紙・藍染・金糸製造・表装裂・紐

類の製造が取り上げられています。

●『月刊文化財 令和2年10月号 特集 美術工芸品修理に用いる用具・原材料』第一法規、2020年

修理に用いる用具や原材料の現状を簡潔にまとめた特集号です。文化庁文化財第一課による現状報告、表装用手漉和紙の選定保存技術保持者3名と国宝修理装潢師連盟による座談会に加え、湯山賢一「日本の紙と文化財、文化財修理」、森道彦「装潢の系譜と現在」、奥健夫「彫刻修理における伝統技術と材料・用具」、早川典子「伝統材料と技法の関連性について—科学的視点から—」などを収録します。

【その他の文献】

- ・東京国立文化財研究所 編『表具の科学』東京文化財研究所、1977年
- ・『伝統的修復材料に関する調査研究 I～V』東京文化財研究所、2002～2007年
- ・園田直子 編『国立民族学博物館調査報告 36 合成素材と博物館資料』国立民族学博物館、2003年
- ・国宝修理装潢師連盟 編『日本美術品の保存修復と装潢技術 その参 染/織/裂/紙』クバプロ、2006年
- ・鈴木規夫『日本の美術 492 文化財と科学技術 東京文化財研究所の仕事』至文堂、2007年
- ・『伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究報告書 2007年度～2012年度』東京文化財研究所、2008～2013年
- ・『文化財における伝統技術及び材料に関する調査研究報告 2013～2015年度』東京文化財研究所、2014～2016年
- ・展示図録『ユネスコ無形文化遺産登録記念 特集展示 和紙—文化財を支える日本の紙』奈良国立博物館、2015年
- ・『文化財修復材料の適用に関する調査研究 平成二十三～二十七年度』東京文化財研究所、2016年
- ・『選定保存技術資料集 平成28年度版』東京文化財研究所、2017年
- ・『無形文化遺産(伝統技術)の伝承に関する研究報告書Ⅲ 絹織製作技術』東京文化財研究所、2021年

5 表装

絵画を掛軸、卷子、冊子、屏風、襖、額といった様々な形状に仕立てる表装に関する知見も、修理にとって不可欠のもの

です。表装は保存の上で合理的なばかりでなく、本紙の周囲を装飾する裂と呼ばれる染織品をはじめとする各種材料の組み合わせは、仕立てられた時代の文化を色濃く反映し、作品の鑑賞性を大きく左右します。修理にあたっては劣化した表装裂を新調する必要が少なからず生じるため、その選択・判断に関わる者には特に知識や見識が求められます。

茶の湯の掛物に関する表装裂の割付作法や取り合わせが歴史的に重んじられてきたこともあり、掛軸の表装を紹介する専門書は早くから刊行されてきました。また書跡・典籍、古文書の形態や仕立てについては、歴史学の方面から充実した研究がなされており、参考となる図書も多数にのびります。以下はその代表的な例です。

【文献：表装】

- ・湯山勇『表具のしるべ』表装美術研究会、1967年
- ・向井一太郎・湯山勇『表具問答』表装美術研究会、1975年
- ・古賀健蔵 監修『表装大鑑 1～4』、柳原書店、1987年
- ・山本元『表具のしおり 表装の歴史と技法』芸艸堂、1996年(再版、1924年初版)
- ・岡本吉隆『表具 和の文化的遺伝子 表具の設計と表具地の用法』三晃社、2007年

【文献：書跡・典籍、古文書】

- ・遠藤諦之輔『古文書修補六十年 和装本の修補と造本』汲古書院、1987年
- ・櫛笥節男『宮内庁書陵部 書庫渉獵』おうふう、2006年
- ・吉野敏武『古典籍の装幀と造本』印刷学会出版部、2006年
- ・池田寿『日本の美術 480 書籍・典籍、古文書の修理』至文堂、2006年
- ・藤本孝一『日本の美術 505 文書・写本の作り方』至文堂、2008年

6 表装と修理の文化史

修理に携わる者を悩ませるのが、過去の伝来や修理の痕跡をどのように扱うかという問題です。文化財には、欠損部や彩色の補修、金具・表装裂・紐などの部材、さらには墨書や保存箱など、伝来や修理の過程で付加された要素が少なくありません。これらは現在の価値観や保存上の観点からは不適合であったとしても、作品の履歴を伝える資料的な価値を有しており、修理にあたってどのように扱うか(例えばそのままに維持するのか、除去・別置保管するのかなど)、しばしば高度な

判断が求められます。その判断を適切なものとするには、表装や修理という文化的な営みがどのような歴史をたどってきたのか、その実例や傾向を知ることが有益な場合があります。以下に示した文献は、そうした文化史をたどる上で参考になるものです。

●渡邊明義・岡興造・石川登志雄『装潢史』国宝修理装潢師連盟、2011年

装潢修理の源流である、表装における仕立ての技術や、装飾上の美意識などの歴史的展開を論じた本です。中国に源を発するそのあり様と、古代から近代に至るまでの日本における技術的展開や時代ごとの美意識の変遷を、卷子と掛軸を中心に、屏風や冊子も含めつつ、豊富な図版とともにたどります。書画・典籍の修理技術を指す文化財用語として用いられている「装潢」の語源についても解説します。

●展示図録『日本の表装』京都大学総合博物館・京都文化博物館、2016年

日本の装潢修理と表装文化をテーマに、京都大学総合博物館と京都文化博物館で共同開催した展示図録を合冊したもので、二部構成となっています。このうち、京都文化博物館会場の展示をまとめた「掛軸の歴史と装い」は、掛軸の歴史をたどる内容です（京都大学総合博物館会場に対応する内容は、2 修理技術と倫理、の項で先述）。第1章「遺された祈りの装い」（掛軸の成立と古代中世の宗教絵画の表装について）、第2章「歴史を表装する」（古文書や肖像画など、表装の資料的性格について）、第3章「表装の思想と美意識」（東山表装など、芸術化を進めた表装について）、第4章「拡張する表装文化」（掛軸に擬した染織品など、表装文化の多様な展開について）で構成されます。

●展示図録『保存と修理の文化史』京都文化博物館、2018年

過去から伝わったものを保存し、修理するという行為の文化史を扱ったものです。第1章「災厄との対峙」（災害や劣化に備えた営みの事例について）、第2章「修理の動機」（過去に行われた修理の多様な動機について）、第3章「名宝の履歴」（歴史的に重視されてきた名宝について通時的に知ることのできる時代ごとの修理事業について）、第4章「修理の技術と思想」（時代ごとの修理に認められる多様な価値観について）で構成されます。

●展示図録『古社寺保存法の時代』京都文化博物館、2019年

現在の文化財保護行政の出発点となった古社寺保存法の成立前後を扱ったものです。第1章「古器旧物の明治維新」（江戸時代後期の古器旧物調査から明治初年の諸政策まで）、第2章「古社寺保存の機運」（臨時全国宝物取調事業から帝国博物館の整備まで）、第3章「国宝継承の模索」（古社寺保存法の成立から最初期の国宝修繕まで）で構成されます。

●展示図録『道具と材料の職人譜』京都文化博物館、2019年

表装の文化を、職人の技術の歴史から再検討するものです。第1章「寄り集まる素材と技術」（装潢文化財のもつ素材と技術の集合体という性格について）、第2章「表装を支える職人たち」（箱、裏打紙、唐紙、木工、飾金具、紐、裂の歴史について）、第3章「表装技術の伝承者」（表装の技術と道具の歴史について）で構成されます。

●岩崎奈緒子・中野慎之・森道彦・横内裕人 編『日本の表装と修理』勉誠出版、2020年

表装と修理の文化に関する学術的な論考を集めたものです。第一部「現代の装潢・文化財修理」では、昭和後期から平成にかけて劇的と言えるほどの変化を迎えた文化財修理の現場について、これに携わった第一人者の所見が収録されます。その表装の古代から近代までの様相を、学術的な視点から論じたのが第二部と第三部の諸篇で、第二部「表装の文化史」、第三部「修理の文化史」として構成されています。

付記：本稿は静岡県博物館協会2020年度事業シンポジウム「これからのミュージアムを考えよう」（2020年11月3日）における講演（森道彦「文化財保護と博物館・展覧会－近現代の京都を事例として」、中野慎之「学芸員と所有者・制度・専門家－京都府下の事例から」）で提示した問題意識に出発し、共同で作成したものです。当日お世話になった皆様に深くお礼を申し上げます。

静岡近代美術年表稿 昭和戦後編 7

立花 義彰

1960年代の県総合開発事業・静岡県政の重点施策「教育文化の振興」の一環として、1963(昭和38)年より静岡・清水間にまたがる有度山麓に県文化センターが構想された。図書館、美術博物館、音楽堂ホール及び園地の基本構想図面及び建築模型等が公表されている。1970(昭和45)年4月18日には、その中核施設として全体の管理部門を持つ県立中央図書館が開館、20日から一般公開された。県立中央図書館は鉄筋コンクリート4階建て延べ面積約8,900㎡で、その2階に展示スペースを有しており、当初は展覧会も行なわれたが、市街地からの交通の便の悪さから県内発表活動の中心的存在とはならなかった。

なお、園地及び駐車場以外の施設整備はその後の景気後退に伴う県財政の悪化によって見送られたままとなった。美術博物館の建設については、1977(昭和52)年2月の県議会での知事発言以降、当初の構想は修正されて、1980年代の県議会百年記念事業の一環としての美術博物館建設構想へと受け継がれ、駿府公園内への建設を目指すこととなったが、建設予定地内からの今川時代の遺構発見により、再び元の県文化センター敷地内へと、謂わば振り出しに戻る形となる。

浜松市へ眼を向けると、1971(昭和46)年浜松市美術館が開館している。浜松市美術館は、鉄骨コンクリート造、一部に地下及び塔屋を有する二階建て、延床面積2,466㎡、内田六郎寄贈のガラス絵コレクション等が当初の主な展示・収蔵品であった。

インカ帝国展等、多くの展覧会が、県内デパート会場で開催されていたが、「文化展 快適さもひと工夫を」(朝日静岡版6/24)が指摘するように、狭い会場での限界が露呈していた。戦後生まれの社会人が増えていく中であって施設の老朽化や制度の劣化は進んでおり、それは県民会館に於いても例外ではない。

この時期、創作発表活動の場での最大の“事件”は、1970(昭和45)年の《死亡届》事件であろう。この年の県芸術祭の版画部門へ出品され入選した同作の展示を、主催者側が拒否

したもので、表現の自由に関わる問題として法廷の場で争われる事となり、1972(昭和47)年6月に県側の敗訴が確定した。

戦前・戦後を通じ地元画壇勢力に癒着して行われて来た展覧会審査や運営の問題に、一石を投じるものでもあったのだが、旧套的な画家及び行政側にしてみれば、デュシャン以降の自己言及・自己批判も含めた批判としての芸術の存在は理解を超えたものであり、不可侵の「美術」への冒涇と受け止められたのであろう。

版画技法としてのコピーによる《死亡届》を、現存写真及び資料から考察する。募集要項・封筒、死亡診断書・死亡届、出品票の3点のコピーから構成され、作者は、書類に代表される虚構からの回帰を表したと言う。

この年の死亡届には国勢調査のため設けられた職業記載欄があり、そこには「芸術家」と、若干細めの「制作過程を考える上で興味深い」筆記用具での記載がある。他は太い筆記用具の力強い角ばった筆致で、右半分の死亡診断書部分には直接死因として「急性心死」、その原因欄「原因不明」、身体的状況を「権威順応性マゾイスト 積極的慢性自閉症」、発病年月日を前年の「昭和44年」と記す。左側の死亡届の死亡日に訂正跡があり「昭和45年11月7日午前9時30分」、死亡者氏名は「静岡県芸術祭美術展」、世帯主を「静岡県民会館」とし、本籍は「静岡県教育委員会・社会教育課」、下段の届出人欄は作者杉山邦彦(1943-1991)のサインとなっている。捺印はない。左の診断書下段の署名欄も同様である。

発病を前年の昭和44年と記した理由としては、その年の飯田昭二の招待出品作の展示拒否が想起される。

しかしながら、作者である杉山邦彦も含め、飯田昭二(1927-2019)ら当時を知る方々の多くが故人となった上に、本稿で対象とする地元紙での言及は意外な程に少ない。原告側が、事件当初の報道を当局側寄りの偏向報道と批判していた事にも留意する必要がある。その点で、故飯田昭二旧蔵資料に啓発される点は多い。

1969 昭和44年

- 1/ 2 サロン・ド・エコール美術協会新作展於新静岡センター(-10)。(静岡S43.12/12, S44.1/9)
- 1/ 吉野勝彦個展於静岡谷島屋書店(-8)。(静岡1/6)
- 1/ 4 永井正御・飯塚正男・岩波とく展於天竜市民会館(-6)。(静岡1/6)
- 1/ 吉野不二太郎滞欧作品展於清水花菱(-12)。(読売静岡B版1/7, 静岡1/10)
- 1/ 杉山邦彦個展於静岡谷島屋書店(-15)。(毎日中部版1/10, 読売静岡B版1/11, 静岡1/13)
- 1/ 金子竜雄《曾我兄弟》置物。(読売静岡B版1/7)
- 1/ 6 上田臥牛展於東京日動サロン(-13)。(朝日1/11)
- 1/ 9 竹田京一個展於県民会館(-15)。(静岡S43.12/12, S44.1/9, 10)
- 1/11 長尾タダユキ個展於新静岡センター(-20)。(静岡1/10, 13, 読売静岡B版1/14, 16)
- 1/ 8 アンデパンダン第1回展於県民会館(-15)。(読売静岡B版1/6, 静岡1/10, 11)
- 1/14 県善三郎・伊藤輝彦展於浜松遠鉄(-19)。(毎日西部版1/11)
- 1/ 堤達男《少女像》於土肥。(静岡1/17)
- 1/ 鍋井克之遺作展示於藤枝斎木宅。(静岡1/20)
- 1/16 曾宮一念スケッチ淡彩展於東京兜屋画廊(-26)。(朝日1/18, 読売1/20)
- 1/17 県西部美術第1回展於浜松遠鉄(-22)。
- 1/24 藤本東一良展於東京日動サロン(-31), 於名古屋日動画廊(3/-10)。(朝日1/22, 読売1/22, 中日3/4)
- 1/25 安田酔竹竹画新作展於静岡松坂屋(-31)、於浜松松菱(3/4-9)。(静岡1/24, 2/28)
- 1/ 井上速男洋画個展於新静岡センター(-31)。(読売静岡B版1/28)
- 1/31 川端政雄近作水彩展於清水花菱(-2/5)。(朝日駿豆, 静岡, 遠州版1/26, 読売静岡B版1/31)
- 2/ 1 杉山有個展於静岡谷島屋書店(-5)。(静岡1/30)
- 2/ 高野良之助展於新静岡センター(-10)。(朝日駿豆, 静岡, 遠州版2/2, 静岡2/7, 読売静岡B版2/8)
- 2/ 塚本広行水彩画展於県民会館(-10)。(朝日駿豆, 静岡, 遠州版2/2, 読売静岡B版2/4, 静岡2/6, 7)
- 2/11 狩野幹夫小品展於新静岡センター(-19)。(静岡2/7, 読売静岡B版2/19)
- 2/ 高梨正洋画・色紙展於沼津東電サービスセンター(-)。(毎日東部版2/16)
- 2/12 江崎金彦写真展於静岡田中屋(-17)。(静岡2/6, 7, 14)
- 2/14 中村宏個展於東京紀伊国屋画廊(-23)。
- 2/17 鈴木正・大橋忍二人展於県民会館(-20)。(朝日駿豆, 静岡, 遠州版2/16, 毎日中部版2/16, 静岡2/20)
- 2/ 池田正司水彩展於清水花菱(-26)。(静岡2/24)
- 2/20 《三島えはがき》柏木俊一, 下田舜堂, 山口源, 細井繁誠, 杉本英一, 栗原誠, 高梨勝滯, 芹澤晋吾, 大沼貞夫, 冬木徹。(三島民報2/20, 25, 3/5, 20, 25, 毎日東部版3/30)
- 2/20 現代美術講演会於県民会館。講師: 寺山修司・石子順造。(静岡2/17, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版1/26)
- 2/21 見城春男個展於新静岡センター(-28)。(毎日中部版2/21, 読売静岡B版2/22, 朝日駿豆, 静岡, 遠州版2/23)
- 2/22 横井弼童画展於沼津ワシントン靴店(-3/3)。(沼津朝日2/15, 3/8, 沼津毎日2/20, 27)
- 3/ 1 猪飼重明、近況。(静岡3/1)
- 3/ 小林洋子油絵展於静岡扇子屋(-9)。(読売静岡B版3/1, 7)
- 3/ 渡辺清個展於清水花菱(-5)。(静岡3/3)
- 3/ 6 重岡建治《はばたきの像》除幕式於伊東東小学校。(読売静岡B版1/20*, 静岡3/6)
- 3/ 6 エルモア・オガード来清。(毎日中部版3/7)
- 3/ 7 曾宮一念近作油絵展於東京松屋(-12)。(朝日3/5, 毎日3/8, 読売3/10)
- 3/ 7 第12回安井賞展於東京池袋西武(-19)。
市川正三《壁》沢村美佐子, 土井俊泰。
- 3/11 山水画展於佐野美術館(-4/20)。(三島民報2/25, 3/10, 30, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版3/9, 静岡3/12, 毎日東部版3/20)
- 3/11 全和鳳個展於新静岡センター(-20)。(朝日静岡, 遠州版3/12, 静岡3/13, 読売静岡B版3/14)
- 3/14 中村宏個展於東京紀伊国屋画廊(-23)。(読売3/11)
- 3/18 第28回水彩連盟展於東京都美術館(-31)。
新会員。(静岡3/20)
- 3/19 南画・文人画展於県民会館(-22)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版3/16, 読売静岡B版3/19, 静岡3/20,

- 毎日中部版3/20,目録)
- 3/19 伊藤勉個展於静岡小谷画荘(-23)。(朝日駿豆,静岡,遠州版3/16,読売静岡B版3/19,20,静岡3/20)
- 3/ 豊島春彦油絵個展於清水花菱(-26)。(静岡3/24)
- 3/21 相沢常樹個展於沼津緑屋(-25)。(沼津3/20,沼津朝日3/21)
- 3/21 河野修治個展於静岡扇子屋(-30)。(朝日駿豆,静岡,遠州版3/16,静岡3/20,毎日中部版3/23,読売静岡B版3/23,29)
- 3/22 杉山有日本画展於新静岡センター(-31)。(静岡3/20)
- 3/25 奥村英夫展於静岡産業会館(-30)。(朝日駿豆,静岡,遠州版3/23)
- 3/27 武田範芳バリ近作展於静岡産業会館(-4/6)。(静岡3/20,27,4/4)
- 4/ 1 モダンアート協会展於東京都美術館(-19)。
入選者。(朝日駿豆,静岡,遠州版3/31)
- 4/ 1 第37回日本版画協会展於東京都美術館(-19)。
栗山茂《生物詩A》《同B》山口源《偶感》
入選者。(中日遠州版3/29)
- 4/ 1 芹澤銑介作品展於静岡田中屋(-6)。(静岡3/28,4/2,4,読売静岡B版4/1,毎日中部版4/1,3,中日遠州版4/1)
- 4/ 1 静岡ゆかりの画家名士墨蹟遺作名品展於静岡松坂屋(-6)。(読売静岡B版4/1,静岡4/2)
- 4/ 静岡市制80周年記念美術・書道・写真展於静岡産業会館(-6)。(読売静岡B版4/1,静岡4/1,4)
- 4/ 1 書道名流作家第1回展於新静岡センター(-10)。
(朝日駿豆,静岡,遠州版3/30,読売静岡B版4/1,静岡4/3,朝日伊豆岳南,静岡,遠州版4/6)
- 4/ 1 青木ヨシノブ展於静岡扇子屋(-10)。(読売静岡B版4/1,2,朝日駿豆,静岡,遠州版4/6)
- 4/ 2 第55回光風会展於東京都美術館・日本美術協会(-19)。
藤本東一良《港の公園》《上昇気流》島戸繁《落日の印象》
- 4/ 2 自由美術会展於伊東前田ビル(-)。(静岡4/2)
- 4/ 2 国際青年美術家展於県民会館(-6)。(読売静岡版4/2,静岡4/4,7,朝日駿豆,静岡,遠州版4/6)
- 4/ 6 川村驥山逝去。86歳。(美術年鑑S.45,静岡4/7,読売4/7)
- 4/11 中野謙二展於新静岡センター(-20)。(静岡4/4,11,18,朝日駿豆,静岡,遠州版4/6,11,20)
- 4/ 静風クラブ写真第2回展於静岡扇子屋(-20)。(毎日中部版4/12,読売静岡B版4/13,17,朝日駿豆,静岡,遠州版4/13)
- 4/12 第17回日彫展於東京都美術館(-5/3)。
澤田政廣《釈迦》重岡建治《鳥と少女》下山昇《想》
杉本宗一《首》堤達男《緑風》飛岡文一《ユーゴの画家》平馬学《若樹》平野敬吉《散華》松田裕康《実り》山本利治《漁夫》和田金剛《女》(出品目録)
下山昇、奨励賞。(三島民報5/15)
- 4/17 三沢佐助喜寿記念展於県民会館(-21)。(静岡4/11,18,読売静岡B版4/16,毎日中部版4/18,朝日駿豆,静岡,遠州版4/20)
- 4/18 鈴木貞夫展於浜松明治生命(-22)。(毎日西部版4/16,静岡4/18)
- 4/21 島津士嘉秀作展於新静岡センター(-30)。(静岡4/18,朝日駿豆,静岡,遠州版4/20)
- 4/21 曾宮一念淡彩展於浜松ナカムラ画廊(-28)。(毎日西部版4/23)
- 4/ 原田政太郎展於静岡扇子屋(-30)。(読売静岡B版4/22,24,朝日駿豆,静岡,遠州版4/27,静岡4/28)
- 4/22 第43回国画会展於東京都美術館(-5/8)。
青木達弥《F.S.E.101》渋川栄志《暁》野田好子《海・月》伊藤勉《紅いろA》《同B》栗山茂《生物詩》中川雄太郎《伝説》山口源《私は言わない》
白沢良《白バラ-69》入選。(読売静岡B版4/22)
- 4/22 第46回春陽会展於東京都美術館(-5/8)。
井上重生《多賀》《海辺》小栗哲郎《早春みかん山》
広野殷生《山村の雪》《山里の残雪》
- 4/23 第55回光風会静岡展於県民会館(-29)。(静岡4/18,21,23,25,28,読売静岡B版4/22)
- 4/ 内田公雄個展於東京樺画廊(-26)。(朝日4/23,静岡4/28)
- 4/ 鈴木三朝展於浜松遠鉄(-5/2)。(朝日駿豆,静岡,遠州版4/27,毎日西部版4/30)
- 4/29 吉野紘一個展於熱海市文化会館(-30)。(毎日東部版4/27,静岡4/30,読売静岡B版4/30,朝日駿豆,遠州版4/30)
- 5/ 1 増田大罌水墨近作展於新静岡センター(-10)。(静岡4/25,5/2,9,読売静岡B版4/30,5/1,毎日中部版4/30,朝日駿豆,静岡,遠州版5/5)

- 5/ 1 春萌会第1回展於静岡扇子屋(-10)。(朝日駿豆, 静岡, 遠州版4/27, 読売静岡B版4/30)
- 5/ 池田満寿夫ミニアチュール作品展於静岡金清軒オリオン店(-末)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版5/5)
- 5/ 2 吉野啓子展於清水花菱(-7)。(毎日中部版4/29)
- 5/ 3 曾宮一念「盲目と芸術について」(中日5/3)
- 5/ 3 大村政夫、県文化奨励賞受賞。(静岡5/2, 読売静岡B版5/2, 朝日駿豆, 静岡, 遠州版5/2)
- 5/ 8 インターメディア69展於浜松遠鉄名店ビル(-12)。(静岡5/9)
- 5/10 第9回現代日本美術展於東京都美術館(-30)。
北川民次《哺育》佐野繁次郎《母と子》宮脇愛子
《光のパイプ1969 no.025》飯田昭二《トランスマイ
グレーション》前田守一《Rheology》鈴木慶則
《See, Saw, Seen》中村宏《-飛行する蒸気機関車》
小池一誠《石》(美術年鑑S.45*)
- 5/11 長谷川栄一水彩個展於静岡扇子屋(-20)。(毎日
中部版5/9, 読売静岡B版5/10, 朝日伊豆岳南, 静
岡, 遠州版5/11, 静岡5/15)
- 5/ 渡辺輝夫芸術生活コンクール受賞記念展於清水
市中央公民館(-17), 於県民会館(21-23)。(読売静
岡B版5/16, 20)
- 5/13 杉山吉良写真新作展於静岡松坂屋(-18)。(静岡
5/9, 12, 13, 15, 16, 18, 7/6, 毎日東, 中部版5/14)
- 5/15 県美術家連盟第6回展於県民会館(-21)。(静岡
5/9, 16, 19, 毎日中部版5/9, 読売静岡B版5/16, 朝
日伊豆岳南, 静岡, 遠州版5/18)
- 5/16 吉野不二太郎展於静岡産業会館(-20)。(静岡
5/9, 16, 19, 毎日中部版5/16, 朝日駿豆, 静岡, 遠州
版5/18)
- 5/18 芥川永《平和慰霊観音像》開眼式於清水町法泉
寺。(沼津朝日5/15)
- 5/21 狩野幹夫展於新静岡センター(-31)。(朝日駿豆, 静
岡, 遠州版5/18)
- 5/21 柴田俊個展於静岡扇子屋(-31)。(毎日中部版5/21,
読売静岡B版5/23, 静岡5/26)
- 5/ 壮炎会展於浜松市民会館(-25)。(朝日駿豆, 静
岡, 遠州版5/23)
- 5/22 世界の名画第8回展於村上開明堂(-6/1)。(朝日
駿豆, 静岡, 遠州版5/27)
- 5/23 版画と写真で見る東海道五十三次展於県民会館
(-6/15), 於富士文化センター(7/5-7)。
(毎日中部版5/23, 静岡5/24, 6/6, 13, 朝日駿豆, 静
岡, 遠州版5/25, 読売静岡B版5/28)
- 5/24 静流会第24回展於沼津富士急(-26)。(沼津朝日
5/25)
- 5/27 「井上市三郎 人物登場」(静岡5/27)
- 5/28 浅井昭近作個展於浜松市民会館(-6/1)。(静岡
5/30, 毎日西部版5/30, 朝日駿豆, 静岡, 遠州版6/1)
- 5/ 松島達太郎展於浜松遠鉄(-6/1)。(静岡5/30)
- 6/11 藤野嘉市展於静岡扇子屋(-20)。(毎日中部版6/11,
静岡6/12, 読売静岡B版6/13, 朝日駿豆, 静岡, 遠
州版6/10, 15)
- 6/13 望月清作喜寿記念展於清水花菱(-18)。(静岡6/12)
- 6/18 インカ帝国展於静岡田中屋(-26)。(静岡6/13, 16,
17, 19, 20, 毎日中部版6/21, 朝日伊豆岳南, 静岡,
遠州版6/24)
- 6/ 大谷久子個展於浜松ナカムラ画廊(-23)。(毎日西
部版6/18)
- 6/19 板谷房《お前の席はここにはない》(静岡6/19)
- 6/19 曾宮一念『紅と灰色』出版記念会於富士宮山幸。
(読売静岡B版6/18)
- 6/20 伊東写真友会第1回展於伊東和田湯会館(-22)。
(静岡6/21)
- 6/ 狩野幹夫個展於静岡扇子屋(-30)。(静岡6/26, 27)
- 6/23 石子順造「現代マンガは青年の“駄菓子”か?」(静
岡6/23)
- 6/24 県版画協会第34回展・日本版画協会展於県民会
館(-29)。(静岡6/9, 26, 27, 毎日中部版6/22, 朝日駿
豆, 静岡, 遠州版6/25)
- 6/ 澤田政廣《聖観音像》於清水龍雲院。(静岡6/26,
毎日中部版6/27)
- 6/29 堤達男《日ソ友愛の像・造船記念碑》於戸田。戸田
郷土資料館開館。(静岡2/1, 6/29, 7/2, 朝日伊豆
岳南版2/1, 6/1, 読売静岡B版6/29*)
- 7/ 1 創元会展於浜松市民会館(-6)。(朝日遠州版6/29,
駿豆, 静岡, 遠州版7/13)
- 7/ 高柳千賀子デッサン展於静岡扇子屋(-10)。(静岡
7/7, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版7/1)
- 7/ 3 藤枝市民会館開館。(静岡S43.7/20, S44.6/30,
7/3, 9)
- 7/ 5 市川正三、スペイン・モロッコ旅行(-11/)。(静岡

- 8/11, 9/8, 11/6)
- 7/ 5 斎藤庫山写真展於浜松商工会館(-11)。(静岡7/10, 朝日遠州版7/5)
- 7/ 6 竹田京一《「月の砂漠」記念像》除幕於千葉県御宿町。(静岡7/7)
- 7/ 7 二紀県支部展於浜松市民会館(-13)。(静岡7/8)
- 7/11 桐野江節雄個展於清水花菱(-16)、於沼津富士急(26-31)。(静岡7/11, 27, 毎日東中部7/11, 12, 27)
- 7/11 杉山吉良写真展於沼津西武(-23)。作品毀損事件。同於名古屋丸栄(7/26-8/7)。(中日6/17, 7/27, 8/2, 朝日伊豆岳南版7/3, 静岡7/6, 12, 16, 読売静岡版7/9, 毎日東中部版7/1, 13)
- 7/11 青木鐵夫版画展於静岡扇子屋(-20)。(毎日中部版7/8, 19, 読売静岡版7/10, 11, 静岡7/14)
- 7/ 清水久明展於静岡谷島屋(-16)。(朝日駿豆, 静岡, 遠州版7/13)
- 7/17 赤堀正巳・市川鉦次展於静岡谷島屋書店(-24)。(朝日駿豆, 静岡, 遠州版7/16, 静岡7/18)
- 7/20 屋外彫刻展於土肥松原公園(-)。(静岡7/25)
- 7/22 鈴木篤・杉山青樹路展於静岡扇子屋(-31)。(毎日中部版7/20, 読売静岡版7/23, 静岡7/24)
- 7/23 泉会洋画展於静岡松坂屋(-27)。(静岡7/24, 読売静岡版7/25, 26, 朝日駿豆, 静岡, 遠州版7/23, 27)
- 7/24 静岡・国際写真サロン展於県民会館(-27)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版7/22)
- 7/ 新井豊展於浜松ナカムラ画廊(-28)。(静岡7/26, 朝日駿豆, 静岡, 遠州版7/27)
- 7/25 渡辺雷三スケッチ展於東電サービスセンター(-28)。(毎日東中部版7/26)
- 7/ 遠美会会員第13回展於浜松遠鉄(-8/4)。(朝日駿豆, 静岡, 遠州版8/3)
- 8/ 池田正司水彩画展於静岡扇子屋(-10)。(静岡8/4)
- 8/ 矢沢五雄油絵個展於静岡谷島屋書店(-7)。(静岡8/4, 朝日駿豆, 静岡, 遠州版8/10)
- 8/ 清商出身7人展於静岡吉見書店(-9)。(静岡8/7)
- 8/ 能勢海旭書展於浜松遠鉄(-11), 於新静岡センター(-9/30)。(朝日駿豆, 静岡, 遠州版8/10, 9/29)
- 8/ 青年現代美術家集団展於静岡吉見書店(-9)。(静岡8/7, 朝日駿豆, 静岡, 遠州版8/10)
- 8/12 小林洋子小品展於静岡扇子屋(-20)。(朝日駿豆, 静岡, 遠州版8/12, 静岡8/18)
- 8/ 岡崎平一展於静岡扇子屋(-20)。(読売静岡版8/14)
- 8/16 沼津富士急名店会館四階天心画廊開廊現代作家即売会(-31)。(沼津毎日8/29)
- 8/ 日比野鈴子展於静岡谷島屋書店(-20)。(朝日静岡版8/18)
- 8/19 現代美術の動向展於東京国立近代美術館(-9/23)。飯田昭二、鈴木慶則出品。
- 8/23 石子順造「テレビ表現と明日のマンガ」(静岡8/23)
- 8/ 望月康男個展於静岡扇子屋(-31)。(静岡8/25, 朝日駿豆, 静岡, 遠州版8/31)
- 8/ 鈴木福富近況。(静岡8/26)
- 8/ 新象作家協会浜松巡回展於浜松市民会館(-31)。(静岡8/29, 9/1, 朝日駿豆, 静岡, 遠州版8/31)
- / 山口源壁画於沼津第四小学校。(毎日東中部版9/13)
- 9/ 1 第54回二科展於東京都美術館(-20)。北川民次《画家の家族》文化庁買上。(美術年鑑S.45, 46) 入選者。(毎日西部版8/29)
- 9/ 1 第54回院展於東京都美術館(-20)。小栗正《星月高原》中島多茂郎《笛吹川旅情》小栗正奨励賞受賞。(毎日西部版8/29) 入選者。(静岡8/28)
- 9/ 平井俊男展於静岡扇子屋(-10)。(朝日駿豆, 静岡, 遠州版9/7, 14)
- 9/ 3 今日的美術・自然・存在・発見・静岡展於県民会館(-7)。(静岡8/11, 29, 9/1, 3, 4, 5, 朝日駿豆, 静岡, 遠州版9/7, 沼津朝日9/17)
- 9/ 5 吉野不二太郎展於清水花菱(-10)。(毎日中部版9/4, 朝日駿豆, 静岡, 遠州版9/7)
- 9/ 6 夏山会陶芸展於静岡浮月(-7)。(静岡9/4)
- 9/ 堤達男《荊棘》平馬学《あけぼの》松田裕康《潮風》制作中。(静岡9/9, 朝日駿豆, 静岡, 遠州版9/9, 毎日東中部版9/18)
- 9/10 世界写真展「女」於静岡田中屋(-15)。(毎日東, 中, 西部版9/9)
- 9/11 松岡圭三郎逝去。72歳。(毎日東, 中, 西部版9/12, 朝日駿豆, 静岡, 遠州版9/12, 読売静岡版9/12)
- 9/ 卷本辰夫新作油絵展於静岡扇子屋(-20)。(静岡9/15, 読売静岡版9/16)
- 9/12 第23回二紀会展於東京都美術館(-30)。

- 佐野繁次郎《赤い十字架1》《同2》水野欣三郎《不死鳥》《意相》
- 9/12 聴香会第1回展於沼津市文化会館(-14)。(静岡9/10)
- 9/12 井出孝展於清水花菱(-17)。(静岡9/13,朝日駿豆,静岡,遠州版9/14,毎日中部版9/14)
- 9/ 杉山有展於静岡谷島屋書店(-17)。(静岡9/16)
- 9/15 県写真第14回展於県民会館(-27)。(朝日駿豆,静岡,遠州版8/24,9/11)
- 9/ 平井俊男新作油絵小品展於新静岡センター(-20)。(朝日駿豆,静岡,遠州版9/14,静岡9/19)
- 9/17 山口源「風土の中の風土」(沼津朝日9/17)
- 9/18 渡辺明子展於静岡谷島屋書店(-24)。(毎日中部版9/14)
- 9/20 岡常次合同展於三島渡辺ビル(-24)。(三島ニュース9/21)
- 9/20 坪井茂油絵小品展於富士宮大宮画廊(-22)。(静岡9/19)
- 9/21 風土第3回展於沼津沼津信用金庫(-23)。(沼津毎日9/9)
- 9/21 能勢海旭書展於新静岡センター(-30)。(静岡9/19)
- 9/ 海野光弘版画小品展於静岡扇子屋(-30)。(毎日中部版9/23,静岡9/25,朝日駿豆,静岡,遠州版9/29)
- 9/22 第33回新制作展於東京都美術館(-10/10)。
秋野不矩《雨期(雨季)》出品。
- 9/23 県水彩画協会第19回展於県民会館(-27)。(静岡9/19,25,26,10/1,朝日駿豆,静岡,遠州版9/23,29)
- 9/25 高橋晴風日本画展於浜松市立図書館(-28)。(朝日遠州版9/13,静岡9/19)
- 10/ 大石幸雄作品展於静岡小谷画荘(-6)。(静岡10/3,朝日駿豆,静岡,遠州版10/5)
- 10/ 1 近藤至弘作品展於静岡扇子屋(-10)。(読売静岡版9/30,静岡10/6)
- 10/ 望月祥堂展於静岡谷島屋書店(-7)。(朝日駿豆,静岡,遠州版10/5,静岡10/6)
- 10/ 2 澤田政廣近作水墨・素描展於熱海大乘寺(-7)。(朝日伊豆岳南版10/1)
- 10/ 青美会第15回展於熱海常春(-9)。(朝日伊豆岳南版10/7)
- 10/ 7 窪田孝太郎油絵作品展於静岡マスナガ(-12)。(毎日中部版10/1,静岡10/3)
- 10/ 静岡美術家集団第1回展於県民会館(-12)。(朝日伊豆岳南,静岡,遠州版10/12)
- 10/ 創元会展於浜松市民会館(-12)。(静岡10/10,朝日伊豆岳南,静岡,遠州版10/12)
- 10/ 9 大光隆油絵展於新静岡センター(-15)。(静岡10/3,読売静岡版10/12)
- 10/10 萩萩月[あい]個展於沼津富士急(-12)。(沼津毎日10/9,静岡10/11,毎日東部版10/12)
- 10/10 加賀尾僧忍作品展於静岡田中屋(-13)。(静岡10/3,10,中日遠州版10/6)
- 10/ 鷺坂博規・鷺坂せつ子二人展於静岡扇子屋(-19)。(静岡10/16,毎日静岡版10/18,朝日静岡,遠州版10/19)
- 10/12 第37回独立展於東京都美術館(-30)。
沢村美佐子《黄色い部屋》《バックミラー》山道栄助《史郎》《洞窟》,入選者。(静岡10/8,朝日伊豆岳南,静岡,遠州版10/8,読売静岡版10/8)
- 10/12 第23回二紀会展於東京都美術館(-30)。
水野欣三郎《不死鳥》《意相》,入選者。(静岡10/10,毎日中西部版10/10)
- 10/14 曾宮一念作品展於富士宮市立図書館(-19)。(朝日伊豆岳南版10/14)
- 10/14 水谷喜英展於静岡マスナガ(-19)。(毎日中部版10/1)
- 10/ 築地進油絵展於静岡産業会館(-15)。(静岡10/13)
- 10/16 日本の文学と県商業デザイナー展於静岡産業会館(-20)。(毎日中部版10/17)
- 10/ 桑原実展於県民会館(-20)。(毎日中部版10/19,朝日静岡,遠州版10/19)
- 10/ 高柳千賀子クロッキー展於新静岡センター(-25)。(毎日静岡版10/18,読売静岡版10/22)
- 10/21 杉山青樹路油絵水彩展於静岡扇子屋(-31)。(毎日中部版10/21,静岡10/23,読売静岡版10/30)
- 10/21 鈴木肇油絵作品展於静岡マスナガ(-26)。(毎日中部版10/1,静岡10/24)
- 10/25 和田金剛《増誉上人像》除幕式於沼津千本松原。(沼津毎日2/28,沼津朝日3/11,7/3,4,10,17,8/5,9/30,10/12,26,静岡8/13,10/10,21,26,毎日東部版10/10*,26,読売静岡版10/10*,朝日伊豆岳南,静岡,遠州版10/19*)
- 10/ 増田大罌展於清水花菱(-11/5)。(静岡11/3)
- 11/ 1 木梨素彦個展於県民会館(-5)。(静岡10/13)

- 11/ 1 第1回改組日展於東京都美術館(-12/9)。
野島青茲《春鶯囀》藤本東一良《海ひらく》*浅井行雄《裸婦立像》大村政夫《女》澤田政廣《人魚》*杉本宗一《少年》館野弘青《若い女》堤達男《荊棘》平野敬吉《女》**和田金剛《熱砂》*(美術年鑑S.45*, 静岡12/7**)
大村政夫,特選。(毎日中部版12/6, 静岡12/7)
重岡建治《潮風》入選。(静岡10/29, 朝日伊豆岳南版10/30)
下山昇《そよ風》入選。(三島民報11/30)
- 11/ 杉山照治・杉山瑛子展於静岡扇子屋(-10)。(朝日静岡, 遠州版11/2, 静岡11/6)
- 11/ 3 見城春男個展於静岡小谷画荘(-9)。(朝日静岡, 遠州版11/2, 静岡11/7)
- 11/ 井出芳志《笛を吹く少女》於藤枝市民会館。(毎日静岡版7/19)
- 11/ 4 松浦伸知逝去。66歳。(毎日西部版11/5)
- 11/ 6 市川正三《モン・サン・ミッシェル》11月帰国予定。(静岡11/6)
- 11/ 7 今日の作家69年展於横浜市民ギャラリー(-18)。
飯田昭二出品。
- 11/ 青木一郎油絵展於清水花菱(-12)。(毎日中部版11/9)
- 11/11 県芸術祭第9回展於県民会館・産業会館(-16)。
審査員:土方定一、北村治禧、田辺憲三、山本不二夫、中島多茂都、伊東参州。県芸術祭に国庫補助。県教育委員会主催となる。(静岡7/22, 11/7, 12, 14, 中日遠州版8/8, 毎日東中西版11/10, 11, 朝日静岡版11/12, 読売静岡版11/13)
- 11/ 栗山茂版画展於静岡扇子屋(-20)。(静岡11/17)
- 11/14 浜松市美術館建設基金募集作品即売展於浜松遠鉄ビル(-20)。(静岡11/14, 15, 毎日西部版11/15)
- 11/15 山口源「栄光の年月」(三島民報11/15)
- 11/ 渥美吉之助展於清水戸田書店(-20)。(朝日静岡11/16)
- 11/ 宮本裕之展於清水花菱(-19)。(朝日静岡, 遠州版11/16)
- 11/18 落合英男展於静岡吉見書店(-23)。(朝日静岡, 遠州版11/16, 読売静岡版11/18, 19)
- 11/18 第24回行動展於浜松市民会館(-20)。(中日11/11, 静岡11/14, 朝日静岡, 遠州版11/16, 毎日西部版11/20)
- 11/20 中村岳陵逝去。(美術年鑑S.45, 静岡11/21, 朝日11/21, 読売11/21, 22)
- 11/ 島津士嘉個展於静岡扇子屋(-30)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/23, 読売静岡版11/25, 26, 静岡11/27, 28)
- 11/ 福沢一郎《浜松信金ステンドグラス》(毎日西部版11/22)
- 11/23 長岡宏滞欧作品展於静岡小谷画荘(-26)。(静岡11/24, 朝日静岡, 遠州版11/25)
- 11/25 望月礼三展於静岡マスカガ(-30)。(静岡11/25)
- 11/ 柴田俊・伊藤道男・吉塚はつ枝三人展於清水花菱(-12/3)。(静岡12/1)
- 11/ 北川民次『美術教育とユートピア』刊行。
- 11/ 県展美術選抜巡回展於沼津文化会館(11/26-30) 浜松市民会館・島田市民会館(12/10-14)。(沼津朝日11/26, 沼津毎日11/29, 静岡12/5, 12)
- 12/ 牧野敏郎油絵小品展於静岡扇子屋(-10)。(朝日静岡版12/3, 静岡12/4, 5)
- 12/ 2 新槐樹社静岡支部第11回展於県民会館(-7)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/30, 静岡11/28, 12/1, 5, 読売静岡版12/2)
- 12/ 3 太田利三油絵個展於県民会館(-8)。
(中日遠州版11/27, 静岡11/28, 12/1, 5, 8, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/30)
- 12/ 8 増田大罌展於県民会館(-13)。(静岡12/5)
- 12/11 三淵真紀子染色展於静岡扇子屋(-20)。(静岡12/12, 15, 19, 朝日静岡, 遠州版12/11)
- 12/ 澤田政廣展於東京ギャラリーキューブ(-23)。(朝日12/12)
- 12/12 小堀稜威雄・成瀬憲・志賀旦山三人展於沼津市民文化館(-14)。(毎日東部版12/12, 沼津朝日12/13)
- 12/16 山田安展於静岡金清軒(-30)。(朝日静岡版12/14)
- 12/18 鳩巢彫刻展於松崎ショッピングセンター(-21)。(静岡12/19)
- 12/ 斉藤磐・村田収・樽松貞雄展於静岡扇子屋(-31)。(静岡12/25, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州12/21)
- 12/ 扇子屋画廊賞新設。(静岡12/22)
- 1970 昭和45年**
- 1/ 5 志水晴児《緑の泉》(沼津朝日1/6)
- 1/ 9 浜松美術連盟第4回展於浜松市民会館(-11, 13-15)。(中日遠州版S44.12/22, S45.1/14, 朝日静岡,

- 遠州版1/11)
- 1/16 美術文化協会浜松展於浜松市民会館(-18)。(中日遠州版1/15)
- 1/ パリ在住画家油絵展於清水戸田書店(-25)。(朝日静岡, 遠州版1/20)
- 1/26 歴代知事肖像画展於県民会館(-2/6)。(毎日中部版1/22, 静岡1/23, 毎日東, 中, 西部版1/27)
- 1/27 市川正三小品展於静岡幸文堂(-2/1)。(朝日静岡, 遠州版1/27, 静岡1/29, 読売静岡版1/29)
- 1/ 浜松元城町アートギャラリー開設。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版5/3, 6/22)
- 1/31 一陽会中部作家展於浜松元城アートギャラリー(-2/6)。(静岡1/30)
- / アメリカ、ストックトン市の渡辺千里、清水市へ絵画寄贈。(読売静岡版2/2)
- 2/ 1 県写真家協会発足。(静岡2/2)
- 2/ 1 鈴木篤・杉山青樹路・島津士嘉三人展於静岡扇子屋(-10)。(朝日静岡, 遠州版2/1, 静岡2/5, 6)
- 2/ 1 女流画家展於静岡金清軒(-15)。(静岡1/30, 31, 2/6, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版2/1)
- 2/ 3 山田安油絵展於静岡マヌガ(-8)。(朝日静岡, 遠州版2/1, 3, 静岡2/6)
- 2/ 青木達弥展於静岡幸文堂(-8)。(静岡2/6, 7)
- 2/ 9 木津悠司日本画展於新静岡センター(-12)。(毎日中部版2/7, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版2/8)
- 2/ 高柳千賀子展於静岡扇子屋(-20)。(静岡2/13, 16, 読売静岡版2/14, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版2/15)
- 2/ 堤幽泉、応声教院鐘楼天井画制作。(静岡2/17)
- 2/20 鳩巣会展於下田センター(-25)。(毎日東部版2/19, 静岡2/24)
- 2/ 木村正明小品展(-3/3)。(静岡3/2)
- 3/ 1 丹下健三《静岡新聞社放送会館》完成。(静岡S39. 12/1, S41. 11/11, 28, S42. 9/26, S44. 1/7, 26, 2/16, 5/7, 6/21, 29, 11/2, 3, 4, S45. 2/1, 27, 3/8, 5/4)
- 3/ 3 二紀会展於浜松市民会館(-8)。(中日遠州版3/4, 静岡3/6)
- 3/ 6 第13回安井賞展於東京池袋西武(-17)。
市川正三《無言譜》佳作賞受賞。(美術年鑑S.46)
- 3/ 7 鈴木重種展於浜松元城アートギャラリー(-10)。(朝日遠州版3/6)
- 3/10 増田大罌展於静岡幸文堂(-15)。(朝日静岡版3/10)
- 3/ 山田安水彩画個展於静岡金清軒(-31)。(朝日静岡版3/10, 静岡3/13)
- 3/ 相沢常樹個展於沼津緑屋(-22)。(沼津朝日3/17)
- 3/17 吉野不二太郎個展於静岡産業会館(-23)。(静岡3/13, 20, 23, 朝日静岡版3/16)
- 3/18 第22回三軌会展於東京都美術館(-31)。
市川正三《モロッコ 土》文部大臣賞受賞。(美術年鑑S.46)
- 3/18 江崎武男個展於静岡田中屋(-23)。(静岡3/13, 16, 19)
- 3/19 淵名ゆみ子展於静岡由定(-21)。(朝日静岡, 遠州版3/16)
- 3/21 梶野良子個展於浜松元城アートギャラリー(-24)。(朝日遠州版3/16, 静岡3/20, 22, 23)
- 3/ 太田昭・鈴木英利二人展於静岡扇子屋(-31)。(朝日静岡, 遠州版3/24, 毎日中部版3/25, 静岡3/26, 読売静岡版3/26)
- 3/30 斎藤真一個展於東京文藝春秋画廊(-4/5)。(読売4/1, 東京4/3)
- 4/ 1 第38回日本版画協会展於東京都美術館(-19)。
栗山茂《ヨブ記よりⅢ》《同Ⅳ》中川雄太郎《現代の伝説》前田守一《枷》《おつとめ》西貝和子《黙示》《碑文》
- 4/ 1 篠山紀信ヌード展於静岡松坂屋(-12)。(毎日東, 中, 西部版3/26, 静岡4/1)
- 4/ 1 縣善三郎個展於浜松元城アートギャラリー(-10)。(毎日西部版4/1, 静岡4/3)
- 4/ 2 第56回光風会展於東京都美術館(-19)。
藤本東一良《浅春の港》
入選者。(静岡3/29)
- 4/ 3 近代日本美術における1930年展於東京国立近代美術館(-5/16)。
曾宮一念《かれはなばたけ》
- 4/ 4 一言良一郎・鈴木充・山田朗三人展於静岡金清軒(-30)。(静岡4/4, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版4/5)
- 4/ 5 杉本三男・河西賢太郎・池田正司展於静岡幸文堂(-12)。(静岡4/5)
- 4/7 小林和正個展於県民会館(-11)。(静岡4/3, 10)
- 4/ 9 小栗哲郎個人展於県民会館(-11)。(静岡4/3, 9, 10)
- 4/10 木下朔孔・柏木俊秀・増島豊治スケッチ展於三島V8画廊(-25)。(三島ニュース4/12)
- 4/11 長谷川栄一水彩展於静岡扇子屋(-19)。(読売静岡版4/10, 15, 16, 静岡4/11, 16, 朝日伊豆岳南, 静岡,

- 遠州版4/12, 毎日東, 中部版4/14)
- 4/11 鈴木貞夫個展於浜松元城アートギャラリー(-20)。(静岡4/10, 毎日西部版4/14)
- 4/12 第18回日彫展於東京都美術館(-5/3)。
浅井行雄《裸婦立像》澤田政廣《仏手》重岡建治
《春草》下山昇《求道》杉本宗一《仏像》堤達男《或
るホステスの顔》堤直美《K子の首》飛岡文一《モン
パルナスの老女》平馬学《泉》平野敬吉《女》松田裕
康《春光》和田金剛《マドラスの牛》(出品目録)
- 4/14 ユーサフ・カーシュ写真展於静岡松坂屋(-19)。(朝
日伊豆岳南, 静岡, 遠州版4/13, 16)
- 4/14 静松会展於静岡松坂屋(-19)。(朝日伊豆岳南, 静
岡, 遠州版4/12)
- 4/ 中部一陽会展於浜松元城ギャラリー(-22)。(毎日
西部版4/21)
- 4/18 県文化センター開所。県立中央図書館開館。(静岡
S38.6/28, 10/11, S39.1/9, 17, S40.1/6, S41.2/24,
S42.9/16, 10/23, S43.1/19, 2/5, 10/29, S44.1/15,
11/26, S45.1/16, 4/11, 19, 5/2, 読売静岡版S32.4/
9, 7/31, 8/14, S35.8/9, S45.6/14, 朝日駿豆, 静岡,
遠州版S38.7/12, 18, 9/11, S40.1/10, 24, S41.8/
30, S42.3/16, S43.2/8, S44.2/20, 4/22, S45.2/8,
4/22, 6/29, S50.3/4, 毎日静岡版S32.4/9, S40.1/
23, S45.4/17, 19, 中日遠州版S38.7/12, S42.10/18)
- 4/18 小堀稜威雄・成瀬憲・志賀旦山三人展於沼津富
士急(-20)。(沼津毎日4/15)
- 4/20 北川民次個展於東京飯田画廊(-30)。(朝日4/25,
読売4/25)
- 4/20 三上正男展於清水戸田書店(-26)。(朝日伊豆岳南,
静岡, 遠州版4/19, 毎日東, 中部版4/21)
- 4/21 野島青茲作品展於東京高島屋(-26)。(朝日4/25)
- 4/21 和田金剛《希望の像》除幕式於沼津市立内浦小学
校。(沼津朝日4/19, 静岡4/22*)
- 4/21 岡崎平一個展於静岡扇子屋(-30)。(朝日伊豆岳南,
静岡, 遠州版4/19, 毎日東, 中部版4/21, 読売4/21,
静岡4/23)
- 4/22 第44回国画会展於東京都美術館(-5/8)。
野田好子《位幻影》伊藤勉《虚離》栗山茂《ヨブ記
よりV》《同VI》山口源《心象世界S-19》。
入選者。(中日4/22)
- 4/22 第47回春陽会展於東京都美術館(-5/8)。
- 小栗哲郎《大和田山》《遠州栗ヶ岳》広野殷生《慶
長16年日本の城》《雪行春来》
- 4/29 芹沢銈介、勲四等瑞宝章受章。(朝日伊豆岳南, 静
岡, 遠州版4/29)
- 5/3 古田晴久、県文化奨励賞受賞。(静岡5/1, 毎日東,
中, 西部版5/1, 読売静岡版5/1)
- 5/ 遠州美術会員小品展於浜松元城アートギャラリー
(-15)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版5/10)
- 5/ 4 山本美智代個展於静岡吉見書店(-10)。(静岡4/30,
5/5, 7, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版5/3)
- 5/ 松本保一水彩画展於県民会館(-9)。(静岡5/8)
- 5/ 小林和作・高島達四郎二人展於静岡田中屋(-10)。
(静岡5/8)
- 5/ 6 富岡章写真展於静岡田中屋(-11)。(静岡5/5, 読売
静岡版5/7)
- 5/ 鈴木三朝展於浜松遠鉄(-13)。(朝日伊豆岳南, 静
岡, 遠州版5/10)
- 5/10 第10回日本国際美術展於東京都美術館(-30)。
中村宏《造山運動あるいは「モナリザ」の背景》小池
一誠《石》鈴木慶則《Twin endless ring》前田守
一《栽培》宮脇愛子《作品1971 MEGU-030》市川
正三《無言譜》鈴木健司《BASE》
- 5/10 袴田省三《日曜日の絵》(沼津朝日5/10, 17, 24)
- 5/ 大滝京子油絵個展於静岡扇子屋(-21)。(静岡5/14,
読売静岡版5/16, 朝日静岡, 遠州版5/17)
- 5/11 小林清親版画展於県民会館(-23)。(朝日伊豆岳
南, 静岡, 遠州版5/10, 毎日東, 中部版5/12, 静岡
5/8, 14, 市民美術no.7)
- 5/12 ビュッフェ展於静岡松坂屋(-17)。(毎日東, 中, 西部
版5/8, 12, 静岡5/15)
- 5/13 日本伝統工芸秀作展於静岡田中屋(-18)。(芹沢銈介
《木綿地藍染いろは紋着物》(静岡5/7*, 12, 14, 朝日
静岡, 遠州版5/13)
- 5/ 浜松画廊オープン。(毎日西部版5/19)
- 5/15 高木俱展於東京松屋(-20)。(読売静岡版5/12)
- 5/16 県美術家連盟第7回展於県民会館(-20)。(静岡5/
16, 朝日静岡, 遠州版5/17, 読売静岡版5/19)
- 5/ 鈴木和夫展於清水戸田書店(-29)。(静岡5/19, 21)
- 5/21 北川民次《瀬戸市立図書館壁画》設置。
- 5/21 寺平誠介《牡丹》(静岡5/21)
- 5/ 秋山弘薫型染展於静岡扇子屋(-31)。(静岡5/28)

- 5/22 静流会第25回展於沼津市文化会館(-24)。(沼津朝日5/21, 読売静岡版5/23)
- 5/25 「渡辺妙子」(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版5/25)
- 5/27 国際写真サロン展於県民会館(-31), 於藤枝市民会館(6/3-7), 於浜松市民会館(6/10-13)。(静岡5/21, 29, 6/5, 10, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版5/24, 遠州版5/28)
- 5/27 壮炎会第25回展於浜松市民会館(-31)。(朝日静岡, 遠州版5/24, 毎日西部版5/26, 静岡5/29)
- 5/28 鈴木篤渡欧作品展於静岡谷島屋書店(-6/3)。(静岡5/28, 6/1)
- 5/30 静岡県文化協会設立総会於静岡クーポール会館。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版5/29, 静岡5/31, 毎日西部版5/31)
- 5/30 柘植太郎・小池毅・渡辺昭司三人展於沼津東電ショールーム(-6/2)。(静岡5/29, 朝日静岡, 遠州版5/31)
- 5/ 太田銀治展於熱海市文化会館(-30)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版5/31)
- 6/ 1 下岡蓮杖展於下田センター(-2)。(静岡5/24, 読売静岡版6/2)
- 6/ 2 エチオピア国宝展於静岡松坂屋(-7)。(読売静岡版5/29, 30, 31, 6/1, 2)
- 6/ 2 小林洋子個展於静岡扇子屋(-10)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版5/31, 読売静岡版6/2, 静岡6/4)
- 6/ 4 杉山良雄甲州街道スケッチ展於県民会館(-8)。(静岡5/29, 6/5, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版6/7)
- 6/ 4 増田大罇個展於静岡谷島屋書店(-10)。(読売6/3, 静岡6/4, 5, 8)
- 6/ 板谷房近況。(静岡6/8)
- 6/ 9 大村政夫彫刻展於静岡松坂屋(-14)。(静岡6/5, 10, 12)
- 6/ 9 川端政雄水彩画展於静岡幸文堂(-14)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版6/7, 静岡6/9, 読売6/9)
- 6/10 杉村孝展於静岡産業会館(-14)。(静岡6/5, 11, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版6/7)
- 6/10 新井豊個展於浜松画廊(-17)。(静岡6/12, 朝日静岡, 遠州版6/10, 毎日西部版6/16)
- 6/11 太田利三展於東京カドー画廊(-20)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版6/7)
- 6/11 杉村孝石彫刻作品展於静岡産業会館(-14)。(静岡6/5, 11, 12, 18, 読売静岡版6/10)
- 6/11 田中憲之・田端勝清・寺平誠介三人展於静岡谷島屋書店(-17)。(静岡5/21, 6/8, 12, 15, 朝日静岡版6/10, 読売静岡版6/10)
- 6/ 静心会第1回展於静岡安心堂(-15)。(静岡6/11)
- 6/11 太田京子・太田恭一二人展於静岡谷島屋書店(-17)。(朝日静岡, 遠州版6/9, 静岡6/11, 12, 15, 毎日中部版6/16)
- 6/11 藤野嘉市油絵個展於静岡扇子屋(-20)。(朝日静岡, 遠州版6/10, 読売静岡版6/10, 静岡6/12, 18, 19)
- 6/12 風土第4回展於沼津信用金庫(-14)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版6/7, 読売静岡版6/11)
- 6/15 第58回日本水彩画会展於東京都美術館(-27)。
水野以文《冬池》(美術年鑑S.46)
- 6/ 見城春男個展於新静岡センター(-19)。(朝日静岡遠州版6/18, 読売静岡版6/19)
- 6/ 山田収展於浜松元城アートギャラリー(-23)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版6/14)
- 6/15 鳩巢会彫刻除幕式於静岡登呂遺跡。(毎日東, 中部版2/25, 読売静岡版5/29, 10/14, 静岡6/9)
- 6/ 版画懇話会静岡展於静岡金清軒(-27)。(毎日東, 中部版6/16)
- 6/16 下岡蓮杖展於県民会館(-30)。(静岡6/12, 16, 19, 毎日中部版6/16, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版6/21, 読売静岡版6/27)
- 6/19 立木義浩と“イブ”たち写真展於静岡西武(-24)。(静岡6/11)
- 6/19 増野喜《静岡市戦禍犠牲者慰霊観音像》開眼式於静岡浅間山。(毎日東, 中部版S43.1/14, 静岡S43.8/21, S45.6/18, R1.8/14, 朝日静岡, 遠州版6/19)
- 6/20 大井碧水個展於県民会館(-24)。(静岡6/12, 19, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版6/14, 21, 読売静岡版6/19)
- 6/20 見城春男個展於静岡扇子屋(-30)。(朝日静岡, 遠州版6/18, 読売静岡版6/19, 静岡6/25)
- 6/20 小島俊男展於沼津富士急(-25)。(毎日東部版6/16)
- 6/23 吉野不二太郎小品展於静岡幸文堂(-28)。(朝日静岡, 遠州版6/23)
- 6/23 猪飼重明、内山牛松、国民宿舍奥浜名湖に作品設置。(中日遠州版6/11)
- 6/24 野中弘士個展於浜松アートギャラリー(-28)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版6/21, 静岡6/22, 25, 26)
- 6/24 《交通安全平和の像》於三島一番町。(静岡6/25, 読

- 売静岡版6/27*,三島ニュース6/28,三島民報6/30*)
- 6/ 狩野幹夫展於静岡扇子屋(-29)。(読売静岡版6/24)
- 6/25 大石幸雄写真展於静岡谷島屋書店(-30)。(静岡6/19,朝日伊豆岳南,静岡,遠州版6/21)
- 6/27 遠藤君雄個展於沼津富士急天心画廊(-30)。(沼津毎日6/26,静岡6/26)
- 6/ 詩祭展於静岡金清軒(-7/27)。(静岡6/29)
- 6/29 池田正司水彩画展於清水戸田書店(-7/4)。(朝日伊豆岳南,静岡,遠州版6/28,静岡7/2)
- 6/30 国持フミ展於静岡幸文堂(-7/5)。(朝日伊豆岳南,静岡,遠州版6/28,静岡6/29)
- 7/ 1 柴田俊展於静岡扇子屋(-10)。(朝日伊豆岳南,静岡,遠州版6/28,毎日中部版6/30,読売静岡版7/1,静岡7/6)
- 7/ 1 創元会浜松展於浜松市民会館(-6)。(朝日伊豆岳南,静岡,遠州版6/28,毎日西部版6/30,7/3,静岡西部版7/1,読売静岡版7/3)
- 7/ 武者小路実篤展於浜松武者小路実篤美術館(-)。(読売静岡版6/13)
- 7/ 清田英作展於浜松元城アートギャラリー(-10)。(朝日静岡,遠州版6/30,静岡7/3)
- 7/ 加山又造日本画展於西武(-15)。(静岡7/3)
- 7/ 5 巻本辰夫逝去。54才。(市民美術no.8)
- 7/ 5 井出芳志《栄光への誘い[ホルンを吹く少女]》除幕式於藤枝市民会館。(静岡6/25,7/6)
- 7/ 7 中川雄太郎かっぱ展於静岡幸文堂(-12)。(静岡7/9)
- 7/ 7 片柳忠男個展於静岡松坂屋(-12)。(毎日中部版6/30,朝日伊豆岳南,静岡,遠州版7/5,静岡7/7,10)
- 7/ 8 伊藤勉個展於県民会館(-12)。(静岡7/3,6,9,10,朝日静岡版7/8,読売静岡版7/8)
- 7/ 佐野丹丘展於沼津富士急(-13)。(毎日東,中部版8/9)
- 7/11 古田晴久個展於浜松元城アートギャラリー(-17)。(静岡7/10,15,朝日遠州版7/12)
- 7/11 加田裕子版画展於静岡扇子屋(-20)。(読売静岡版7/10,11,朝日静岡,遠州版7/14,静岡7/16)
- 7/13 佐藤康之助写真展於清水戸田書店(-19)。(静岡7/13)
- 7/13 青土会作陶展於静岡松坂屋(-19)。(朝日伊豆岳南,静岡,遠州版7/12)
- 7/14 小塩令子展於静岡幸文堂(-19)。(市民美術no.7)
- 7/ 丹沢紅嶺写真展於県民会館(-30)。(読売静岡版7/17,朝日伊豆岳南,静岡,遠州版7/19)
- 7/17 横山大観展於静岡西武(-29)。(図録,静岡7/15,20,24,朝日静岡,遠州版7/20,読売静岡版7/21)
- 7/18 県アンデパンダン第2回展於県民会館(-25)。(静岡7/17,24,読売静岡版7/21,朝日伊豆岳南,静岡,遠州版7/24)
- 7/21 鈴木福富染色作品展於静岡扇子屋(-31)。(静岡7/23,24,市民美術no.7)
- 7/23 県写真第15回展於静岡田中屋(-2)。(朝日伊豆岳南,静岡,遠州版3/31,7/4,22)
- 7/26 浦田儀一版画展於静岡金清軒(-8/29)。(朝日伊豆岳南,静岡,遠州版7/26,静岡7/31,8/3)
- 7/ 東部現代若手作家十人展於三島V8画廊(-8/10)。(三島ニュース7/26)
- 7/30 中島多茂都逝去。70歳。(美術年鑑S.46)
- 8/ 1 伊藤勉ミニ小品展静岡扇子屋(-9)。(静岡8/6,市民美術no.7)
- 8/ 1 中村稔・池ヶ谷務・白鳥隆・鈴木輝男・ウイスタリア・アートスクール:グループZ展於静岡谷島屋(-7)。(静岡7/31,朝日静岡版8/6)
- 8/ 倉松英人・八木清次二人展於静岡谷島屋書店(-7)。(静岡8/3)
- 8/ 4 池田正司展於静岡幸文堂(-9)。(市民美術no.7)
- 8/ 江崎敏夫展於静岡松坂屋(-9)。(読売静岡版8/5)
- 8/ 佐野丹丘展於沼津富士急(-13)。(毎日東,中,西部版8/9)
- 8/ 中村秀雄個展於浜松元城アートギャラリー(-12)。(静岡8/6,7,朝日伊豆岳南,静岡,遠州版8/9)
- 8/ 鈴木正己展於浜松市民会館(-9)。(朝日静岡,遠州版8/9)
- 8/10 市川正三個展於東京日本画廊(-15)。
- 8/ 小栗哲郎展於静岡松坂屋(-16)。(朝日伊豆岳南,静岡,遠州版8/16)
- 8/11 太田延高遺作展於県民会館(-17)。(市民美術no.7)
- 8/11 原田政太郎油絵展於静岡扇子屋(-20),於掛川昭和堂(23-31)。(読売静岡版8/12,14,19,静岡8/13,朝日伊豆岳南,静岡,遠州版8/16,市民美術no.7)
- 8/17 斎藤満夜展於浜松元城アートギャラリー(-28)。(毎日西部版8/18)
- 8/18 伊藤隆夫・鈴木慶則・前田守一 若柴会展於静岡

- 松坂屋(-23)。(毎日中部版8/18)
- 8/21 池田正司・八木昌一展於静岡扇子屋(-31)。(読売静岡版8/20, 26, 静岡8/24, 28)
- 8/22 大谷憲智《岡野豪夫像》除幕式於沼津岡野公園。(毎日東, 中部版8/23, 読売静岡版8/23)
- 8/22 酒井三良遺作展於静岡安心堂(-24)。(静岡8/21)
- 8/25 県やきもの展於県民会館(-9/6)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版8/23, 30, 静岡8/24, 26, 9/6, 毎日東, 中部版8/25)
- 8/25 暁山会日本画展於静岡松坂屋(-30)。(読売静岡版8/25, 朝日静岡, 遠州版8/27, 静岡8/28)
- 8/26 光風会静岡支部展於県民会館(-30)。(読売静岡版8/26, 静岡8/27, 28, 朝日静岡, 遠州版8/28)
- 8/26 佐野松岳展於県民会館(-30)。(毎日中部版8/25, 静岡8/27, 30)
- 8/31 ポール・マクニット陶芸展於清水戸田書店(-9/6)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版8/30)
- 8/ 『芸術生活』柴田隆二特集。(芸術生活9月号, 静岡8/27)
- 9/ 1 第55回二科展於東京都美術館(-20)。
北川民次《夏の宿題》(美術年鑑S.46)
五条繫夫《北国の海》(静岡8/31)
- 9/ 1 第55回院展於東京都美術館(-20)。
小栗正《高原にて》
入選者。(中日遠州版8/27)
- 9/ 1 第2回須磨離宮公園現代彫刻展於神戸須磨離宮公園(-10/18)。
掛井五郎《時満てるマリア》《ロトの妻》《ヨブ記》《使徒》《ロバと使徒》他。
- 9/ 1 第25回行動展於東京都美術館(-20)。
鈴木久雄《P38標のno.7》新人賞受賞。
- 9/ 1 萩原井泉版画展於静岡松坂屋(-11)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版8/30, 静岡9/4)
- 9/ 1 島津士嘉展於静岡扇子屋(-10)。(静岡版9/3)
- 9/ 1 高野良之助展於静岡幸文堂(-6)。(市民美術no.7)
- 9/ 玉井徳太郎《相田きく像》(静岡9/3)
- 9/ 4 杉山邦彦裸婦画展於新静岡センター(-10)。(静岡8/28, 9/4, 7, 読売静岡版9/3, 4, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版9/6)
- 9/ 6 内田公雄《日曜の絵》(沼津朝日9/6, 13, 20, 27)
- 9/ 8 井上恒也日本画展於東京三越(-13)。
- 9/ 平井俊男小品展於静岡扇子屋(-20)。(静岡9/14, 読売静岡版9/17)
- 9/11 第38回日本版画協会静岡展於県立中央図書館(-25)。
松本旻《GUN》他。(読売静岡版9/10, 静岡9/17*)
- 9/ 郷土画家名士遺墨名品展於静岡松坂屋(-20)。(静岡9/18)
- 9/ 朝原吉郎近況。(静岡9/14)
- 9/15 森正一展於静岡幸文堂(-20)。(市民美術no.7)
- 9/18 一枚の絵展於静岡田中屋(-24)。
西村計雄《ガイヤ城》田崎広助《朱富士》(静岡9/10, 11, 17, 18, 毎日中部版9/15)
上橋薫《親仔》静岡市立図書館に寄贈される。(静岡9/18)
- 9/19 荒井映延油絵展於静岡松坂屋(-25)。(静岡9/18, 19, 毎日中部版9/22, 朝日静岡, 遠州版9/23)
- 9/21 海野光弘版画展於静岡扇子屋(-30)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版9/20, 静岡9/24)
- 9/21 平井俊男個展於清水戸田書店(-27)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版9/20, 静岡9/21, 清美協no.76)
- 9/21 滝沢清作品寄贈。(静岡9/22)
- 9/22 第34回新制作展於東京都美術館(-10/10)。
秋野不矩《海辺の墓》出品。
入選者。(静岡9/20, 毎日東部版9/20, 毎日東部版9/20)
- 9/22 第16回一陽会展於東京都美術館(-10/10)。
入選者, 受賞者発表。(静岡9/20, 23)
- 9/ 村上道太郎染色展於浜松グランドホテル(-24)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版9/23)
- 9/26 川本晴雲茶陶展於静岡松坂屋(-10/2)。(毎日中部版9/22, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版9/27)
- 9/28 見城春男個展於浜松元城アートギャラリー(-10/4)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版9/27, 毎日西部版9/29, 静岡10/1)
- 9/ 曾宮一念『火の山』刊行。
- 10/ 1 県水彩画協会第20回展於県民会館(-4), 於島田市民会館(-11)。(毎日中部版9/29, 静岡10/1, 2, 10, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/4)
- 10/ 1 大木克哉写真展於静岡谷島屋書店(-7)。(朝日静岡遠州版10/1, 静岡10/2, 5, 毎日中部版10/2, 毎日東, 中部版10/6)
- 10/ 1 牧野敏郎油絵個展於静岡扇子屋(-10)。(読売静岡版9/30, 静岡10/8)

- 10/ 2 上田臥牛個展於東京日動サロン(-9)。(読売10/3)
- 10/ 3 陶芸燦匠会展於静岡松坂屋(-9)。(静岡10/2, 3, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/4)
- 10/ 5 藤田清司・本多克枝展於清水戸田書店(-11)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/4, 静岡10/5, 読売静岡版10/6)
- 10/ 5 創土社第1回展於浜松元城アートギャラリー(-11)。10/4 創立。(読売静岡版10/11)
- 10/ 6 県版画協会第35回展於県民会館(-13)。(毎日中部版9/15, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版9/20, 10/7, 静岡10/5, 8, 11)
- 10/ 6 近代日本の版画展-東京国立近代美術館所蔵-於県民会館(-13)。北川民次《猫と女》他。(静岡10/2, 5, 9, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/4, 毎日中部版10/6, 読売静岡版10/6)
- 10/ 8 藪崎昭作品展於静岡谷島屋書店(-14)。(静岡10/2, 5, 9, 12, 毎日中部版10/6, 読売静岡版10/10, 13, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/11)
- 10/10 泉会洋画展於静岡松坂屋(-16)。(静岡10/9, 10)
- 10/11 渡辺雷三木版画展於静岡扇子屋(-20)。(読売静岡版10/9, 14, 静岡10/15)
- 10/11 巻本辰夫油絵展於静岡扇子屋(-20)。(読売静岡版10/9, 市民美術no.8)
- 10/12 第24回二紀展於東京都美術館(-30)。
佐野繁次郎《赤い十字架A》《同B》水野欣三郎《出山釈迦》
- 10/12 第38回独立展於東京都美術館(-30)。
山道栄助《奥多摩の秋》《湖畔の秋》沢村美佐子《カラーによる空間映像》
- 10/15 高崎晴嵐日本画展於浜松市立図書館(-18)。(毎日西部版10/13, 静岡10/16)
- 10/ 曾宮一念淡彩展於浜松ナカムラ画廊(-17)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/11, 毎日西部版10/13, 静岡10/16)
- 10/15 日下泰輔油絵展於静岡谷島屋書店(-21)。(毎日中部版10/13, 読売静岡版10/14, 静岡10/15, 19, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/18)
- 10/ 板谷房近況。(静岡10/18)
- 10/19 間展於清水戸田書店(-25)。(静岡10/19, 21, 22, 読売静岡版10/21)
- 10/20 広野殷生個展於浜松松菱(-30)。(静岡10/7, 16, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/18)
- 10/21 近藤至弘個展於静岡扇子屋(-31)。(読売静岡版10/20, 29, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/22, 静岡10/26)
- 10/23 吉本石子竜詩画展於静岡幸文堂(-25)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/18, 読売静岡版10/23)
- 10/24 市川正三個展於静岡松坂屋(-30)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/25, 静岡10/26, 市民美術no.8)
- 10/27 肥后真二まんが笑品展於静岡幸文堂(-11/1)。(朝日静岡, 遠州版10/27)
- 10/27 県善三郎《加茂莊》掛川市役所。(毎日西部版10/27)
- 10/ 豊島泰彦展於清水戸田書店(-11/1)。(静岡10/27, 朝日静岡, 遠州版10/28, 読売静岡版10/18)
- 10/29 京都芸大同窓会きょう展第1回展於静岡谷島屋書店(-11/4)。秋野不矩《猫》市川正三安井賞佳作作品他。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/28, 静岡11/2*)
- 10/30 猪飼重明、全得寺襖絵制作。(中日遠州版10/31, 静岡10/31)
- 11/ 1 改組日展第2回展於東京都美術館(-12/6)。
野島青茲《翠》藤本東一良《クルーザーならぶ》澤田政廣《長嶋選手》杉本宗一《母子像》**館野弘青《青年》堤達男《明日》平野敬吉《女》*松田裕康《たそがれ》和田金剛《幻花》*(美術年鑑S.46*, 静岡10/5, 11/12**)
和田金剛《幻花》文部大臣賞受賞。(沼津朝日11/10, 静岡11/5, S57.4/29)
重岡建治《春思》入選。(静岡10/31, 毎日東部版11/1)
- 11/ 1 杉山照治・杉山瑛子二人展於静岡扇子屋(-10)。(静岡11/5)
- 11/ 井出芳志《蹴魂の像》(静岡11/3)
- 11/ 煌晨会日本画展於静岡松坂屋(-6)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/6)
- 11/ 4 三島市制30年記念選抜展於三島勤労青少年ホール(-7)。(三島ニュース11/1, 8, 三島民報11/10)
- 11/ 4 佐藤忠良《鹿と少年の碑》除幕式於静岡西武前。(静岡11/4, 読売静岡版11/4, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/11, 12/22)
- 11/ 6 高木俱個展於静岡西武(-18)。(読売静岡版11/5, 11, 沼津朝日11/8, 静岡11/16)
- 11/ 吉野啓子油絵個展於静岡谷島屋書店(-11)。(読売静岡版11/6, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/8, 静岡11/9)

- 11/ 7 淡川庵禅画展於於静岡松坂屋(-13)。(静岡11/6)
- 11/ 9 丹羽勝次 Tricks and … 展於浜松元城アートギャラリー(-17)。(静岡11/12)
- 11/10 森正一展於静岡幸文堂(-15)。(市民美術no.8)
- 11/11 県芸術祭第10回於県民会館・産業会館(-15)、巡回展於天竜市旧市役所(21-23)。審査員:澤田政廣、藤本東一良、斎藤義重、松本晃、宮之原謙、田中実、青山杉雨、加藤栄三。(静岡11/6, 11, 12, 27, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版8/2, 11/11, 22, 毎日東, 中, 西部版11/10, 11, 読売静岡版11/11, 12, 中日遠州版11/11)
- 11/11 県展「死亡届事件」(毎日東, 中, 西部版11/12, 13, 16, 17, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/20, 市民美術no.9, 13)
- 11/11 栗山茂個展於静岡扇子屋(-20)。(読売静岡版11/11, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/15, 静岡11/16)
- 11/14 井出芳志《木宮泰彦胸像》除幕式於静岡常葉女子短期大学。(静岡11/14)
- 11/16 杉山邦彦「死亡届事件」抗議・書類シリーズ展於清水戸田書店(-21)。(毎日東, 中, 西部版11/16, 17)
- 11/16 鈴木慶則・杉山邦彦二人展於清水戸田書店(-22)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/15, 静岡11/16)
- 11/16 杉山青樹路個展於新静岡センター(-22)。(静岡11/13, 19, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/15, 読売静岡版11/17)
- 11/17 李禹煥による前田守一展示於東京ウォーカー画廊(-21)。(芸術生活S46.2, 静岡11/19)
- 11/ 宮沢八紘展於沼津富士急(-25)。(毎日東部版11/24)
- 11/ マッド・アマノ展於静岡西武(-25)。(毎日東, 中, 西部版11/15, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/15)
- 11/21 行動美術第25回展於浜松市民会館(-26)。(中日遠州版11/11, 毎日西部版11/17, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/20, 静岡11/21, 読売静岡版11/22)
- 11/ 望月康男展於静岡扇子屋(-29)。(読売静岡版11/24, 26)
- 11/ 吉野不二太郎展於静岡幸文堂(-29)。(読売静岡版11/25, 朝日静岡, 遠州版11/26)
- 11/23 池田正司「わが青春」(静岡11/23, 28, 29, 30)
- 11/23 川島真・柴田俊二人展於清水戸田書店(-29)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/22, 毎日中部版11/24, 清美協no.78)
- 11/23 青木利津子日本画展於新静岡センター(-30)。(朝日静岡, 遠州版11/22, 読売静岡版11/25, 静岡11/26, 27)
- 11/24 中村岳陵展於東京日本橋三越(-29)。(朝日11/28, 東京11/28)
- 11/24 大村政夫《若い力》除幕式於静岡森下公園。(静岡11/23, 朝日静岡, 遠州版11/26)
- 11/24 三崎泰中《斉藤慶三胸像》除幕式於新居町慶老会館。(静岡11/25)
- 11/25 「堤達男 人物登場」(静岡11/25)
- 11/ 落合英男展於静岡吉見書店(-29)。(読売静岡版11/27)
- 11/28 皎崇会日本画展於於静岡松坂屋(-12/3)。(静岡11/27)
- 11/30 県善三郎、湖東荘へ作品寄贈。(毎日西部版12/1)
- 12/ 1 見城春男展於静岡扇子屋(-10)。(読売静岡版12/1, 3, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版12/6)
- 12/ 第1回扇子屋画廊奨励賞。秋山浩薫, 海野光弘, 小林洋子, 岡崎平一, 杉山瑛子, 受賞。(静岡12/3)
- 12/ 3 寺平誠介個展於静岡谷島屋書店(-9)。(静岡12/3, 4, 5, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版12/4, 市民美術no.8)
- 12/ 鈴木慶則展於京都書院画廊(-8)。(京都12/4)
- 12/ 4 風土展第5回展於沼津市文化会館(-6)。(沼津朝日12/4, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版12/6)
- 12/ 4 県善三郎小品展於浜松神津医院(-8)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/29, 毎日西部版12/1, 読売静岡版12/6)
- 12/ 6 勝又理作近況。(沼津朝日12/20, 27)
- 12/ 玄彩会展於静岡松坂屋(-11)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版12/6)
- 12/ 8 遠州美術第14回展於浜松市民会館(-13)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版12/6, 静岡12/10, 11)
- 12/ 岡田紅陽『富士』刊行。(静岡12/11)
- 12/11 三淵真紀子染色展於静岡扇子屋(-20)。(読売静岡版12/10)
- 12/20 佐藤忠良《鹿と少年の碑》損壊事件。(朝日静岡版12/22)
- 12/ 斉藤磐・村田収・樽松貞雄三人展於静岡扇子屋(-31)。(読売静岡版12/22, 静岡12/28)
- 12/ 出口マテ展於清水戸田書店(-27)。(読売静岡版12/22)
- 12/22 佐々木松次郎展於浜松元城アートギャラリー(-1/1)。

(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版12/20, 毎日西部版12/22)

1971 昭和46年

- 1/ 1 山口源《元朝》(沼津朝日1/1)
- 1/ 木下伝三《イノシシ像》(読売静岡版1/5)
- 1/ 5 吉田翠風「虎」画展於清水花菱(-7)。(清美協no.80)
- 1/ 新星会洋画展於静岡松坂屋(-14)。(朝日静岡, 遠州版1/12)
- 1/10 県善三郎「流水」(毎日西部版1/9, 10, 17, 24, 31, 2/14, 28, 3/7, 14, 21, 28)
- 1/11 赤岩覚版画小品展於清水戸田書店(-17)。(朝日静岡, 遠州版1/12, 清美協no.80)
- 1/14 望月礼三個展於静岡谷島屋書店(-20)。(朝日静岡版1/14, 静岡1/15, 18, 読売静岡版1/20)
- 1/15 山下清展於御殿場新橋農協(-17)。(静岡1/15, 19)
- 1/15 吉野不二太郎油絵展於清水花菱(-20)。(静岡1/17, 清美協no.80)
- 1/16 鈴木雨竹書作展於沼津富士急(-18)。(沼津朝日S45.12/20, S46.1/17)
- 1/18 内田六郎、浜松市美術館に作品寄贈。(静岡1/19)
- 1/18 スマルモ個展於浜松元城アートギャラリー(-2/8)。(朝日静岡, 遠州版1/19, 毎日西部版1/19, 静岡1/25, 29)
- 1/19 「死亡届」事件を支援する映画と討論の集会「表現の自由'71」於県民会館。
- 1/20 増田邦太郎逝去。75歳。(市民美術no.9)
- 1/24 「松本長十郎 かお」(中日遠州版1/24)
- 1/27 野島青茲逝去。享年55。(美術年鑑S47, 静岡1/29)
- 1/30 中村哲個展於静岡松坂屋(-2/5)。(静岡1/29, 31)
- 1/ 『松岡圭三郎画集』刊行。(静岡1/29)
- 1/ 馬堀喜孝、戸田村立郷土資料館壁画制作。(静岡1/29)
- 1/ アート11小品展於静岡小谷画荘(-2/4)。(伊藤勉, 鈴木慶則, 柴田隆二, 杉山邦彦, 出口マチ, 小谷和夫, 丹羽勝次, 小池一誠, 長岡宏他。(静岡2/1)
- 1/ 杉山有・汐丘得三二人展於静岡谷島屋書店(-2/3)於清水戸田書店(2/1-7)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版1/31, 静岡2/1, 毎日東, 中, 西部版2/2, 清美協no.80)
- 1/ 杉本宗一《母子像》除幕式於焼津市民文化センター。(静岡S45.11/12)
- / 山崎大抱《降魔》ニューヨーク市へ寄贈。(朝日伊豆

岳南, 静岡版2/2)

- 2/ 2 安田竹醉展於静岡松坂屋(-7)。(読売静岡版2/1, 静岡2/2)
- 2/ 2 川端政雄・藤野嘉市二人展於静岡幸文堂(-7)。(静岡1/29, 2/5, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版2/5)
- 2/ 4 一枚の絵展於静岡田中屋(-7)。(中川紀元《静浦の富士》田崎広助《箱根の赤富士》伊藤悌三《裸婦》他。(静岡1/21, 28, 29, 2/4, 5, 読売静岡版2/10)鈴木重雄《志摩の燈台》静岡市立中央図書館に寄贈。(静岡2/4)
- 2/ 6 七丈南豊展於静岡松坂屋(-12)。(朝日静岡, 遠州版2/5)
- 2/ 9 増田大罌展於静岡幸文堂(14, 16-21)。(静岡2/10, 市民美術no.9)
- 2/ 9 大庭祐輔油絵展於浜松元城アートギャラリー(-17)。(静岡2/5, 12, 15, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版2/7, 毎日西部版2/9)
- 2/10 ギャラリーほさかオープン。(静岡3/6)
- 2/ 県西部作家第1回展於浜松足立メガネ店(-28)。(静岡2/12, 26, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版2/14, 読売静岡版2/14, 毎日西部版2/16)
- 2/13 澤田政廣・柏木俊一展於沼津富士急(-18)。(静岡2/13, 15, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版2/14, 三島民報2/15, 毎日東部版2/16)
- 2/15 現代日本絵画秀作展於県民会館(-21)。(北川民次《画家の家族》他。(読売静岡版2/4, 19, 毎日中部版2/9, 静岡2/12, 15, 18, 19, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版2/14)
- 2/ 松山伊矩個展於静岡扇子屋(-28)。(静岡2/25, 26)
- 2/ 児玉幸雄展於静岡松坂屋(-26)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版2/21)
- 2/ 如月会展於浜松ナカムラ画廊(-28)。(曾宮一念他。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版2/21, 毎日西部版2/23)
- 2/ 中野清光木彫展於沼津富士急天心画廊(-3/3)。(沼津朝日2/28)
- 3/ 2 鈴木満個展於東京日本橋高島屋(-7)。(朝日3/6)
- 3/ 2 二紀会浜松展於浜松市民会館(-7)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版2/28, 毎日西部版3/2, 中日遠州版3/3)
- 3/ 4 第31回美術文化協会展於東京都美術館(-16)。(入選者。(静岡3/6, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版3/7)
- 3/ 5 第14回安井賞展於東京池袋西武(-15)。(斎藤真一《みさを瞽女の悲しみ》佳作賞受賞。市川

- 正三《モロッコ-土-》(静岡3/8)
- 3/ 5 堤達男《日輪の像》除幕式於沼津第一小学校。(沼津朝日3/7)
- 3/ 5 高野精一展於春野町産業会館(-8)。(毎日西部版3/6)
- 3/ 杉山英雄色紙展於沼津ギャラリーほさか(-)。(沼津朝日3/6)
- 3/ 6 井原祥隆写真展於伊東フロリダ隣(-8)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版3/7)
- 3/ 9 曾根春雄展於静岡幸文堂(-14)。(市民美術no.9)
- 3/11 重岡健治渡欧記念彫刻展於伊東観光会館(-15)。(朝日伊豆岳南版2/23, 読売静岡版3/11, 12)
- 3/11 郷土風景水彩画展於県民会館(-22)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版3/7, 静岡3/12, 19)
- 3/11 福村隆壹個展於静岡扇子屋(-20)。(静岡3/15, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版3/14, 市民美術no.9)
- 3/12 青木一郎個展於清水花菱(-17)。
- 3/12 ギャラリー花菱移転オープン展(-18)。(中日遠州版3/12, 13, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版3/14, 毎日西部版3/16)
- 3/15 竹久夢二展於浜松元城アートギャラリー(-27)。(静岡3/12, 毎日西部版3/16, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版3/21)
- 3/15 大草秀峰近作展於県民会館(-18)。(静岡3/12, 毎日中部版3/16)
- 3/ 阿部慎茂展於静岡松坂屋(-19)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版3/14)
- 3/ 水野欣三郎《希望の像》除幕式於春野町立熊切小。(毎日西部版3/19)
- 3/18 新槐樹社静岡支部展於静岡安心堂(-21)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版3/14, 毎日中部版3/16, 読売静岡版3/18)
- 3/19 第1回県芸術文化活動奨励金。(静岡3/18)
- 3/20 言葉とイメージ展於東京ピナール画廊(-4/3)。前田守一、鈴木慶則、杉山邦彦出品。(美術手帖no. 、静岡3/29)
- 3/20 内田公雄洋画作品展於富士急天心画廊(-25)。(沼津朝日3/13, 毎日東部版3/23)
- 3/20 画材専門店ホワイト開店於清水。(清美協no.83)
- 3/21 川島貢渡米(-4/24)。(静岡5/18)
- 3/21 「中条峰雄 わたしは後継者」(静岡3/21)
- 3/21 高柳千賀子展於静岡扇子屋(-30)。(市民美術no.9)
- 3/22 三橋良朗《蒼穹》完成於下田旧須原小。(毎日東部版3/18)
- 3/23 伴野寅重油絵個展於熱海市文化会館(-26)。(静岡3/24)
- 3/ 葵会絵画展於静岡松坂屋(-31)。(朝日静岡, 遠州版3/23)
- 3/24 静岡新聞社別館完成。(静岡3/24, 5/9, 20)
- 3/26 山種美術館所蔵近代日本画名作展於静岡西武(-4/7)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版3/21, 読売静岡版3/23, 静岡3/25, 26, 27, 4/1, 2)
- 3/26 「死亡届事件」提訴。(中日3/27, 毎日東, 中, 西部3/27)
- 3/27 本山白雲《田中光顯翁坐像》除幕式於蒲原文化センター。(静岡3/28)
- 3/ 加藤昭吉《月光菩薩像》(読売静岡版3/28)
- 3/28 富士見彫刻ライン、オープン。(静岡S45.6/6, 8/5, S46.3/26, 4/1, 7/13, 朝日伊豆岳南, 静岡版S45.12/10, S46.3/29, 4/1, 読売静岡版4/1, 17)
- 3/28 頓宮隆輔水彩画展於浜松ギャラリー花菱(-4/6)。(朝日遠州版3/28, 毎日西部版3/30)
- 3/30 赤堀尚個展於東京日本橋三越(-4/3)。(沼津朝日3/30)
- 3/30 第1回現代美術を語る会於清水市中央公民館。(清美協no.84)
- 3/30 森正一展於静岡幸文堂(-4/4)。(市民美術no.9)
- 3/ 青木鐵夫・浦田周社・松永哲於三人展於静岡銀の塔(-4/24)。(毎日中部版3/30)
- 3/ 斎藤真一、県立伊東高校を退職。
- 3/ 坐漁荘、明治村へ移転。(静岡S43.9/20, 10/25, S44.4/1, S46.2/13, 読売静岡B版S43.11/10)
- / 青木達弥、県工業試験場を退職。
- 4/ 1 平井俊男個展於静岡扇子屋(-10)。(毎日中部版4/6, 静岡4/8, 清美協no.83)
- 4/ 富本憲吉遺作展於静岡松坂屋(-8)。(静岡4/2)
- 4/ 2 第39回日本版画協会展於東京都美術館(-19)。
山口源《層相》
- 4/ 2 第30回創元会展於東京都美術館(-19)。
入賞者発表。(静岡4/16)
- 4/ 3 第57回光風会展於東京都美術館(-19)。
入選者発表。(静岡3/28)
- 4/ 3 戦後美術のクロニクル展於神奈川県立近代美術館(-5/16)。北川民次《メキシコ静物》高島達四郎《暮色》

- 4/ 6 飯田昭二展於静岡幸文堂(-10)。(市民美術no.9)
- 4/ 6 吉野不二太郎展於豊橋紅の木画廊(-11)。(静岡4/3)
- 4/ 7 高柳千賀子個展於清静岡センター(-14)・扇子画廊(11-20)。(毎日中部版4/13, 静岡4/15, 16, 22)
- 4/ 8 鈴木貞夫個展於浜松元城アートギャラリー(-14)。(毎日西部版4/6, 朝日静岡, 遠州版4/7, 静岡4/9)
- 4/ 阿部慎蔵個展於浜松画廊(-12)。(静岡4/9, 朝日遠州版4/11)
- 4/11 木村正明展於静岡扇子屋(-19)。(市民美術no.9)
- 4/12 第1回日彫会展於東京都美術館(-5/3)。
浅井行雄《裸婦立像》澤田政廣《釈迦》下山昇《憩い》
杉本宗一《老人M》堤達男《帆》飛岡文一《習作》平馬
学《南風》山本利治《大地》和田金剛《牛》(出品目録)
山本利治《大地》努力賞受賞。(静岡4/16)
- 4/13 宮田三朗木版画展於浜松松菱(-18)。(毎日西部版4/13)
- 4/15 鈴木重種個展於浜松元城アートギャラリー(-23)。(静岡4/9, 16, 19, 毎日西部版4/13)
- 4/17 太田正弘・杉山博・黒沢吉蔵新制作三人展於沼津富士急天心画廊(-22)。(沼津毎日4/14)
- 4/ 後藤忠男滞欧展於浜松ギャラリー花菱(-26)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版4/18, 静岡4/23)
- 4/20 斎藤大水彩画展於伊東観光会館(-25)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版4/18)
- 4/20 立木義浩新作写真展於浜松松菱(-25)。(読売静岡版4/17, 毎日西部版4/20, 静岡4/23)
- 4/20 香月泰男原画展於浜松ナカムラ画廊(-27)。(毎日西部版4/13, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版4/25)
- 4/ 立体造形グループ春季小品展於静岡幸文堂(-25)。(静岡4/22, 23, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版4/25)
- 4/ 松風栄一個展於静岡安心堂(-27)。(静岡4/23)
- 4/22 第48回春陽会展於東京都美術館(-5/8)。
井上重生《夏の山》《滞船》小栗哲郎《早春みかん山》広野殷生《春の雪》《香雪》
- 4/22 第45回国画会展於東京都美術館(-5/4)。
伊藤勉《圧》栗山茂《作品1971no.5 公害対談》山口源《「領分」A-春信》
- 4/22 第57回光風会巡回展於県民会館(-29)。(静岡4/16, 19, 22, 23, 読売静岡版4/29)
- 4/24 小山勇個展於浜松元城アートギャラリー(-29)。(静岡4/23)
- 4/ 平櫛田中作品展於静岡松坂屋(-30)。(静岡4/28)
- 4/ 丸山力生水彩小品展於静岡幸文堂(-5/2)。(静岡4/28)
- 4/28 現代美術を語る会第2回於清水市中央公民館。
講師:李禹煥。
- 4/30 重岡建治《徳富蘇峰胸像》静岡新聞社へ寄贈される。(静岡5/1)
- 4/30 山下太郎親子と山下邦雄日本画展於浜松元城アートギャラリー(-5/6)。(静岡4/28)
- 5/ 1 広本季与丸新作展於浜松ギャラリー花菱(-10)。(静岡4/28, 5/7, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版5/8)
- 5/ 岡崎平一個展於静岡扇子屋(-10)。(静岡5/6, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版5/9)
- 5/ 2 「鈴木健司 私は後継者」(静岡5/2)
- 5/ 2 「画廊の新設続々」(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版5/2)
- 5/ 3 永井正御, 太田京子, 県文化奨励賞受賞。(静岡5/1, 中日遠州版5/1, 4, 毎日東, 中, 西部版5/1, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版5/1, 7, 読売静岡版5/1)
- 5/ 荻会第12回展於於静岡松坂屋(-7)。(静岡5/4, 7)
- 5/ 5 柏木俊一逝去。77歳。(静岡5/7, 毎日東, 中, 西部版5/7, 読売静岡版5/7, 三島民報5/10)
- 5/ 8 土龍会作陶展於於静岡松坂屋(-14)。(静岡5/7, 10, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版5/9)
- 5/ 8 村上道太郎展於浜松グランドホテル(-9)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版5/9)
- 5/ 9 青萌会第3回展於清水戸田書店(-15)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版5/9)
- 5/10 第10回現代日本美術展於東京都美術展(-31)。
中村宏《造山運動あるいはモナリザの背景》宮脇愛子《作品1971 MEGU-030》小池一誠《けはい》鈴木慶則《Twin endless ring》前田守一《栽培》市川正三《無言譜》鈴木健司《BASE》(美術年鑑S47*)
- 5/10 内田公雄個展於東京樺画廊(-15)。(沼津朝日5/12, 沼津毎日5/8)
- 5/11 重岡建治渡欧。(静岡5/1)
- 5/11 長谷川栄一水彩画展於静岡扇子屋(-20)。(静岡5/10, 11, 17, 読売静岡版5/18)
- 5/12 吉野不二太郎個展於静岡産業会館(-16)。(静岡5/7, 10, 13, 14, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版5/9)
- 5/14 《愛のライオン像》建立於静岡産業会館前。(毎日東, 中, 西部版5/15, 静岡9/9, 読売静岡版11/9*)

- 5/ 田米孝雄・加藤智計・中條峰雄工芸三人展於静岡谷島屋書店 (-19)。(静岡5/17)
- 5/ 現代建築展於浜松松菱 (-20)。(静岡5/14)
- 5/16 青木一郎展於清水戸田書店 (-22)。(静岡5/16, 朝日駿豆, 静岡, 遠州版5/16, 毎日中部版5/18)
- 5/17 大谷久子滞欧小品展於浜松浜松画廊 (-24)。(中日遠州版5/16, 朝日駿豆, 静岡, 遠州版5/16, 毎日西部版5/18)
- 5/ 桐生照子・今井幸子展於浜松ギャラリー花菱 (-23)。(毎日西部版5/18, 朝日駿豆, 静岡, 遠州版5/16)
- 5/20 駿府博物館開館。(静岡1/1, 5/20, 4/24)
- 5/21 堤達男《潮騒の像[女神像]》建立於御前崎。(静岡5/19, 7/13, 中日遠州版5/20, 読売静岡版5/21)
- 5/ 片岡則雄・菅沼稔展於沼津ギャラリーほさか (-26)。(沼津朝日5/25)
- 5/ 田宮達三・田宮真理子展於静岡谷島屋 (-26)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版5/23)
- 5/21 大石和夫・会森利夫二人展於静岡扇子屋 (-31)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版5/23, 静岡5/24, 28)
- 5/ 望月清作近況。(静岡5/23)
- 5/23 三島輝穂日本画展於清水戸田書店 (-29)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版5/23, 読売静岡版5/25)
- 5/24 澤田政廣《義人釜鳴平七像》除幕式於熱海和田浜。(伊豆毎日S41.12/27, S42.1/26, S48.8/29, 11/5, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版4/25, 静岡5/11, 25, 26, 読売静岡版5/12, 中日遠州版5/13, 毎日静岡版5/24, S48.8/29)
- 5/ 静流会第26回展於沼津市文化会館 (-30)。(沼津朝日5/30, 朝日伊豆岳南版5/30)
- 5/27 壮炎展第26回於浜松市民会館・元城アートギャラリー (-30)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版5/23, 静岡5/28)
- 5/28 「県展死亡届事件」裁判第1回口頭弁論。(読売静岡版5/29, 中日S47.1/31)
- 5/28 平尾花笠喜寿記念作品展於静岡産業会館 (-31)。(静岡5/28, 29, 31)
- 5/ 鈴木篤個展於静岡谷島屋書店 (-6/2)。(静岡5/31)
- 5/29 《人魚姫》除幕式於清水東海大学海洋科学館。(読売静岡版5/30)
- 5/29 泉会第12回展於静岡松坂屋 (-6/4)。(読売静岡版5/28, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版5/30)
- 5/30 現代美術を語る会第3回於清水市中央公民館。講師:李禹煥。(朝日静岡版5/28, 静岡6/10)
- 5/ 田米孝雄近況。(静岡5/30)
- 5/31 池田正司個展於清水戸田書店 (-6/5)。(静岡5/30, 朝日静岡, 遠州版5/30, 毎日中部版6/1, 静岡6/3, 清美協no.85)
- 5/ 斎藤真一『越後替女日記』画集刊行。(朝日伊豆岳南版1/13)
- / 江崎敏夫、毎日陶芸展入選。(毎日5/29)
- 6/ 1 望月利八創作戯面展於新静岡センター (-10)。(静岡5/28, 29, 6/5, 7, 8)
- 6/ 1 安藤顕・小沢直子・長倉ミチコ展於静岡幸文堂 (-6)。(朝日静岡, 遠州版5/30, 毎日中部版6/1)
- 6/ 2 第6回国際青年美術家展於県民会館 (-6)。(読売静岡版6/1, 4)
- 6/ 3 風土展第6回展於沼津市公会堂 (-6)。(沼津朝日5/30, 朝日伊豆岳南版5/30, 毎日東部版6/1, 読売静岡版6/3)
- 6/ 4 渡辺雷三風景版画展於沼津東電サービスセンター (-7)。(沼津朝日5/30, 毎日東部版6/1, 朝日伊豆岳南版6/3)
- 6/ 5 ビカソ女たち展於浜松松菱 (-9)。(静岡6/5, 読売静岡版6/3, 8, 朝日静岡, 遠州版6/3)
- 6/ 6 柴田俊個展於清水戸田書店 (-12)。(朝日伊豆岳南, 静岡版6/6, 清美協no.85)
- 6/ 青島淑雄日本画展於静岡松坂屋 (-11)。(朝日伊豆岳南, 静岡版6/6, 静岡6/7)
- 6/ 8 「らくはん会 2周年」(毎日東, 中, 西部版6/8)
- 6/ 8 掛井五郎彫刻展於東京青山学院 (-26)。
- 6/ 8 世界のヌード展於静岡松坂屋 (-14)。(静岡5/29, 6/5, 7, 8, 朝日静岡, 遠州版6/9)
- 6/ 8 佐藤はな・中野富子二人展於静岡吉見書店 (-13)。(毎日中部版6/1, 朝日伊豆岳南, 静岡版6/6, 静岡6/10)
- 6/ 8 鈴木三朝展於浜松遠鉄 (-14)。(朝日遠州版6/6, 毎日西部版6/8)
- 6/ 一陽会会員展於浜松元城アートギャラリー (-13)。(朝日遠州版6/6, 静岡6/11)
- 6/11 望月清作個展於清水花菱 (-16)。(静岡6/5, 清美協no.85)
- 6/11 藤野嘉市個展於静岡扇子屋 (-20)。(毎日中部版6/8, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版6/13, 静岡6/14)
- 6/13 黒木邦彦展於浜松ギャラリー花菱 (-19)。(朝日伊豆

- 岳南, 静岡, 遠州版6/13, 毎日西部版6/15)
 6/13 石子順造「マンガの主人公を斬る」(静岡6/13, 20, 26, 7/4, 11, 18, 25, 8/8, 15, 22, 29, 9/26, 10/24)
 6/16 龍一之介個展於沼津ギャラリーはさか(-20)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版6/13, 沼津毎日6/15)
 6/17 第36回静岡県版画協会展於県民会館(-22)。(静岡5/20, 6/7, 18, 毎日中部版6/1, 19, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版6/22)
 6/17 池ヶ谷章吾ポップ絵画展於静岡谷島屋書店(-23)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版6/13, 読売静岡版6/16, 静岡6/18)
 6/17 鈴木重種展於静岡谷島屋書店(-23)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版6/20)
 6/19 帰山阡蒼日本画展於沼津富士急天心画廊(-24)。(静岡6/18)
 6/20 下岡蓮杖展於下田センター(-22)。(中日遠州版6/2)
 6/20 豊島春彦個展於清水戸田書店(-25)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版6/20, 毎日中部版6/22, 清美協no.85)
 6/21 寺島紫明名作展於静岡産業会館(-24)。(静岡6/20, 21, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版6/20)
 6/22 柴田俊水彩個展於静岡扇子屋(-30)。(朝日静岡, 遠州版6/22, 静岡6/28)
 6/22 三軌会静岡展於県民会館(-26)。(静岡6/17, 18, 23, 25, 毎日中部版6/22, 読売静岡版6/22, 25)
 6/ 堤達男《潮騒》設置於御前崎。(朝日静岡, 遠州版6/23)
 6/ 相生垣瓜人展於浜松ナカムラ画廊(-26)。(毎日西部版6/22)
 6/24 寺平誠介・田中・田端勝清三人展於静岡谷島屋書店(-30)。(朝日静岡, 遠州版6/22, 伊豆岳南, 遠州版6/27, 静岡6/28)
 6/25 現代美術ゼミナール第4回於戸田書店。講師:李禹煥。
 6/ 陶醉会展於静岡松坂屋(-7/2)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版6/27)
 6/28 松島達太郎個展於浜松元城アートギャラリー(-7/4)。(中日遠州版6/27, 朝日伊豆岳南, 遠州版6/27, 静岡6/25, 7/1, 2)
 6/29 板谷房逝去。享年48。(静岡7/2)
 6/29 芹沢定敬・小林治郎・横関武展於静岡幸文堂(-7/4)。(静岡6/25)
 6/30 現代美術を語る会第4回於清水市中央公民館。
 6/30 浜松市美術館落成式。(朝日遠州版S39.5/19, 12/4, S40.12/19, 23, S42.3/16, S44.8/26, S45.1/15, 7/3, S46.6/22, 7/7, 静岡S39.6/25, S42.3/16, S44.8/26, S45.6/20, 25, 7/1, 3, 6/26, 7/1, 10/14, S46.5/26, 7/7, 毎日西部版S39.12/12, S44.4/18, 11/15, 12/5, S45.1/11, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 2/6, 21, 3/15, 20, 4/4, S46.6/27, 中日遠州版S42.6/4, 22, 11/25, S44.9/19, 11/15, S45.12/1, S46.7/29, 12/19, S47.2/28)
 7/ 1 ガラス絵展於浜松市美術館(-14)。(静岡7/1, 9)
 7/ 1 内田六郎、浜松市名誉市民となる。(静岡6/26)
 7/ 1 杉山良雄さし絵展於静岡松坂屋(-3)。(毎日東, 中, 西部版6/22, 中, 西部版7/2)
 7/ 1 小林洋子個展於静岡扇子屋(-10)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版6/27, 読売静岡B版7/1, 静岡7/5)
 7/ 2 増島豊治油絵展於沼津ギャラリーはさか(-6)。(沼津朝日6/30)
 7/ 山田安排画展於静岡谷島屋(-7)。(読売静岡版7/2, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版7/4)
 7/ 3 県美術家連盟第8回展於県民会館(-7)。(静岡7/2, 3, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版7/4)
 7/ 青木幽溪美人画展於県民会館(-8)。(静岡7/2, 9)
 7/ 4 横山志乃婦皮染色展於清水戸田書店(-8)。(朝日静岡, 遠州版7/2)
 7/ 上原卓・平川敏夫展於静岡松坂屋(-9)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版7/4)
 7/ 矢沢五雄洋画展於静岡谷島屋書店(-14)。(静岡7/12, 読売静岡版7/13)
 7/ 中村弘・中村綾子展於静岡幸文堂(-14)。(静岡7/9)
 7/ 5 恩田秋夫木版画展於浜松松菱(-11)。(読売静岡版7/3)
 7/ 8 万文・河西万丈個展於県民会館(-14)。(静岡7/2, 9, 毎日中部版7/13)
 7/ 8 大石幸雄写真展於静岡谷島屋書店(-14)。(静岡7/2, 9, 朝日静岡, 遠州版7/4)
 7/ 山崎正雄展於沼津天心画廊(-15)。(朝日伊豆岳南, 静岡版7/11)
 7/10 晴風会日本画展於静岡松坂屋(-16)。(読売静岡版7/9, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版7/11)
 7/11 「八木秀之助 この道ひとすじ」(静岡7/11)
 7/12 青木洋子個展於東京スルガ台画廊(-17)。(沼津朝

- 日7/13)
- 7/13 二紀県支部展於浜松市民会館(-18)。(読売静岡版7/13, 中日遠州版7/14)
- 7/17 鳩巢会彫刻展於沼津天心画廊(-22)。(朝日伊豆岳南, 静岡版7/14)
- 7/17 郷土現代作家展於浜松市美術館(-28)。(毎日西部版7/20, 静岡7/22)
- 7/17 遠州の名宝美術展於浜松市美術館(-28)。(中日遠州版7/16, 毎日西部版7/20)
- 7/17 見崎泰中、彫刻の村開設於天竜市。(静岡8/12, 9/16, 18, 10/1, 中日遠州版8/27,)
- 7/ 朱玄会第2回展於松坂屋(-23)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版7/18)
- 7/18 杉山邦彦小品展於清水戸田書店(-24)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版7/18)
- 7/18 幻触グループ展於清水戸田書店(-24)。(毎日中部版7/20, 清美協no.86)
- 7/19 海野光弘木版画展於東京養清堂(-24)。
- 7/20 澤田政廣彫刻展於東京日本橋三越(-25)。(朝日7/24)
- 7/20 沼津文化協会設立総会於沼津市民文化会館。(沼津朝日7/22, 沼津毎日6/15, 7/18, 23)
- 7/ 前田守一版画展於静岡扇子屋(-31)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版7/25, 静岡7/26, 31)
- 7/22 国際写真サロン展於静岡田中屋(-25)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版7/11, 静岡7/21)
- 7/22 県写真展第16回展於静岡田中屋(-25)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版7/11, 静岡7/21)
- 7/23 遠藤君雄油絵個展於沼津ギャラリーほさか(-27)。(沼津朝日7/21)
- 7/23 森田茂展於静岡安心堂(-27)。(毎日中部版7/20, 朝日静岡版7/27)
- 7/ 高橋恵子個展於静岡西武(-28)。(静岡7/26)
- 7/24 水島裕日本画展於於静岡松坂屋(-30)。(静岡7/23, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版7/25)
- 7/25 現代美術ゼミナール第5回於清水市中央公民館。講師: 李禹煥。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版7/25)
- 7/ 寺平誠輔・田中憲之・田端勝清展於静岡谷島屋書店(-30)。(毎日中部版7/27)
- 7/ 遠州美術会小品展於浜松谷島屋書店(-8/1)。(静岡7/30)
- 7/30 千本埋立新港建設反対色紙即売会於沼津ギャラリーほさか。(沼津朝日7/20, 24, 29, 沼津毎日6/11, 7/14, 29)
- 7/31 猿黙庵子水墨画展於沼津富士急天心画廊(-8/5)。(沼津朝日7/29)
- / 天心画廊、横浜桜木町ゴールデンセンターに開設。(沼津朝日7/29)
- 7/31 小野具定日本画展於静岡松坂屋(-8/6)。(市民美術no.11)
- 7/31 石橋旭山陶芸展於浜松遠鉄(-8/3)。(毎日西部版7/27, 静岡7/23, 30)
- 8/1 立木義浩写真展於静岡西武(-8)。(静岡7/31, 朝日静岡版8/1)
- 8/ 1 遠山紀江パステル画展於静岡扇子屋(-10)。(静岡8/5, 市民美術no.11)
- 8/ 1 五島美術館名品展於浜松市美術館(-15)。(中日遠州版7/17, 20, 21, 22, 23, 24, 28, 29, 30, 31, 8/1, 2, 3, 4, 5, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 静岡7/30, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版8/8)
- 8/ 浦田儀一展於静岡銀の塔(-28)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版8/8)
- 8/ 2 三沢佐助展於東京造形ギャラリー(-7)。
- 8/ 県善三郎展於浜松松菱(-8)。(静岡8/6, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版8/8)
- 8/ 細川絃関《白衣の天使》磐田市立病院。(毎日西部版8/5)
- 8/ 山田光雄木刻展於浜松鈴屋(-17)。(静岡8/6, 13)
- 8/ 7 隆鼎会日本画展於於静岡松坂屋(-13)。(静岡8/6, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版8/8)
- 8/ 中野清光彫刻展於沼津天心画廊(-12)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版8/8, 沼津朝日8/15)
- 8/ 8 杉田良一展於清水戸田書店(-14)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版8/8, 清美協no.87)
- 8/10 川端政雄水彩個展於静岡幸文堂(-15)。(静岡8/6, 13, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版8/8)
- 8/11 倉松英人展於静岡扇子屋(-20)。(朝日静岡, 遠州版8/15, 読売静岡版8/17, 市民美術no.11)
- 8/12 赤松克己滞欧作品展於静岡安心堂(-15)。(朝日静岡, 遠州版8/11, 読売静岡版8/12)
- 8/15 創作画人展於沼津富士急天心画廊(-21)。(沼津毎日8/17)

- 8/16 郷土の焼き物新作展於県民会館 (-29)。(静岡8/13,17,27,毎日中部版8/17)
- 8/ 梅崎勉油絵小品展於静岡幸文堂 (-22)。(静岡8/20)
- 8/19 自由美術静岡第2回展於県民会館 (-23)。(静岡8/13,20,朝日伊豆岳南,静岡,遠州版8/15,読売静岡版8/17)
- 8/19 ポール・ジャックレー版画遺作展於新静岡センター (-25)。(中日遠州版8/17,朝日伊豆岳南,静岡,遠州版8/19,静岡8/20,21)
- 8/21 加田裕子版画展於静岡扇子屋 (-31)。(市民美術no.11)
- 8/22 青木茂広・塚田誠二人展於清水戸田書店 (-28)。(朝日伊豆岳南,静岡,遠州版8/19,毎日中部版8/24)
- 8/ 浦田儀一伝統木版画展於静岡カフェテラス銀の塔 (-28)。(静岡8/20)
- 8/23 馬堀喜孝、全日空事故犠牲者肖像画寄贈。(静岡8/24)
- 8/24 岡田雄光展於静岡安心堂 (-29)。(朝日静岡,遠州版8/24,読売静岡版8/25)
- 8/25 現代美術ゼミナール第6回於清水市中央公民館。講師:李禹煥。(朝日静岡版8/24)
- 8/ 浜松盛夏展於浜松元城アートギャラリー (-31)。(朝日静岡,遠州版8/22,静岡8/23,27)
- 8/29 川崎馬吉油絵展於清水戸田書店 (-9/4)。(毎日中部版8/31,清美協no.88)
- 8/ 静岡新聞別館に駿府画廊開設。(静岡8/30)
- 8/31 梅崎勉展於静岡幸文堂 (-9/5)。(市民美術no.11)
- 9/ 1 第56回二科展於東京都美術館 (-20)。
北川民次《真夏の花》《太陽の花》(美術年鑑S47*)
古屋明巳《鳥》入選。(静岡8/31)
初入選者他。(朝日静岡,遠州版8/30,9/10)
- 9/ 1 本多恭子展於静岡扇子屋 (-10)。(朝日静岡,遠州版8/24,静岡9/6,市民美術no.11)
- 9/ 3 杉本英一個展於沼津プラザパーク (-9)。(沼津朝日9/4,7,静岡9/6)
- 9/ 4 大石靖近作滞欧作品展於沼津富士急 (-9)。(沼津朝日9/3,毎日東部版9/7)
- 9/ 5 日本版画協会全国巡回展於県立中央図書館 (-14)。(毎日中部版8/31,静岡9/3,6,朝日伊豆岳南,静岡,遠州版9/5)
- 9/ 7 青木達弥作品展於静岡松坂屋 (-12)。(静岡9/3,9)
- 9/ 浜松爽秘会展於浜松元城アートギャラリー (-15)。(静岡9/9)
- 9/10 市川正三・加藤哲・鞍掛徳磨・小寺明子四人展於東京ケニヤ画廊 (-18)。
- 9/10 佐野和夫・佐野てる美二人展於清水戸田書店 (-16)。(清美協no.89)
- 9/11 現代美術ゼミナール第7回於戸田書店。講師:石子順造。(朝日静岡,遠州版9/10)
- 9/11 鷺坂博規・鷺坂せつ子二人展於静岡扇子屋 (-20)。(静岡9/16,読売静岡版9/15,市民美術no.11)
- 9/12 青野裕彦油絵小品展於清水戸田書店 (-18)。(毎日中部版9/14,静岡9/16,清美協no.88)
- 9/12 小無田泉個展於浜松ギャラリー花菱 (-19)。(静岡9/11,朝日伊豆岳南,静岡,遠州版9/12,毎日西部版9/12)
- 9/13 北川民次個展於東京飯田画廊 (-23)。(読売9/14,朝日9/18,毎日9/20)
- 9/13 風土第1回テーマ展於沼津ギャラリーはさか (-15)。(毎日東部版9/7,21,静岡9/9)
- 9/14 陶芸燦匠会展於静岡松坂屋 (-19)。(朝日伊豆岳南,静岡,遠州版9/12,静岡9/14)
- 9/15 市川秋孝、肖像画寄贈。(毎日東海版9/8,読売静岡版9/8)
- 9/15 遠州美術第15回展於浜松市美術館 (-19)。(毎日西部版9/7,14,静岡9/11,16,中日遠州版9/17)
- 9/16 県水彩画協会第21回展於県民会館 (-19),於島田市民会館 (25-29)。(静岡9/17,朝日伊豆岳南,静岡,遠州版9/22)
- 9/16 彫刻の村野外展於天竜市役所前 (-30)。(静岡9/16,18,10/1,毎日東海版8/19,中日遠州版9/17)
- 9/18 静岡市美術協会ゼミナール「記号とイメージ」於県民会館。講師:針生一郎。(市民美術no.12)
- 9/ 池ヶ谷梅太郎写真展於清水戸田書店 (-29)。(朝日伊豆岳南,静岡,遠州版9/19,毎日中部版9/21)
- 9/21 静岡アンデパンダン第3回展於県民会館 (-25)。(静岡9/17,21,24,朝日静岡,遠州版9/19,毎日中部版9/21,読売静岡版9/21,28,中日遠州版9/23)
- 9/21 海野光弘版画展於静岡扇子屋 (-30)。(静岡9/23,24,読売静岡版9/26,市民美術no.11)
- 9/21 志賀と志江個展於浜松市美術館 (-26)。(朝日静岡,遠州版9/19,毎日西部版9/21,静岡9/24)
- 9/21 足立行男展於浜松市美術館 (-26)。(朝日伊豆岳南,

- 静岡, 遠州版9/19, 毎日西部版9/21, 静岡9/22)
- 9/ 全和鳳展於浜松ナカムラ画廊(-26)。(毎日西部版9/21, 朝日遠州版9/23)
- 9/22 第35回新制作展於東京都美術館(-10/10)。
秋野不矩《R.K.K》出品。(美術年鑑S47*)
- 9/23 泰西名画と現代日本作家展於新静岡センター(-10/5)、於浜松松菱(10/6-12)。(静岡9/2, 11, 16, 21, 22, 30, 10/2, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版9/22, 23, 静岡遠州版9/22, 10/10, 毎日中部版9/21, 22, 23, 26, 28, 10/3, 中, 西部10/5, 読売静岡版9/23, 中日遠州版9/29, 30, 10/1, 2, 3, 5, 6, 7, 11)
- 9/24 青木一郎リトグラフ展於清水戸田書店(-30)。(清美協no.89)
- 9/ 増田邦太郎遺作展於静岡谷島屋(-29)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版9/26)
- 9/25 志賀旦山日本画展於沼津富士急(-27)。(沼津朝日9/15, 23, 24, 朝日伊豆岳南版9/19, 毎日東部版9/9/21, 静岡9/24)
- 9/26 丸山力雄樹陽展於清水戸田書店(-10/2)。(静岡9/27)
- 9/27 山田義雄アマゾン風物油絵展於東京工業クラブ(-10/1)。(静岡9/27, 沼津朝日9/28)
- 9/28 天皇の世紀展於静岡松坂屋(-10/3)。(静岡9/27, 10/1, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版9/19, 27, 29)
- 9/28 高橋典明個展於元城アートギャラリー(-10/3)。(毎日西部版9/28)
- 9/ 関根正道個展於沼津ギャラリーはさか(-10/3)。(毎日東部版9/28)
- 9/31 吉野不二太郎油彩展於清水戸田書店(-10/6)。(清美協no.89)
- 10/ 1 水原秋桜子・富安風生俳画展於静岡松坂屋(-8)。(読売静岡版9/30, 市民美術no.12)
- 10/ 2 野田好子展於東京フジキ画廊(-9)。(読売10/4, 朝日10/6)
- 10/ 2 伊豆美術会第1展於沼津富士急天心画廊(-7)。(毎日東部版9/28, 沼津朝日10/3, 朝日伊豆岳南版10/3)
- 10/ 2 増田大罌画業50年記念展於県民会館(-8)。(静岡10/1, 7)
- 10/ 3 棕鳥会発表式於伊東。(毎日東海版9/24, 11/16, 静岡10/4)
- 10/ 藤波修三肖像画展於清水戸田書店(-9)。(毎日東, 中, 西部版10/5)
- 10/ 6 三島郷土館開館。(三島民報S43.2/20, S46.10/5, 三島ニュースS43.2/25, 5/26, S46.1/17, 9/19, 静岡1/19, 読売静岡版9/28, 10/6)
- 10/ 6 写真派協会第29回展於県民会館(-10)。(静岡10/1, 8, 読売静岡版10/7, 8)
- 10/ 翠々会展於県民会館(-10)。(静岡10/1, 8)
- 10/ 9 萩萩月個展於沼津富士急天心画廊(-11)。(沼津朝日10/3, 毎日東部版10/10)
- 10/10 瑤倫会洋画展於静岡松坂屋(-15)。(市川正三他。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/3, 読売静岡版10/5, 8)
- 10/10 長谷川三千春回顧展於浜松元城アートギャラリー(-14)。(毎日中, 西部版10/12)
- 10/ 沢村美佐子展於東京紀伊国屋画廊(-15)。(朝日10/13)
- 10/10 柏原覚太郎近作展於浜松ギャラリー花菱(-17)。(毎日西部版10/5, 12, 静岡10/8, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/10)
- 10/10 「芸術の秋によせる」古屋明巳・杉村孝・中条峰雄、近況。(静岡10/10)
- 10/11 現代美術ゼミナール第8回於清水市教育会館。
講師: 石子順造。
- 10/11 武藤達郎展於静岡扇子屋(-20)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/17, 静岡11/18, 市民美術no.12)
- 10/12 第25回二紀会展於東京都美術館(-30)。
水野欣三郎《トーテムの歌》受賞。(静岡10/10)
- 10/12 第39回独立展於東京都美術館(-30)。
沢村美佐子《不安な朝の映像》土井俊泰《人形》山道栄助《溪谷》《不動沢の秋》初入選者。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/7)
- 10/12 渥美吉之助展於静岡幸文堂(-17)。(市民美術no.12)
- 10/ 清水督二・長房敏郎・服部清男三人展於静岡吉見書店(-17)。(静岡10/16)
- 10/14 第5回現代美術選抜展於県民会館(-21)。(静岡10/8, 15, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/14)
- 10/14 高崎晴風日本画個展於浜松市立図書館(-17)。(静岡10/8, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/10, 毎日中, 西部版10/12)
- 10/16 徳川将軍の書画展於久能山東照宮博物館(-11/20)。(読売静岡版10/8, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州

- 版10/10, 静岡10/19)
- 10/16 青木幽溪展於静岡松坂屋(-22)。(市民美術no.12)
- 10/16 佐藤真一展於浜松浜松画廊(-23)。(静岡10/15)
- 10/ 成瀬憲洋画作品展於沼津富士急天心画廊(-21)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/17, 沼津朝日10/17)
- 10/ 池ヶ谷梅太郎写真展於清水戸田書店(-25)。(毎日東, 中, 西部版10/19)
- 10/20 富嶽展於静岡安心堂(-24)。(毎日東, 中, 西部版10/19, 読売静岡版10/19)
- 10/20 マヤ美術拓本展於静岡新聞別館(-11/3)。(静岡10/21, 25)
- 10/21 望月康男スケッチ展於静岡扇子屋(-31)。(静岡10/25, 市民美術no.12)
- 10/23 岩中徳次郎具象小品展於沼津富士急天心画廊(-26)。(沼津朝日10/23, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/24, 毎日東部版10/20, 26)
- 10/25 猿蓑庵子展於東京朝日生命会館(-30)。(沼津朝日10/20)
- 10/26 近藤智展於静岡幸文堂(-31)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/24, 読売静岡版10/26)
- 10/27 杉本宗一《母子像》除幕式於焼津市民センター。(静岡S45.11/12, S46.10/28*)
- 10/30 江崎敏夫作陶展於静岡松坂屋(-11/5)。(静岡10/29, 毎日東, 西中版10/26, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/31)
- 10/31 吉野不二太郎油絵個展於清水戸田書店(-11/6)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/27, 静岡10/29)
- 11/ 1 第3回日展於東京都美術館(-12/6)。
野島青茲《夏姿》藤本東一良《噴煙》大村政夫《若い樹》澤田政廣《笛》堤達男《風よ》平野敬吉《回想》和田金剛《蒼河》(美術年鑑S.47*, 静岡11/11)
県内彫刻出品作家動向(毎日東海版10/9)
新入選者(静岡10/28)
- 11/ 1 高松次郎、県展審査員辞退。(毎日東, 中, 西部版11/2, 読売静岡版11/2, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/4)
- 11/ 1 堤達男《大地の像》除幕式於田方農高。(静岡11/2)
- 11/ 1 杉本宗一《教育と平和の像(焼津市制20周年記念像)》除幕於焼津駅前。(静岡10/22, 毎日東海版10/23*)
- 11/ 1 杉山照治・杉山瑛子展於静岡扇子屋(-10)。(朝日静岡版10/28, 静岡11/4)
- 11/ 求正美個展於浜松元城アートギャラリー(-7)。(静岡11/4)
- 11/ 2 吉野啓子展於静岡幸文堂(-7)。(朝日静岡版10/29, 読売静岡版11/2, 市民美術no.12)
- 11/ ピニオン展於静岡西武(-10)。(静岡11/8)
- 11/ 3 表現の自由を守る抗議集会於県民会館。(読売静岡版11/4)
- 11/ 4 ダボ展於沼津ギャラリーほさか(-9)。(毎日東部版11/2, 6)
- 11/ 4 細井繁誠個展於静岡谷島屋(-10)。(静岡11/5, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/7, 読売静岡版11/9, 市民美術no.12)
- 11/ 6 県芸術祭第11回展於県民会館(-11)・産業会館(-10), 於浜松市美術館(12/1-12)。造形作品部門、写真部門を加えて9部門となる。
審査員: 楢原建三, 浅井昭, 村井正誠, 和田金剛, 金丸重嶺, 中島清之, 春日部たすく, 木村知石, 蓮田修吾郎。(朝日静岡版9/19, 毎日東, 中, 西部版11/2, 静岡11/5, 6, 26, 12/2, 3, 読売静岡版11/2, 6, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/4, 6, 26, 中日遠州版11/6)
- 11/ 6 霜辰会展於静岡松坂屋(-12)。(読売静岡版11/5, 9, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/7)
- 11/ 7 「県下の文化活動を考える」(中日遠州版11/7)
- 11/ 9 村松茂男展於静岡幸文堂(-14)。(市民美術no.12)
- 11/ 9 創元会浜松支部第3回展於浜松市美術館(-14)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/7)
- 11/11 栗山茂版画展於静岡扇子屋(-20)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/14, 毎日東, 中, 西部版11/16, 静岡11/18, 市民美術no.12)
- 11/13 和田金剛展於静岡松坂屋(-19)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/14, 毎日東, 西中版11/16, 市民美術no.12)
- 11/16 「杉山邦彦 ニュースと人」(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/16)
- 11/ 勝俣孝展於沼津ニチイ(-22)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/21)
- 11/ 青木洋子個展於沼津ギャラリーほさか(-23)。(静岡11/22)
- 11/ 青木一郎油絵展於静岡小谷画荘(-24)。(静岡11/20)

- 11/ 笹岡了一展於浜松ギャラリー花菱(-23)。(朝日伊豆岳南,静岡,遠州版11/14,毎日中,西部版11/16)
- 11/18 龍一之介展於静岡吉見書店(-24)。(読売静岡版11/18,朝日伊豆岳南,静岡,遠州版11/21,静岡11/22,毎日東,西中版11/23)
- 11/19 現代美術ゼミナール第9回於清水市中央公民館。講師:波多野哲郎。
- 11/19 伊藤勉・高木俱二人展於静岡西武(-12/1)。(読売静岡版11/21,毎日東,西中版11/23,静岡11/25,11/25,26,朝日伊豆岳南,静岡,遠州版11/28,市民美術no.12)
- 11/21 牧野敏郎個展於静岡扇子屋(-30)。(朝日静岡版11/26,静岡11/29,読売静岡版11/30,市民美術no.12)
- 11/23 落合英男展於静岡吉見書店(-28)。(朝日静岡版11/23)
- 11/23 河西賢太郎展於静岡幸文堂(-28)。(市民美術no.12)
- 11/24 鈴木貞夫父子三人展於浜松市美術館(-28)。(静岡11/20,中日遠州版11/21,毎日中,西部版11/23)
- 11/24 新槐樹社県支部第13回展於県民会館(-28)。(静岡11/20,22,26,読売静岡版11/23)
- 11/ 柚木伸一油絵展於静岡市中央公民館(-28)。(静岡11/26,28)
- 11/30 中村宏個展於東京紀伊国屋画廊(-12/9)。(毎日12/3)
- 12/ 1 堤達男《大石光之助胸像》除幕式於静岡放送会館。(静岡12/1)
- 12/ 1 野中弘士展於浜松ギャラリー花菱(-7)。(毎日中,西部版11/30)
- 12/ 青木和平展於沼津東電サービスステーション(-6)。(毎日東部版12/5)
- 12/ 1 見城春男展於静岡扇子屋(-10)。(読売静岡版12/7,市民美術no.12)
- 12/ 扇子屋画廊第3回奨励賞。柴田俊,高柳千賀子,受賞。(静岡12/2)
- 12/ 2 風土第7回展於沼津ギャラリーほさか(-7)。(毎日東部版11/30,沼津朝日11/30,朝日伊豆岳南,静岡,遠州版12/5)
- 12/ 2 現代美術ゼミ第10回於清水市中央公民館。講師:李禹煥。(朝日伊豆岳南,静岡,遠州版11/28,静岡12/2)
- 12/ 2 白日会静岡支部第3回展於県民会館(-5)。(静岡11/26,12/2,3,読売静岡版12/3)
- 12/ 小島俊男展於沼津富士急天心画廊(-9)。(毎日東部版12/7)
- 12/ 清田英作個展於浜松元城アートギャラリー(-9)。(静岡12/6,毎日中,西部版12/7,朝日遠州版12/7)
- 12/ 4 工藤甲一・芝田米三・広瀬功三人展於静岡松坂屋(-10)。(読売静岡版12/2,7,静岡12/3,朝日伊豆岳南,静岡,遠州版12/5)
- 12/ 4 青木和郎展於沼津東電サービスステーション(-6)。(毎日東部版12/5)
- 12/ 6 伊藤安一・寺尾武司デカパン第2回展於東京村松画廊(-12)。(沼津朝日12/5)
- 12/ 7 浅井昭油絵展於浜松市美術館(-12)。(朝日伊豆岳南,静岡,遠州版12/5,毎日中,西部版12/7,静岡12/10)
- 12/11 松韻会日本画第2回展於静岡松坂屋(-17)。(静岡12/10,11,読売静岡版12/20,朝日伊豆岳南,静岡,遠州版12/12)
- 12/11 高柳千賀子・杉山青樹路二人展於静岡扇子屋(-20)。(朝日伊豆岳南,静岡,遠州版12/9,静岡12/10,20,読売静岡版12/10)
- 12/12 前田守一,鈴木慶則,韓国ソウルの国際教育会議出席(-18)。(清美協no.92)
- 12/15 杉山良雄 秋葉・鳳来寺道スケッチ原画展於駿府画廊(-19)。(朝日静岡版12/12,静岡12/16,読売静岡版12/16)
- 12/ 和田久満油絵個展於富士宮大宮画廊(-22)。(静岡12/17)
- 12/17 行動美術展於浜松市美術館(-24)。(読売静岡版11/30,静岡12/10,17,朝日伊豆岳南,静岡,遠州版12/12,中日遠州版12/19)
- 12/18 大沢康之・遠藤省吾・葛西四雄・貫名獅郎展於静岡松坂屋(-24)。(読売静岡版12/14,朝日静岡版12/15)
- 12/21 村田収・樽松貞雄・斉藤磐三人展於静岡扇子屋(-31)。(朝日伊豆岳南,静岡,遠州版12/19,読売静岡版12/21,静岡12/27)

博物館における小学生を対象とした STEM/STEAM教育プログラムの開発と実践 —博物館ならではの科学教室の在り方の模索—

ふじのくに地球環境史ミュージアム 坂田 尚子・池谷 渉・菅原 大助・山田 和芳
静岡大学創造科学技術大学院 熊野 善介

I. はじめに

本研究は、2017年度、2018年度に実践した「ミュージアムでまなぶ科学教室《3回シリーズ》」において、博物館における新しい科学教育の在り方をSTEM/STEAM教育という視座から模索したものである。2年間、6プログラムの開発と実践において研究を行った成果をここに示すことにする。

この研究を始めた2017年度当初、静岡県初の県立自然系博物館であるふじのくに地球環境史ミュージアムは、2016年3月に開館し1年を経過したばかりの若い博物館であった。ポストバブル期に設置された博物館のあり方に一石を投じるべく、ソフトパワーを重視した教育普及事業の展開を目指し、来館者各世代へのニーズに合わせた対応と、それぞれに向けた連続講座という形態のソフト事業を確立する必要がある。そのため、教育普及事業担当として、現職の中学校・高等学校籍の教師が二人配置されており、中等教育に関しては専門的に対応することができ、また、一般向けには6人の研究者がそれぞれの研究を生かし対応することができた。その一方で、小学校とそれ以前の幼い子どもへの対応が専門職員の不在等により急務の課題となっていた。そのため、各世代へ向けた連続講座の一環として、小学生に向けた「ミュージアムでまなぶ科学教室《3回シリーズ》」を企画することになった。その際、標本などの実物があること、研究者がいることという博物館の特性を生かしながら、これからの科学教育を見据えて実施することを考えたとき、日本でも取り組みが始まっている、STEM教育を取り入れようと考えた。

STEM教育とは、S(科学)、T(技術)、E(工学)、M(算数・数学)のそれぞれの領域を教科横断的に学ぶものである。近年アメリカ合衆国などで実施され、子どもたちが積極的に学ぼうとするといった効果や、学力・スキルなどの伸長が期待されている教育の一つのアプローチ方法である。筆者らが行った2016年9月と2018年1月のSTEM教育に関する現地調査において、アメリカ合衆国ワシントン州、アイオワ州、ミネソタ州などの先進地域では、学校教育ばかりでなく、社会教育施設での教育(インフォーマル教育)で、STEM教育が科学教育とし

て位置づけられ、実践されている現状を見ることができた(坂田・奥村 2017)。授業やプログラムをSTEM教育として、再構築することを「STEM化する(STEMify)」(Meacher, 2016)と表現しており、新たな教育のアプローチ方法として確立しつつあることが分かった。これらの州ではまた、教師や教育にかかわる人々がSTEM化することとは「何を教えるか」という内容に関することを変えるばかりでなく、「どうやって教えるのか」ということも合わせて変化する必要があると共通認識をもち、互いに学びあい高めあう活動をしており、科学教育において大きな転換期を迎えていた。

日本においては、新学習指導要領における学習の方向性として、「何ができるようになるのか」「どのように学ぶのか」「何を学ぶか」という3つの柱(文部科学省2017)が示されている。学校現場および社会教育施設において児童たちへの科学的な教育でそれらを実現しようとするとき、アメリカ合衆国での調査で見いだされた、STEM教育における実践のあり方およびその効果が、日本の文脈におけるプログラム開発と実践に示唆を与えるのではないかと考えた。また、文部科学省ではSociety 5.0社会に対応する教育としてSTEM教育にArt(芸術)の側面を取り入れたSTEAM教育を、高等教育から推進していく立場を明らかにしている(文部科学省 2019)。本研究は、博物館などのインフォーマルな教育の場における低学年の子どもたちへの科学教育を目指すものではあるが、将来を見据えると、STEM教育にArt(芸術)の側面を取り入れることも勘案して、プログラム開発を行った。そのため以下STEM/STEAM教育と表現する。

II. 研究の枠組みと方法

1. 本研究を支えるSTEM教育改革と4つのCについて

STEM教育改革について、アメリカ合衆国を例にその概要を説明したい。アメリカ合衆国では、2010年ころからこれからの世界を生きていくための子どもたちの資質・能力についてさまざまな議論がなされ、21世紀型スキルズとして示されてきた。それらを科学教育で育成するためにはどのような教育

が必要かということで、2013年にNGSS:Next Generation Science Standardがまとめられ(NGSS Lead States 2013)、実践へとつながる研究もなされてきた。NGSSでは、これまでの「科学的な探究(Scientific Inquiry)」から移行して、「科学的工学的なプラクティス(Science and Engineering Practice)」[それぞれの領域の核となる概念(Disciplinary Core Ideas)]「領域を横断する大切な概念(Crosscutting Concepts)」の3次元の学習が示され、これまでの探究活動に工学的な手法を取り入れたプラクティスを強調している。これはまさにSTEM教育を実現することと深く関連すると考えられ、さらに、2015年にSTEM教育法が施行されて広くSTEM教育に取り組まれることになったのである。STEM教育を通して21世紀型スキルズを身につけることができるように教育実践がおこなわれている一方で、21世紀型スキルズは多岐に渡るため、低学年においては、すべてを身につけるために学ぶのは現実的ではないと考えられた。そこで、その中でも基本的で重要であるとされる4つのスキル(4C):Creativity(創造性)、Critical Thinking(批判的・判断的思考)、Collaboration(コラボレーション)、Communication(コミュニケーション)に注目しようとする考え方(Roekel 2015)があり、実践的研究もなされている。本研究は、小学生を対象としたSTEM/STEAM教育プログラムについて議論するものであるため、子どもたちの21世紀型資質・能力に関してその教育的効果を分析するにあたって、この4つのCについて調査していくことにする。また、子どもたちが自ら学びを推し進め主体的で深い学びにつながるものとして、Intrinsic Motivation(内在的なモチベーション)(Ryan & Deci 2000)についても調査することにした。

2. 目的と方法

研究方法としては、実践を重ねながら都度課題を見出し、解決策を試していきながら理論を構築していくというアクション・リサーチを採用した。調査によるデータは、アンケートとワークシートへの記述から得た。

アンケートは、各年度とも3回シリーズの初回の活動前と、それぞれの回の終わりごとに行った。活動前アンケートでは、これまでの学校での活動や勉強のことについて、各回の終わりのアンケートでは当該STEM/STEAM教室での活動のことについて、前述した4つのCと内在的なモチベーションの5項目に関して尋ねた。その内のCritical Thinking(判断的・批判的思考)に関しては、「トライ アンド エラー」する過程で培われていくとされているところから、本研究が小学生向けの

プログラム開発であるため、子どもたちが「試行錯誤」する過程でそのスキルを多用すると考えた。そこで、「上手くいくように考えたり試したり」したかどうかを尋ねることとした。質問は回ごとに、活動内容に応じて若干語尾などを変えたが、基本的な内容は以下の表にあるとおり同じになるようにした(表1)。「とてもよくあてはまる:5ポイント」から「まったくあてはまらない:1ポイント」まで、の5段階の自己評価で答えてもらい、子どもたちの活動に変化があったかどうか見ることにした。

表1. アンケートの項目

項目1	活動に夢中になって取り組めたか (Intrinsic Motivation 内在的なモチベーション)
項目2	よいアイデアを思いついたか (Creativity 創造性)
項目3	上手くいくように考えたり試したりしてみたか (Critical Thinking 判断的・批判的思考)
項目4	自ら発言したり人の話を聞いたりできたか (Communication コミュニケーション)
項目5	協力したり分担したりして活動できたか (Collaboration コラボレーション)

ワークシートでは、「工学のプロセス」を入れるために、STEM/STEAMワークショップの中に「計画する活動:調査方法のデザイン」をプログラムに組み込んだので、計画する欄、アイデアを描く欄を設けた。また、科学概念の理解については、観察する欄、考えをまとめる欄、振り返りの欄の記述からデータを収集した。

STEM/STEAM教育プログラム開発と実践の過程において、以下の3観点で検討し、開発の方法の適切性について議論し、作成のモデルの確立と提案を目指した。

- ▶ 自然科学の概念の理解を促進するような取り組みとなっているのか
- ▶ 主体的で深い学びにつながる内在的なモチベーションと創造性、判断的・批判的思考が育まれるようなプログラムになっているのか
- ▶ 意図的に場を設けることで、子どもたちはコミュニケーション/コラボレーションを活発に行うことができているのか

3. 枠組み

この実践は、博物館において新しい科学教室の姿を模索する研究プロジェクトという位置づけで企画、実施された。とくに、STEM/STEAM教育プログラムを提供することで、子どもたちの体験的な学びが従来の講義型やコントロールされた探究型の科学教育プログラムを超えて、より主体的・対話的で深い学びにつながることを期待したものである。

プログラムをSTEM/STEAM化する場合、具体的には、まずS(科学)、T(技術)、E(工学)、M(算数・数学)のそれぞれの領域の活動を取り入れることが必要条件であると考えた。そして、ただそれらの活動を取り入れるだけでなく、これまでの

試行(坂田・熊野 2018)から意識的に「E:工学のプロセスを取り入れる」、「M:算数・数学の活動と技術の活用を取り入れる」、また、「コミュニケーション/コラボレーション活動を促す手立てを施す」ことを重視した。対象は小学生(30名募集)で、原則各シリーズ3回に参加するものとした。各回とも時間は10:30~12:00、会場は「ふじのくに地球環境史ミュージアム 3F 実習室」で行った。6回のテーマ・内容の概要は表2に示す。担当スタッフは、実践者(ファシリテーター)1名、博士(研究者)1名、参与観察のための補助スタッフ3名(博物館インタープリター)の計5名で実践した。

表2. 6つのプログラムの概要

	テーマ・内容	実施日	参加者数(中央値)
2017年度	1. アメンボが水に浮く秘密を見つけよう	2017年11月3日	229人(2年生)
	2. われにくいシャボン玉をつくろう	2017年12月23日	25人(2年生)
	3. 石をけずって絵を描こう	2018年3月31日	23人(2年生)
2018年度	1. 自然の中の形に注目～自然が生み出す形を追究～	2018年9月29日	28人(3年生)
	2. 種子の工夫～飛ぶ種モデル滞空時間コンテスト～	2018年11月24日	24人(3年生)
	3. 砂を科学する～砂のふるさとどこか～	2019年1月19日	17人(3年生)

4. 実施プログラムの内容

各プログラムにおける基本の活動とその流れは、①観察を通して見つける活動・気付く活動→②STEM/STEAMワークショップ(計画する活動(調査方法のデザイン)、試してみる活動、より良いものを追究する活動、アイデアを表現する活動)→③博士の話、④質問コーナーの4ステップである。そのうち②段階のSTEM/STEAMワークショップでは、S,T,E,M,

Artの各領域の活動を必ず取り入れた(表3.右端の欄参照)。プログラムの最後に「博物館ならではの」③、④のステップを用意した。とくに博士への質問コーナーは、時間が足りない場合活動が終わった後で質問しても良いということにし、博士との交流の場を確保しようとした。あつかうテーマにより、細かい内容は毎回それぞれ適応させ微調整した。また、プログラム内容の具体例として2017年第3回のプログラムを記す(表3)。

表3. プログラムの具体例

2017年度 第3回プログラム 「石をけずって絵を描こう」		STEM/STEAMの領域	
①	同じ河川(安倍川)の、4地点の川原の石の写真から石が小さくなるを見つけ、その後小石はどうなるのか考える (10分)	S	M
②	石から絵の具を作ることに挑戦する (70分) ・石をけずって絵具を作るためのアイデアを出しあう ・絵の具作りの方法を決める ・いろいろな石で試してみて、塗りやすい絵の具を作る ・作った絵の具を使って作品を描く	S T S T	E E M (Art)
③	石にはいろいろな種類があり、色の違いもあることについて博士からお話を聞く (10分)	S	
④	博士への質問(+α)	S	

※右欄のSTEM/STEAMの領域では、各活動に関連していると思われる領域を表示 できるだけ各領域の偏りがないように工夫した

Ⅲ. 実践結果

1. 2017年度の実践結果

a. アンケートより

I.M.(内在的モチベーション)は当初のスコアより大きく増加し、コラボレーションとコミュニケーションに関する質問に対しても当初よりスコアの増加が見られた(図1)。創造性や判断的思考に関してはそれぞれ増加がみられたもののプログラムによって増加に差が見られた。感想欄には、「知らない事が知っていることとむすびついてわからなかったなぞがとけた」「とてもよくできてうれしかった」などと書かれていた。

b. ワークシートより

実験の仕方・アイデアを書く欄に記述が見られ、改良点を書く欄にも記述があった。中には改良点1. 改良点2 改良点3と追加で記述した児童もあり、アメンボをどう浮かせるかについて針金できた足先に注目したり(第1回)、シャボン玉液の調合(第2回)や、石を削る方法などに工夫(第3回 図2)が多く記されたりしていた。考えをまとめる欄では、記述があったのが8割ほど、無かったのが2割ほどで、多くの子どもたちは活動で気付いたことを記録しており、その内容から、科学的な概念理解も進んだことが分かった。博士の話やお互いの質問や意見交換からも気づきがあったことが記されていた。

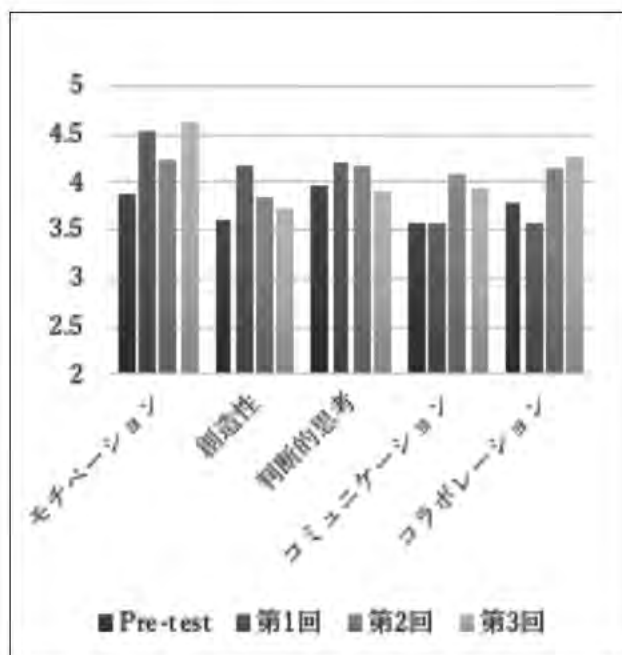


図1. 2017年度の結果



図2. 2017年度第3回の活動の様子

2. 2018年度の実践結果

a. アンケートより

I.M.(内在的モチベーション)のスコアが当初より大きく増加し、判断的(批判的)思考のスコアや創造性のスコアについても平均値の大きな増加が見られた。コミュニケーション、コラボレーションのスコアも若干ではあるが上昇しており、すべての項目でスコアは高くなった(図4)。感想欄には「よく知れた」「楽しかった」などの記述が多く見られ、「役割分担ができてよかった」という感想もあった。

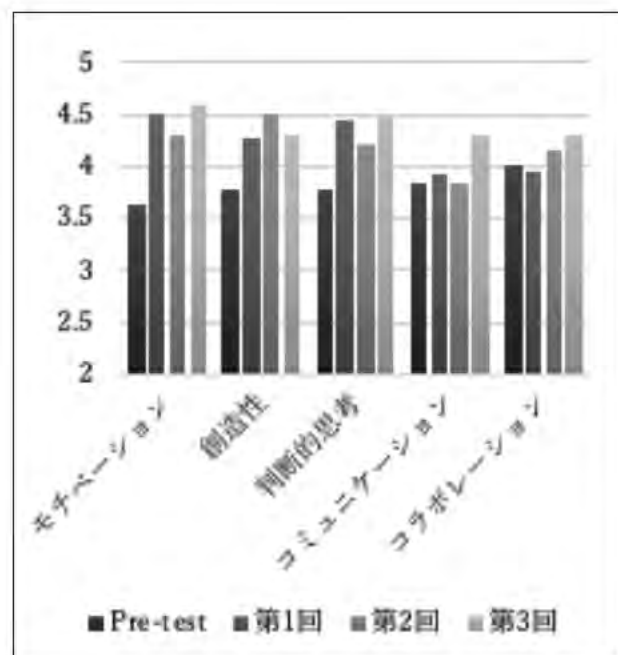


図3. 2018年度の結果

b. ワークシートより

対象物(植物の形、種子、砂)の特徴を書く欄に記載したのが7割程度あった。また、活動①の「観察を通して見つける活動・気付く活動(図3)」と関連付けて、実験の仕方やアイデアを書く欄には、観察する項目、手順など探究の進め方を記述する子もいた。考えをまとめる欄での記述は、一部の子ども(3割程度)に限られていたが、発表内容を班ごとに決める場などでは、ほとんどの子どもたちが、科学的根拠をもって結論付けて発表に結び付けられている事が分かった。



図4. 2018年度第3回の活動の様子

IV. 考察

1. 自然科学の概念の理解

STEM/STEAMワークショップに先立つ、①観察して見つける活動・気付く活動と終盤での③、④での博士とのかかわりの中で、子どもたちがより深く対象物を理解しようとしていることがワークシートの記述から見えた。

あるプログラムでは、「問題解決に取り組む方法を決める活動(計画する活動)」を行う場をSTEM/STEAMワークショップの最初の段階に取り入れたことで、子どもたち自身が活動のデザインをしたため、解決方法のアイデアをもつことができたり、手順を考えたりすることができた。また、他のプログラムでは何をどのように調査するのかなど自分たちの活動をデザインする場面を取り入れたことにより、どこに焦点を絞って調査するのか工夫のしどころが明確になった。そのため、いずれのプログラムでもそれに続く活動が主体的でスムーズに運ぶことが確認された。このような工学的なアプローチである「計画する活動」を経ることで、主体的に活動に取り組むことができ、より深く継続的な科学的探究活動につながり、結果として科学的理解を深める手助けとなっていると言える。

2. I.M.(内在的なモチベーション)と4つのCの育成について

a. I.M.(内在的なモチベーション)について

夢中になって活動できたとする子どものスコアがいずれの年でも大きく増加したため、開発したプログラムは内在的なモチベーションを感じることができるものだったと言える。感想の記述ではいずれの回も、「たのしかった」「うれしかった」「おもしろかった」「よかった」と肯定的な感情が表現されており、また「しった・しれた」「わかった」「やった・できた」とする子ども多くいて、内容を理解したことを示すだけでなく達成感や満足感を感じている可能性も示しており、これらからも内在的なモチベーションを感じていたことを示していると考えられる。このように、一連の学びの過程の中にSTEM/STEAMワークショップを埋め込むことで、内在的なモチベーションを感じることができ、全体を通してより主体的に学ぶことができると推測される。その結果、これらの活動により子どもたちの興味・関心や意欲が高いレベルで維持され、子どもたちのスキルの伸長に資することが見込まれるので、STEM/STEAMワークショップの導入の有用性が示されたということができるとはいえないかと考えられる。

b. 4つのCの育成について

創造性や判断的・批判的思考について、2018年度のスコアは大きく上昇したが、2017年度の上昇の程度は小さかった。これは、プログラムの内容による違いだったり、創造的な活動や判断的・批判的思考の体験を自覚していなかったりすることが理由なのではないかと考えられる。というのも、参与観察で、子どもたちの「試行錯誤」に注目したところ、STEM/STEAMワークショップで、試行錯誤をしている様子が頻繁に見られた。本研究では子どもたちが「試行錯誤」する過程でそれらのスキルを多用するとの考えに基づいており、子どもたちの様子からその自覚に関わらず、創造性や判断的・批判的思考のスキルを使用していることが確認されたと理解するものである。

コミュニケーションとコラボレーションについて、これらの活動は、グループで行うようにデザインされ、意図的に「作業を分担して行う場面」「グループ内で意見をまとめる場面」「グループでの結果を発表する場面」を設定した。活動の内容によって、コラボレーションが行われる程度に差があったが、それでもアンケートによるとコミュニケーションとコラボレーションは普段より活発に行ったとする子どもたちが多く、協力したり分担したりして活動できたので、意図的に場面を設定することで、コミュニケーション、コラボレーションは盛んに行えることがわかった。逆に言うと、これらの場面を設定することこそが、子

もたち同士の学びあいを引き出す鍵になり、子どもたちの主体的で深い学びにつながる重要な要素になると言える。

以上のことから、プログラム作成の段階で、4つのC(スキル)を体験する場面を意識的に取り入れることで、場面に応じて4つのCのスキルを使用する機会を保障し、その伸長の可能性をつくることになると言える。

3. STEM/STEAM教育プログラムのモデルの確立と方法論

本研究で実践したプログラムは、①観察して見つける活動・気付く活動→②STEM/STEAMワークショップ→③博士の話と④質問コーナーという基本的な流れで作成した。この流れに沿ったプログラム展開、活動の配置が、子どもたちのスキルの伸長に有効であることが分かったので、STEM/STEAM教育プログラムの一つの在り方を示せるのではないかと考えている。特に、②のSTEM/STEAMワークショップでは、活動として「計画する活動・調査方法などのデザイン」「試してみる活動・より良いものを作る活動」を取り入れることと、後者の活動において、算数・数学的な活動、技術の活用を意識的に導入することが重要だと考えられる。これは、結果に関して、あいまいになりがちな言葉であらわすだけではなく、数値で明確に表すことにより、低学年においても考えることへの促進や次なる活動への推進、試行錯誤をくり返すことへの手助けになることが見えたためである。さらには、子どもたちの学びあいを引き出し、スキルの伸長と科学的内容の理解をサポートするために、コミュニケーション/コラボレーション活動を促す場面、「博物館ならではの」本物と触れ合う場面を設定する事も留意すべきであることが分かった。

V. おわりに

本研究では、2017年度、2018年度にふじのくに地球環境史ミュージアムで実践した「ミュージアムで学ぶ科学教室」で実践した体験型科学教育プログラムの開発と実践において、博物館における教育プログラムのSTEM/STEAM化の方策を探り、特に低学年を含む児童へのプログラム作成のモデルを確立することを目的とした。

今回の実践研究において、プログラムの流れの中にSTEM/STEAMワークショップを取り入れ、そこでは子どもたちが自ら活動のデザインをすることで「工学のプロセスを取り入れる」、子どもたちの探究活動の結果を明らかにするために「算数・数学の活動と技術の活用を取り入れる」、対話的で深い学びにつながるように「コミュニケーション/コラボレー

ション活動を促す」ことを意識的にプログラムの中に位置づけることで、プログラムのSTEM/STEAM教育化とその実践は十分可能であることが見いだされ、これからのインフォーマルな場での科学教育に新たな方法を示せた。しかし今回の研究では推測の域にとどまった、「博士からお話を聞く」という活動が子どもたちを科学の世界に誘うことにつながり、このことが内在的なモチベーションをより高めているのではないかとこのことの検証、併せて質問コーナーの意義等の検討をすることで、質の高い「博物館ならではの」プログラムを目指し、実践と研究を続けていきたい。

文献

- ・坂田尚子, 奥村仁一(2017): アメリカでのSTEM/STEAM教育視察調査の概要, 熊野善介編, 日本及びアメリカにおける次世代型STEM/STEAM教育の構築に関する理論的実践的研究【基盤研究(B)】研究成果中間報告書(課題番号 16H03058), 第1章, 1-27.
- ・Meagher, T.(2016): STEM/STEAMify Your Teaching, <http://www.slider.net/drtmeagher/msta-2016-STEM/STEAMify-your-teaching>
- ・文部科学省(2017): H29年度小・中学校新教育課程説明会(中央説明会)における文科省説明資料, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1396716.htm
- ・文部科学省(2019): STEAM教育について, 教育課程部会資料5-1, [https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/...](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/)
- ・NGSS Lead States (2013): Next Generation Science Standards for States by States, Washington, D.C.

ほか

[問い合わせ先]

〒422-8017 静岡県静岡市駿河区大谷5762

ふじのくに地球環境史ミュージアム 坂田尚子

2021年度 静岡県博物館協会 役員会、総会報告

役員会、総会の実施について

例年、当協会役員会、総会は、会員にお集まり頂いた上で5月中に開催してきたが、今年度はコロナ禍のため、ご参集頂いての開催は不可能だと判断し、役員の方々のご承諾を頂いた上で、書面により開催することとなった。議案についての事務局案に対し、採決の結果
賛成71票
反対 0票
採決委任状 2通
これによって今年度の議案は、全て原案通り可決された。
可決された事業計画に沿って、今年度も協会活動は進められたが、幾つかの事業では変更を余儀なくされた。
以下、概略を述べる。

今年度の地域セミナーについて

5月の役員会、総会で可決されたのが、

ペルナール・ビュフェ美術館「おうちでミュージアム」→¥100,000-
佐野美術館「消しゴムはんこでカスタムデザインのタンブラーをつくろう」→¥20,000-

これらに加え、秋季地域セミナーとして、

掛川市二の丸美術館「『掛川物語—掛川文化の原点—松ヶ岡・山崎家ゆかりの遺品展』関連講座」→¥52,000-
静岡市立登呂博物館「登呂歴史リレー講演会「水を治める者たち—水がつなぐ静岡の歴史—」」→¥45,058-
ふじのくに地球環境史ミュージアム「透明標本をみる 2020 特別編」→¥52,942-

以上3案が採択された。
だが、コロナ禍により、佐野美術館事業が中止、掛川市二の丸美術館事業はオンライン配信に形態を変更して実施することとなった。

研修会、講習会について

今年度の事業計画として、年間2、3回の研修会や講習会の実施を承認して頂いていたが、コロナ禍により、会員に参集して頂いての事業を実施するのが困難だと判断された。このため、研修会等の事業を、1つに絞り、可能な実施方法を探ることとした。それが、11月3日(火祝、文化の日)に実施したシンポジウム「これからのミュージアムを考えよう」である。

登壇者：森 道彦氏(京都国立博物館研究員)
中野慎之氏(文化庁文化財第一課絵画部門 文部科学技官)
木下直之氏(当協会会長・静岡県立美術館館長)
進 行：川口幸也氏(前立教大学文学部学芸員課程教授)
司 会：椿原靖弘氏(県博協事業推進グループ・フェルケール博物館学芸部長)
協 力：NOKIOO(動画配信)

このシンポジウムはコロナ対策のため無観客で開催し、同時にYouTubeで生配信、一定期間後に一般配信を終了して、現在は会員のみの視聴可能である。このシンポジウムの詳細については、本紀要の関連ページを参照されたい。

来年度の役員会、総会、ひいては協会事業そのものの見通しも、コロナ禍の状況如何であり、不透明である。
会員の博物館活動に資するため、出来るだけ柔軟な対応を取っていきたい。

(事務局 新田)

2020(令和2)年度役員会、総会の主なスケジュール

4月20日(月) この日付文書で、役員会、総会の開催方法を会員に周知。
5月13日(水) 今年度役員会、総会の資料を、全会員宛に発送。
5月15日(金)～21日(木) 審議期間。
※ご意見、ご質問はメールかファックスで受付、事務局からの回答はウェブの当協会公式サイトにある会員ページ上の掲示板で行なうこととした。
5月25日(月)～28日(木) 採決期間。
※28日(木)必着で、「採決の委任状」または「採決用紙」を、事務局宛にお送り頂いた。
6月1日(月)以降 今年度役員会、総会の結果を、会員宛に送付。

(参考)

2020(令和2)年度 事業計画

1 役員会・総会の開催

コロナウィルス感染拡大防止のため、今年度は郵送資料に基づき、協会ウェブ掲示板での審議とする。

議事：

- (1) 静岡県博物館協会・東海地区博物館連絡協議会の役員改選について(案)
- (2) 令和元年度事業報告及び決算
- (3) 令和2年度事業計画及び予算
- (4) 令和2年度地域セミナーについて
- (5) 新規入会館園について

2 研修会・講習会の実施

年2～3回程度実施。

3 地域セミナーの開催

別案参照

※今年度はコロナ禍の影響によって応募件数が少ない上、歳入の点でどの館の事業も逼迫していると思われることから、9月頃に再募集し、11月～3月にかけての事業について、共済を検討したい。再募集する地域セミナー総事業費は¥150,000-とし、今年度のみの特別措置とする。

4 講演会等の共催・後援

5 静岡県博物館協会研究紀要 第44号の刊行

※紀要への査読制度導入は見送りとする。

(事業推進グループによる主な議論)

- ・査読は1回で済む訳ではなく、書き直しの時間も必要。
- ・編集委員会の開催頻度も多い。
- ・査読付きにすることで、投稿者がさらに減るのではないか。
- ・県博協は学会ではないので、査読結果は求められるものではない。

(結論)

- ・県博協紀要に、査読制度は導入するべきではないと考えられる。

6 静岡県博物館協会ホームページの保守・運営

※昨年度末より、イベント情報欄を改善し、告知能力は向上しているため、この部分で会報の担ってきた役割はカバーされている。

7 東海地区博物館連絡協議会理事会及び総会への出席

※通例、静岡→愛知→山梨→神奈川→岐阜の順に開催している。昨年度は山梨県で開催したが、神奈川県では今年度、第68回全国博物館大会が開催されるため、東海地区博物館連絡協議会は岐阜県で開催、神奈川県での開催は来年度の予定。

8 防災事業

- ・相互援助体制検討
 - 2018(平成30)年度から、連絡網を稼働。
 - 2019(平成31、令和元)年度から、協会ウェブサイト上の掲示板で安否確認結果を共有。
 - コロナ禍についての諸情報を、掲示板で会員と共有中。

9 広報及び情報交換

10 事業推進グループによる事業の推進

- ・メンバーの任期は2年、2020(令和2)年度末まで。
- ・事業推進グループ会合
 - 年4回程度開催。

※昨年度総会の議決を受け、今年度より会報発行は取りやめ、総会や講習会等の記事は紀要へ、館園イベント情報はウェブサイトへ、それぞれ掲載していくこととする。

静岡県博物館協会 研究紀要投稿規程

1. 投稿を受け付ける原稿

(1) 内容規定

加盟館園職員が従事している職務(展示・調査研究・保存・教育普及・その他)に関する論文、報告、事例紹介、収蔵品紹介等
※専門分野に関するものに限りません。学芸職員以外の投稿も歓迎します。

(2) 執筆者規定

加盟館園職員一人もしくは複数人の執筆によるものとします。複数人による場合、全執筆者の1/3が加盟館園職員であることを条件とします。
※会員活動の報告や論評等で意義が認められる場合、例外を認めることがあります。

2. 入稿規定

(1) 原稿の種類

日本語による原稿を基本とします。

(2) 入稿の方法

デジタルデータと印字原稿、必要なら図版(ポジ、印画紙写真、デジタルデータ、図面等)等を併せて提出して下さい。
デジタルデータはOSを問いませんが、必ずテキストデータを添付して下さい。図版のデジタルデータはJPEGに統一して下さい。
※万一の場合に備え、原稿提出の際には必ず手元に控えを残しておいて下さい。

(3) 分量

ページ数目安(1ページ当たり)	事例報告等(1~4ページ分程度)	事例報告等(1/2ページ分)
論文 縦書き 写真無しの場合 2,000字	縦書き 写真無しの場合 2,000字	縦書き 写真無しの場合 1,100字
写真有りの場合 1,600字	写真有りの場合 1,600字	写真有りの場合 900字
横書き 写真無しの場合 2,000字	横書き 写真無しの場合 2,000字	横書き 写真無しの場合 1,100字
写真有りの場合 1,600字	写真有りの場合 1,600字	写真有りの場合 900字

(4) 文字原稿(印字原稿は次の書式でご提出下さい)

字数(1シート) A4版 40字×30行
※誌面レイアウト・フォーマットに揃えた入稿も歓迎します。レイアウト見本をご希望の方は、事務局にお問い合わせ下さい。

(5) 図版原稿(1ページの版面はA4)

カラー(巻頭図版) 掲載希望があればご相談下さい。
モノクロ すべて挿図として扱います。

- a カラー図版原稿には、目次用のデータを明示して下さい。
- b 挿図原稿裏面に挿図番号とネームを記入して下さい。デジタルデータの場合は、データ名に明示して下さい。
- c 挿図原稿のコピーもしくは印刷された挿図原稿に、掲載希望範囲を、製版作業の支障にならないよう、明示して下さい。
- d レイアウトや掲載時の大きさの希望がある場合は、その旨注記して下さい。
- e 本文の印字原稿に、挿図番号で挿入箇所を示して下さい。

(6) 図版の著作権申請

写真等掲載に関する作品所蔵者・著作権者からの許諾等取得は、執筆者が行なって下さい。なお、当協会紀要は協会ウェブサイトにもアップされます。

(7) 執筆者の表示

原稿には氏名・自宅住所および所属機関所在地(それぞれ〒、Tel.、Fax.番号)・部署・役職を明記して下さい。氏名には読み仮名をふって下さい。
成果品である紀要には、氏名と所属のみ記載します。

(8) キーワードの設定

ウェブ上での検索を容易にするため、記事のキーワードを設定して下さい。

3. 原稿の送付先

原稿は、下記宛にお送りいただくか、ご持参下さい。

〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田53-2 静岡県立美術館内
静岡県博物館協会事務局
Tel. 054-263-5857
Fax. 054-263-5742

4. 日程および申込・校正手順

(1) 日程（予定）

申込締切 2021年 11月末日
入稿締切 2022年 1月末日
発行予定 2022年 3月末日

(2) 申込方法

申込締切までに、下記項目を静岡県博物館協会事務局宛にご連絡下さい。

- ・ 執筆者 （複数執筆者の場合は、全員の氏名と所属を明記）
- ・ 題名 （仮題で可）
- ・ 分量見込（レイアウト見本による全ページ数で表示。図版、表等の希望も含む。）
- ・ 縦書き、横書きの希望

※分量は、1本の論文当たり15ページ以内を基本とします。

(3) 申込の確認

静岡県博物館協会事務局は、申込締切後2週間以内に、執筆者申込時の分量見込みに基づいて紀要製作の見積もりを行いません。予算上製作が可能であれば、全申込者に申込通りの分量での執筆が可能である旨を連絡します。予算上不可能な場合は、申込者に対して分量についてのご相談を行ない、ご執筆いただく分量上限を決定します。

(4) 入稿の方法及び原稿の掲載

入稿は、上述2の「入稿規定」に従って、上述3の「原稿の送付先」に送付するか、ご持参下さい。4-（3）で示した事情により、実際に入稿した原稿が分量見込みより増えた場合、執筆者に分量を減らしていただくか、当該号での掲載を取りやめることがあります。

(5) 校正

入稿締切までに入稿された場合、執筆者は文字校正（図版等を含む）2回を行なうことが出来ます。入稿締切が守られなかった場合は、この限りではありません。

(6) レイアウト

レイアウトはフォーマットに基づき、執筆者の希望を尊重して行ないますが、最終的には静岡県博物館協会事務局が決定します。

5. その他

(1) 文責

原稿の内容についての文責は、全て執筆者にあるものとします。著作権や誤植、不適切な表記等の問題について静岡県博物館協会及び静岡県博物館協会事務局は、一切の責任を負いません。

(2) 執筆者への成果品割当

執筆者には、30部を贈呈します。複数執筆者の場合、全員分を合わせて90部を上限として贈呈することが出来ます。

(3) 抜き刷りの作成

執筆者から希望のある場合、実費をご負担いただくことで、執筆箇所の抜き刷りを作成します。静岡県博物館協会事務局にご相談下さい。

静岡県博物館協会 研究紀要 第44号
